

わが町

織田作之助

青空文庫

第一章 明治

1

マニラをバギオに結ぶベンゲット道路のうち、ダグバン・バギオ山頂間八十キロの開鑿は、工事監督のケノン少佐が開通式と同時に將軍になったというくらいの難工事であつた。

人夫たちはベンゲット山腹五千フィートの絶壁をジグザグによじ登りながら作業しなければならず、スコールが来ると忽ち山崩れや地滑りが起つて、谷底の岩の上へ家守のようにたたき潰され

た。風土病の危険はもちろんである。

起工後足掛け三年目の明治三十五年の七月に、七十万ドルの予算をすっかり使い果してなお工事の見込みが立たぬいいわけめいて、

「……山腹は頗る傾斜が急で、おまけに巨巖はわだかまり、大樹が茂つて、時には数百メートルも下つて工事の基礎地点を発見しなければならぬ。しかも、そうした場所にひとたび鶴嘴を入れるや、必らず上部に地滑りが起り、しだいに亀裂を生じて、ついにはこれが数千メートルにも及ぶ始末である……」

もつて工事の至難さを知るべしという技師長の報告が、米本国の議会へ送られた時には、土民の比律賓人フィリッピンをはじめ、米人・支

那人・露西亞人・西班牙人^{スペイン}等人種を問わず狩り集められていた千二百名の人夫は、五メートルの工事に平均一人ずつの死人が出るという惨状におどろいて、一人残らず逃げだしてしまっていた。けれど、本国政府は諦めなかった。熱帯地にめずらしく冬は霜を見るというくらい涼しいバギオに避暑都市を開いて、兵舎を建築する計画の附帯事業として、ベンゲット道路の開鑿は、比島領有後の合衆国の施政に欠くことの出来ないものであった。

工事監督が更迭して、百万ドルの予算が追加された。新任のケノン少佐はさすがにこれらの人種の恃むに足らぬのを悟ったのか、マニラの日本領事館を訪問して、邦人労働者の供給を請うた。邦人移民排斥の法律を枉げてまでそうしたのは、カリフォルニアを

開拓した日本人の忍耐と努力を知っていたからであろうか。日本は清国との戦いにも勝っていた……。

領事代理の岩谷書記は神戸渡航合資会社の稲葉卯三郎をケノン少佐に推薦した。稲葉卯三郎が通訳長尾房之助を帯同、政庁を訪れると、ケノン少佐は移民法に接触してはならぬからと口頭契約で、人夫九百名、石工千名、人夫頭二十名、通訳二名、合計千九百二十二名の労働者の供給を申込んだ。

日給は道路人夫一ペソ二十五セント、石工二ペソ、人夫頭二ペソ五十セント、通訳は月給で百八十ペソと百ペソ、労働時間は十時間、食事及び宿舎は官費で病気の者は官営病院で無料治療、なおマニラ・ダグバン間の鉄道運賃は政府負担という申し分のない

条件であつた。

第一回の移民船香港丸が百二十五名の労働者を乗せて、マニラに入港したのは明治三十六年十月十六日であつた。

股引、腹掛、脚絆に草鞋ばき、ねじ鉢巻きの者もいて、焼けだされたような薄汚い不気味な恰好で上陸した姿を見て、白人や比律賓人は何かぎよつとし、比人労働組合は同志を糾合して排斥運動をはじめ、英字新聞も日清戦争の勇士が比律賓占領に上陸したと書き立てた。

それを知つてか知らずに、百二十五名の移民はマニラで二日休養ののち、がたがたの軽便鉄道でダグバンまで行き、そこから徒歩でベンゲットの山道へ向つた。

まず牛車^{カルトン}を雇って荷物を積み込み、そして道なき山を分け進んだが、もとより旅館はなく日が暮れると、ごろりと野宿して避難めいた。

鍋釜が無いゆえ、飯は炊けず、持ってきたパンはおおかた蟻に食い荒されておまけにひどい蚊だ。

そんな苦労を二晩つづけて、やっと工事の現場へたどり着いて見ると、断崖が鼻すれすれに迫り、下はもちろん谷底で、雲がかり、時にはぐらぐらした岩を足場に作業して貰わねばならぬと言う。

ただでさえ異郷の、こんなところで働くのかと、船の中ではあらくれで通っていた連中も、あつと息をのんだが、けれど今更日

本へ引きかえせない。旅費もなかった。

石に噛りついてとはこの事だと、やがて彼等は綱でからだを縛って、絶壁を下りて行つた。

そして、中腹の岩に穴をうがち、爆薬を仕掛けるのだ。点火と同時に、綱をたぐつて急いで攀じ登る。とたんに爆音が耳に割れて、岩石が飛び散り、もう和歌山県出身の村上音造はじめ五人が死んでいた。

間もなくの山崩れには、十三人が一度に生き埋めになった。

十一月にはコレラで八人とられた。

死体の見つかったものは、穴を掘つて埋めたが、時には手間をばういて四五人いっしょに一つの穴へ埋めるといふありさまであ

った。

坊主も宣教師も居らず、線香もなく、小石を立てて墓石代りの目じるしにし、黙祷するだけという簡単な葬式であった。ひとつには、毎日の葬式をいちいち念入りにやっていたは、工事をするひまが無くなるためでもあったろう。それ程ひんぱんに死人が出た。

そんな風にだんだんに人数が減って行き、心細い日が続いたが、やがて第二回、第三回……と引き続いて移民船が来て、三十六年中には六百四十八名が、三十七年中にはほぼ千二百名がマニラへ上陸し、マニラ鉄道会社やマランガス・バタアン等の炭坑へ雇われた少数を除き、日給一ペソ二十五セントという宣伝に惹かれて

殆んど全部ベンゲットへ送られて来た。内地では食事自弁で、五十銭が精一杯だった。一ペソは一円に当る。しかも、ベンゲットでは食事、宿舎、医薬はすべて官費だということだ。

けれど、来て見ると、宿舎というのは、竹の柱に草葺の屋根で、土間には一枚の敷物もなく、丸竹の棚を並べて、それが寝台だ。蒲団もなく、まるで豚小屋であつた。

食物もひどかつた。

虫の喰滓のような比島米で、おまけに鍋も釜もないゆえ、石油罐で炊くのだが、底がこげついても、上の方は生米のまま、一日一人当り一ポンド四分ノ三という約束の量も疑わしい。

副食物は牛肉又は豚肉半斤、魚肉半斤、玉葱又はその他の野菜

若干量という約束のところを、二三尾の小鰯に、十日に一度、茄子が添えられるだけであつた。

たちまち栄養不良に陥つたが、おまけに雨期になると、早朝から濡れ鼠のまま十時間働いてくたくたに疲れたからだで、着がえもせず死んだようになって丸竹の寝台に横たわり、一晩中蚊に食われているという状態ゆえ、脚気で斃れる者が絶えなかつた。

三十七年の七、八、九の三カ月間に脚気のために死んだ者が九十三人であつた。平均一日に一人の割合である。なお、マラリヤ、コレラ、赤痢で死ぬ者も無論多かつた。

契約どおり病院はあつた。が、医療設備など何ひとつなく、ただキナエンだけは豊富にあると見えて、赤痢にもキナエンを服ま

された。なお、病院で食べさせられる粥は米虫の死骸で小豆粥のように見えるというありさま故、入院患者は減り、病死者がふえる一方であつた。

すべては約束とちがっていたのだ。

こんな筈ではなかったと、鶴田組の三百名はどうとう人夫頭といっしよに山を下つてしまった。

そうしたものの、しかし雇われるところといつてはマラバト・ナバトの兵營建築工事か、キャビテ軍港の石炭揚げよりほかになく、日給はわずかに八十セントで、うち三十五セントの食費を差し引かれるようではお話にならず、また、比律賓人の空家にはいりこんで自炊しながらの煎餅売りも乞食めく。

良い思案はないものかと評定していると、関西移民組合から派遣されて来たという佐渡島他吉が、

「言うちやなんやけど、今日まで生命があつたのは、こら神さんのお蔭や。こないだの山崩れでころツと死てしもたもんやおもて、もういつペンベンゲツトへ戻ろやないか。ここで逃げだしてしもてやな、工事が失敗すかたんになつて見イ、死んだ連中が浮かばれへんやないか。わいらは正真正銘の日本人やぜ」

と、大阪弁で言つた。すると、

「そうともものし、俺うららはアメジカ人やハリピン人や、ドシア人の出来なかつた工事こうりを、立派じつぱにやつて見せちやるんじや。俺うららがマジダへ着いた時、がやがや排斥さらしよつた奴らへ、お主んしやらこ

の工事こうりが出来るか、いっぺん言うて見ちやらな、日本人であらいでよ」

と、言う者が出て、そして、あとサノサ節で、

「一つには、光りかがやく日本国、日本の光を増さんぞと、万里荒浪ね、いといなく、マニラ国へとおもむいた」

と、唄いだすと、もう誰もベンゲットへ帰ることに反対しなかった。

そうして、元通り工事は続けられたが、斃れた者を犬死にしないうために働くという鶴田組の気持は、たちまち他の組にも響いて、何か殺気だった空気がしんと張られた。

屍を埋めて日が暮れ、とぼとぼ小屋に戻って行く道は暗く、し

ぜん気持も滅入ったが、まず今日いちにちは命を拾ったという想いに夜が明けると、もう仇討に出る気持めいてつよく黙々と、鶴嘴を肩にした。

鉛のように、誰も笑わず、意地だけで或る者は生き、そして或る者は死んだ。

三十七年の十月の或る夜、暴風雨が来て、バギオとは西班牙語で暴風のことだと想いだした途端に、小屋が吹き飛ばされ、道路は崩れて、橋も流された。それでも腑抜けず、ぶるぶるふるえながら夜を明かすと、死骸を埋めた足で早速工事場へ濡れ鼠の姿を、首垂れて現わした。

マニラのキャップ区に雑貨商を出している太田恭三郎が、アメ

リカ当局と交渉して、ベンゲット移民への食料品納入を請負い、味噌、醤油、沢庵、梅干などを送って来てくれたのは、そんな時だった。

2

全長二十一マイル三十五のベンゲット道路が開通したのは、香港丸がマニラへ入港してから一年四カ月目の明治三十八年一月二十九日であつた。

千五百名の邦人労働者のうち六百名を超える犠牲者があつたと、開通式の日に残つた者は全部泣き、白人・比律賓人・支那人

たちが三年の日数と七十万ドルの金を使つてもなお一キロの開鑿も出来なかつた難工事を、われわれ日本人の手で成しとげたのだという誇りはあつても、喜びはなかつた。

おまけに工事が終ると、翌日からひとり残らず失業者で、なんとかしてくれと泣きつくには、アメリカ当局はあまりに冷淡であつた。山を下り、マニラの日本人経営の旅館でごろごろしているうちに、儲けた金も全部使い果して、帰国するにも旅費はなく、うらぶれた恰好で、マニラの町をぞろぞろうろしているのを、見兼ねて、

「皆んな、ダバオの麻山へ働きに行け！」

太田恭三郎はすすめたが、ダバオはモロ族やバゴボ族以外に住

む者のないおそろしい蛮地で、おまけにマラリヤのたちの悪さはベンゲット以上で、医者もない。ダバオの麻山からベンゲット道路工事の方へ逃げだして来た者もあるくらいだ、そんなところへ誰が命を捨てに行くものかと、誰ひとり応じようとしなかったのを、日本人の医者も連れて行く、味噌も野菜も送ってやる、わるいようには計らぬ故、おれに任せると太田は説き伏せた。

「このまま餓死すると思えば、ダバオも極楽だぞ」

言われてみると、なるほど背に腹はかえられず、やがてマニラからぼろ汽船で二十日近く掛ってダバオにつき、遠くの森から聴えて来るバゴボ族の不気味なアゴンの音に肝をひやしながら、やがて麻山で働きだし、暫らくすると、バギオにサンマー・キャピ

タル（夏の都）がつくられて、ベンゲット道路がダンスに通う米人たちのドライヴ・ウエーに利用されだしたという噂が耳にはいった。

そんな目的でおれたちの血と汗を絞りとっていたのかと、皆んなは転げまわって口惜しがり、工事が済むといきなりおっぽり出されたことへの怒りも砂を噛む想いで、じりじり来たが、とりわけ佐渡島他吉はいきなり血相をかえて、ダバオを発って行き、何思ったのかマニラの入墨屋山本権四郎の所へ飛び込んだ。

そうして、背中いっぱいに青龍をあばれさせた勢いで、マニラじゆうへ凄みを利かせ、米人を見ると、

「こらッ。ベンゲット道路には六百人という人間の血が流れてる

んやぞオ。うかうかダンスさらしに通りやがって見イ。自動車のタイヤがパンクするさかい、要心せエよ。帰りがけには、こんなお化けがヒュードロドロと出るさかい、眼エまわすな。いつペン、頭からガブツと噛んでこましたるか」

と、あやしい手つきでお化けの恰好をして見せた途端に、いきなり相手の横面を往復なぐりつけた。

「文句があるなら、いつでも来い。わいはベンゲツトの他あや^たんや」

それで、いつか「ベンゲツトの他あやん」と綽名がつき、たちまち顔売ったが、そのため敬遠されて、やがて僅かな貯えを資本にはじめたモンゴ屋（金時氷や清涼飲料の売店）ははやらなか

った。

国元への送金も思うようにならず、これではいつたいなんのために比律賓まで来たのかわけが判らぬと、それが一層「ベンゲツトの他あやん」めいた振舞いへ、他吉を追いやっていたが、やがて「お前がマニラに居てくれては……」かえつてほかの日本人が迷惑する旨の話も有力者から出たのをしおに、内地へ残して来た妻子が気になるとの口実で、足掛け六年いた比律賓をあとにした。神戸へ着いて見ると、大阪までの旅費をひいて所持金は十銭にも足らず、これではいくらなんでも妻子のいる大阪へ帰れぬと、さすがに思い、上陸した足で外人相手のホテルの帳場をおとずれ、俵夫に使うてくれと頼みこむと、英語が喋れるという点を重宝が

られて、早速雇ってくれた。

給料はやすかったが、波止場からホテルへの送り迎えに客から貰うチップが存外莫迦にならず、ここで一年辛抱すれば、大阪へのよい土産が出来る、それまではつい鼻の先の土地に妻子が居ることも忘れるのだ、という想いを走らせていたが、三月ばかり経ったある日、波止場で乗せた米人を、どう癪にさわったのか、いきなりホテルの玄関で、俾もろともひっくりかえし、おまけに謝ろうとしないのがけしからぬと、その場でホテルを馘首になった。その夜、大阪へ帰った。六年振りの河童路地がたろじのわが家へのそつとはいって、

「いま、帰ったぜ」

しかし、返事はなく、家の中はがらんとして、女房や、それからことし十一歳になつてゐる筈の娘の姿が見えぬ。

不吉な想いがふと来て、火の氣のない火鉢の傍に半分腰を浮かせながら、うずくまつてゐると、

「誰方——？」

ぬつと軒かどぐち口から顔を出した者がある。

「ようべさんか？」

相変らずでつぷりして、平目のような頬ぶくれた顔は、六年会わぬが、隣家に住んでゐるべ団治だと、一眼でわかつた。

「なんや、おまはんやつたんか。今時分人の家へ留守中にはいつて、何やらごそごそしてゐるさかい、こらてつきり泥的やと思たが

な……」

前座ばかり勤めているが、さすがに落語家で、×団治のものの言い方は高座の調子がまじっていて、他吉は大阪へ帰って来たという想いが強く来た。

「——しかし、他あさん、よう帰って来たな。いったいいつ帰って来てん？ 言や言うものの、お前、もう足掛け六年やで」

「いま帰ったとこや」

他吉はちよつと固垂をのみ、

「——ところで、皆どこイ行きよつてんやろ。影も形も見えんがな」

夜逃げでもしたのではないかという顔で、訊くと、

「声はすれども、姿は見えぬ、ほんにお前は屁のような……」

×団治はうたうように言つて、

「——今日はお午の夜店^{うま}やさかい、そこイ行つたはんネやろ」

「さやか。——」

他吉はああ、よかつたと、ほつとしたが、急に唇をとがらせて、
「このくそ寒いのに、夜店みたいなもん、見に行かんでもええの
に……。子供が風邪ひいたらどないすんねん。ほんまに、うちの
かかはど阿呆やぜ」

そう言ふと、×団治は、なにを莫迦なこと言うてんねん、他あ
やんよう聴きやと、一喋り喋る弾んだ口つきになつて、

「お鶴はんが、何の夜店見物に行くひとかいな。お鶴はんはな、

お初つあんと一緒に夜店へ七味^{なないろ}唐辛子^{からい}を売りに行つたはるねん
ぜ」

「えっ？ ほな、なにか。夜店出ししとんのんか」

他吉は毛虫を噛んだような顔をした。

「さいな。おまはんがヘリピンとかルソンとか行つたはええとして、ちつとも金は送つては来んし……」

「送つたぜ」

「はじめの二三年やろ？ あとはお前鏝一文送つて来ん、あとに残つた二人がどないして食べて行けるねん？ 夜店出しなとせんと、餓死してしまうやないか。ほんにお前は薄情な亭主やぜ。お鶴はんは築港に二階つきの電車が走つても、見に行きもせんと、

昼は爪楊子の内職をして、夜はお前、夜店へ出て、うちのくそ親爺め言うて、ぽろぽろ涙こぼしこぼし、七味混ぜたはんねんぜ」
いかにもそれらしい表情で、七味唐辛子を混ぜる恰好をして見せたゞ団治の手つきを見るなり、他吉は胸が熱くなり、寒い風が白く走っている戸外へ飛び出した。

谷町九丁目の坂を駈け降りて、千日前の裏通りに出ているお午の夜店へ行くと、お鶴が存外小綺麗な店にちよこんと坐つて、ガラス箱の蓋を立てかけた中に前掛けをまいた膝を見せ、赤切れした手で七味を混ぜていた。娘の初枝は白い瀬戸火鉢をかかえて、まばらな人通りを、きよとんと見あげていた。

物も言わずにしょんぼり前に立った。

「おいでやす」

言つて見上げて、お鶴は他吉だとすぐ判つたらしく、

「阿呆んだら！」

「御機嫌さん。達者か」

他人にも言うような口を利くと、もう一度、

「阿呆んだら！」

お鶴は泣いていた。

それが六年振りの夫婦の挨拶であつた。初枝は父親の顔を忘れてゐるらしかつた。水漬を鼻の下にこちこちに固めて、十一歳よりは下に見えた。

「あんた、なんぜ、手紙くれへんかつてん。帰るなら帰ると……」

お鶴の髪の毛は、油気もなくばさばさと乱れて、唐辛子の粉がくつついていた。

唐辛子の刺戟がぷんと鼻に眼に来て、他吉は眼をうるませた。

「出せ言うたカテ、出せるかいな。わいに字が書けんのは、お前かてよう知ってるやろ。亭主に恥かかすな」

他吉はわざと怒ったような声で言い、

「——しかし、大阪は寒いな」

と、初枝のかかえている火鉢の傍へ寄った。

翌日から、他吉がひとりで夜店へ出て、七味唐辛子の店を張った。

場割りの親方が、他吉を新米だと思ってか、

「唐辛子はバナナ敲きの西隣りや」

と、いちばんわるい場所をあてがうと、他吉はいきなり「ベンゲツトの他あやん」の凄みを利かせて、良い場所へ振りかえて貰ったが、

「ああ、七味や、七味や、辛い七味やぜ、ああ、日本勝った、日本勝った、ロシヤ負けた。ああ、七味や、七味や！」

普通爺さん婆さんがひっそりと女相手に売っている七味屋に似合わぬ、割れ鐘のような掛け声をだしたので、客は落ち着いて、

七味の調合にこのみの注文をつけることも出来ず、自然客足は遠ざかった。

招き猫の人形みたいに、ちよこんと台の上に坐つて、背中を猫背にまるめてごしごし七味を混ぜていると、いっぺんに精が抜けてしまい、他吉はベンゲットのはげしい労働がかえつてなつかしく、人間はからだを責めて働かな、骨がぶらぶらしてしまうという想いが、背中の青龍へじりじり来て、いたたまれず、むやみに赤いところを多くして、あつと顔をしかめるような辛い七味を竹筒に入れていたが、間もなく七味屋を廃してしまった。

「あんた、またヘリピンへ行く積りとちがうか」

お鶴は気が気でなかったが、さすがに帰った早々、二人を見捨

てて日本を離れることも出来ず、神戸で三月いた間にためて置いた金をはたいて、人力車の古手を一臺買い、残ったからだ一つを資本に、長袖の法被^{はっぴ}のかわりに年中マニラ麻の白い背広の上着を羽織った異様な風態で俵をひいて出て「ベンゲットの他吉」の綽名はここでも似合った。

二年経った夏、お鶴は冷え込みで死んだ。

他吉の留守中、まる四年夜店出しをしていた間にぬれた夜露が女の身にさわったのかと、博覧会も見ず、二階つき電車がどこを走っているかも知らなかったということもなにか不憫で、他吉は男泣いたが、死んで行くお鶴はその愚痴はいわず、ただ、

「初枝の身がかたづくまで、あんたもベンゲットの他あやんや言

われて、ええ氣になつて、売り出したり、うかうかよその国へ行つてしまわんようにしなはれや。大体、あんたは昔からおつちよこちよいやさかい、氣イつけて、阿呆な真似をしなはんなや」

西日のかんかん射し込む奥の四畳半に敷いた床の上で、蚊細い声の意見をして、息絶えた。

夏になると、しきりに比律賓への郷愁にかり立てられる他吉の腹の虫を、お鶴は見抜いていたのだらうか。

お鶴の死に足止めされて、八年が経った。

一日何里俵をひいて走つても、狭い大阪の町を出ることは出来ない、築港へ客を送るたび、銅羅の音に胸をどきどきさせているうちに、もう娘の初枝は二十一歳であつた。

節分の日、もうその歳ではいくらか気がさす桃割れに結って、源聖寺坂の上を、初枝が近所の桶屋の職人の新太郎というのと、肩を並べて歩いている姿を、他吉は見つけた。

すぐ寺の境内に連れ込み、新太郎の横面を殴りつけた勢いで、初枝の顔にも手が行ったが、折角の髪をつぶしてはと、この方はさすがに力を抜いて、他吉の眼がさきに火が出るくらい、情けなかった。

こんな不仕鱈ふしだらな女をひとり放って置いて、比律賓へ行ってしまった。ええ、どうなっていたことかと、他吉はひやつとしたが、間もなく行われた町内のマラソン競争で桶屋の新太郎は一等をとった。

新太郎は少年団の世話役で、毎夜子供たちを集めて、生いくだま国魂神

社の裏の空地でラツパを教え、彼の吹くラツパの音は十町響いて、銭湯で冬も水を十杯あびるのは、他吉のほかは町内で新太郎ただひとりであつた。なお、銭湯の帰り、うどん屋でラムネ一杯のまづ、存外律儀者であつた。

マラソン競争のあつた翌日、他吉はれいの上着のポケットに、季節はずれの扇子を入れて、桶屋の主人を訪れ、

「早速やが……」

と、新太郎を初枝の婿にする話を交渉した。

「さあ、わいには異存はないけど、新太郎の奴がどない言いよりまっしやるか」

桶屋の主人が言うと、

「どないも、こないも、あんた、おまはんやわいの知らん間にあいつらもうちゃんと好いた同志になつとりまんねんぜ。阿呆らしい。ほんまに、こんな、じやらじやらした話おまつかいな」

他吉はぷりぷりしたが、しかし、新太郎の身体の良いところを見込んでの話だと、万更でも無い顔つきだった。

新太郎の年期ももうとつくに済んでいたので、話はすぐ纏った。やがて、新太郎は玉造で桶屋を開業したが見込んだ通り、働き者で、夫婦仲のよいのは勿論である。

他吉はやれやれと思い、河童路地がたろじの朝夕急にそわそわしだしたが、新太郎が開業する時に借りた金は、未だすっかり済んでいない。比律賓へ行くのはもうすこしの辛抱だと、じつと腹の虫を

圧えている内、新太郎の家の隣りから火が出て、開業早々丸焼けになった。

焼け出されて、新太郎は一時河童路地の他吉の家へうつつて来たが、げっそりして、頭から蒲団をかぶって、まるで暖簾に凭れて懣懣んだような精のない顔をしていた。

もう一度、立ち直って、桶屋をはじめめる気もないらしく、また、職を探しに歩こうともしなかった。

ぶつぶつ何やら呟いているのを聴けば、開業資金に借りた金の残額を、おろおろ勘定しているのだった。

「阿呆んだらめ！」

他吉は叱りつけて、

「家の中でごろごろして借金がかえせる思てるのか。いったい、これからどないする気や。もちつと、はんなりしなはれ」

「さあ、どないしたらええやろ。もう、こうなったら、冷やし飴でも売りに歩かな、仕様しよおまへんな。ほんまに、えらい災難や」
心細い声で、ぼそんと言った。

「仕様しよむないこと言いな。お前みたな氣イで冷やし飴売りに歩いてたら、飴が腐敗くさってしまう……」

言つて、他吉はふと眼をひからせた。

「——それとも、よつぽど冷やし飴が売れたけりや、マニラへ行きなはれ」

「なんぜまた、マニラへ……？」

黙っている新太郎に代つて、初枝がおどろいて訊くと、

「マニラは年中夏やさかい、モンゴ屋商売して、金時（氷）や冷やし飴売つても、結構商売になる。大阪にいては、お前、寒なつたら、冷やし飴が売れるか」

「冬は甘酒売つたら、ええ」

初枝に肱を突かれて、新太郎が言うと、他吉は噛んだろかというような顔をした。

「情けないこと言う男やな。新太郎、よう聴きや、人間はお前、若い時はどこイなど、遠いところイ出なあかんネやぜ。——お初はわいが預つててやるさかい、マニラへ行つて、一旗あげて来い」

「……………」

二度焼け出されたようなものと、新太郎が首垂れていると、
「行くか、行けへんか。どっちやねん？ 返事せんか。行かんと
言うネやったら、わいにも考えがある。お初を……」

「お父つあん。何言うてんねん。死んだお母はんの……」
遺言忘れたかと、初枝が言いかけるのを、

「お前は黙ってエ」

「黙ってられるかいな」

と、壁一重越しにきいていたゞ団治が、くるくるした眼で、はい
つて来て、

「——他あやん、お前の言い分は、そら目茶苦茶や」

助け船を出したが、もう他吉はきかず、無理矢理説き伏せて、

新太郎をマニラへ発たせた。

他吉は初枝とふたりで、神戸にまで見送りに行つたが、

「わいもこの船でいっしょに……」

……行きたい気持をおさえるのに、余程苦勞した。

その代り、銅羅が鳴るまで、他吉はベンゲット道路の話をし、
なお、

「モンゴ屋商売しても、アメリカ人の客には頭を下げんでもええぞ。毎度おおけにと頭が下りかけたら、いまのベンゲットの話を思い出すんやぜ。——それから、齒抜きの辰いう齒医者に会うたら、忘れんと二円返しといてや。わいが虫齒抜いてもろた時の借りやさかい、他あやんがよろしゅう申してました言うて、二円渡

しといてや」

と、言つた。

「コレラに罹らんように、氣イつけとくなはれや」

初枝はおろおろして、やつとこれだけ言つた。

初枝は、團治の世話で、新世界の寄席へ雇われて、お茶子をした。

第二章 大正

1

そこは貧乏たらしくごみごみとして、しかも不思議にうつりかわりの少ない、古手拭のように無気力な町であった。

角の果物屋は何代も果物屋をしていて、看板の字も主人にも読めぬくらい古びていた。

酒屋は何十年もそこを動かなかった。

銭湯も代替りをしなかった。

薬局もかわらなかつた。よぼよぼの爺さんが、いまだに何十年か前の薬剤師の免状を店に飾つて、頓服を盛っているのだつた。もぐさが一番よく売れるという。

八百屋の向いに八百屋があつて、どちらも移転をしなかつた。隣の町に公設市場が出来ても、同じことであつた。

一文菓子屋の息子はもう孫が出来て、店先にぺたりと坐つて、あてもの景品付きの一文菓子を売るしぐさも、何か名人芸めいて来た。

散髪屋の娘はもう二十八歳で、嫁に行かなかつた。年中ひとつ覚えの「石童丸」の筑前琵琶を弾いていた。散髪に来る客の気を惹くためにそうしているらしく、それが一そう縁遠い娘めいた。

一銭天婦羅屋は十年路地の入口で天婦羅をあげていた。

甘酒屋の婆さんももうかれこれ十五年寺の門前で甘酒屋の屋台を出していた。夏でも出していた。

相場師も夜逃げをしなかった。落語家^{はなしか}も家賃を六つもためて、

十七年一つ路地に居着いていた。

路地は情けないくらい多く、その町にざっと七八十もあろうか。いったいに貧乏人の町である。路地裏に住む家族の方が、表通りに住む家族の数よりも多いのだ。

地藏路地は※の字に抜けられる八十軒長屋である。

なか七軒はさんで口の字に通ずる五十軒長屋は榎路地である。

入口と出口が六つもある長屋もある。^{たのき}狸裏といい、一軒の平家に四つの家族が同居しているのだ。

銭湯日の丸湯と理髪店朝日軒の間の、せまくるしい路地を突き当ったところの空地进行、口の字に囲んで、七軒長屋があり、河童路地という。

この空地は羅^ら宇^おしかえ屋の屋台の置場であり、夜店だしの荷車も置かれ、なお、病人もいないのに置かれている人力車は、もちろん佐渡島他吉の商売道具である。

この空地は洗濯物の干場にもなる。けれど、風が西向けば、もう干せない。日の丸湯の煙突は年中つまっていて、たちまち洗濯物が黒くなってしまうのだ。

羅宇しかえ屋の女房は名古屋生れの大声で、ある時、亭主を叱った声が表通りまできこえ、通り掛った巡査があやしんで路地の

中まで覗きに來たというくらい故、煙突の苦情は日の丸湯の番台へ筒ぬけだが、日の丸湯の主人はきかぬ振りした。

また、長屋の中で、改まつて煙突の掃除のことで、日の丸湯へ掛け合つた者はひとりもない。

日の丸湯の主人というのは、先代より引き続いて、河童路地の家主であり、横ごりがん車も振る男であつた。

河童路地はむかしこのあたりに河童が棲んでいたという噂からそういう名がついたほかに俗に只裏ただともいい、家賃は只同然にやすいさかいやと、日の丸湯の主人は言っていたが、それさえ誰もきちんと払えた例はなく、かたがた煙突の苦情も言うて行けなかつた。

つまりは、貧乏長屋であつた。

だから、たとえば蝙蝠傘修繕屋のひとり息子は、小学校に
間から、新聞配達に雇われて、黄昏の町をちよこちよこ走つた。

明るいうちに配つてしまわぬと、帰りの寺町がひっそりと暗く
て怖い。十歳の足で、高津神社の裏門の石段を、ある夕方、ひと
日、ふた日は晴れたれど、三日、四日、五日は雨に風、道のあし
さに乗る駒も、踏みわずらいて、野路病い……と、歌いながら、
あわてて降り、黒焼屋の前まで来ると、

「次郎ぼん、次郎ぼん」

うしろから呼び止められた。

振り向くと、血止めの紙きれをじじむさく鼻の穴に詰めこんだ

他吉が空の俵をひきながら、にこにこ笑っている。

「他あやん、また喧嘩したんやなア。あんまり売りだしたら、どんならんな」

二軒並んだ黒焼屋の店先へ、器用に夕刊を投げこみながら、そう言うのと、

「さいな、あんまり現糞げんくそのわるい事言いやがったさかい……」

しかし、——他吉という男はど阿呆や、われが六年もいて一銭の金もよう溜めんといったマニラへ娘の婿を懲りもせんと行かす阿呆があるかと言われて、何をツと腹が立った余りの喧嘩だとは、さすがに子供相手に語りも出来ず、

「お初に告わんというてや」

しおらしい声で言った。

「さあ。どないしょ？　ここが思案の四ツ橋……」

「子供だてらに生意気な言い方しィな。――どや、しかしもう、犬に吠えられたかて、怖いことあれへんか」

「犬か、犬はもう馴れたわ」

「そか、そらええ。次郎ぼん、なんぼでも、せえだい働きや。人間はお前、苦勞して、身体を責めて働かな、骨がぶらぶらしてしまうぜ。おっさんら見てみイ。六年まえ、ベンゲットで……」

松屋町筋まで来た。

「他あやん、もつとほかの話してんか。ベンゲットの話ばつかしや。^{はなし}ゞさんの落語の方がよつぽどおもしろいぜ」

「そら、下手は下手なりに、向^{むこ}は商売人や。——どや、しんどいやろ。豆糞ほど（少しの意）俵に乗せたらか」

「なんじやらと、巧いこと言いよつて……。そないべんちやら

（お世辞）せんでも、他あやん喧嘩したこと黙つてたるわいな」

そして、早く配つてしまわねば叱られるさかいと、駈け出して行くのを、他吉は随いて行つて、

「ほな、おっさんに夕刊一枚おくれんか」

その氣もなく言うのと、

「やったかて、読めるのんかいな。おっさんら新聞見ても、新聞やのうて珍ぶん漢ぶんやろ？」

「殺生^{どくしよ}な。そんな毒性な物の言い方する奴あるか。——ほんま

はな、夕刊でなこの鼻の穴の紙を……」

……詰めかえながら、河童路地へ戻つて来ると、めずらしく郵便がはいっていた。切手を見て、マニラの婿から来た手紙だとすぐ判つたが、勿論読めなかつた。

齒抜きの辰という齒医者を探したところ、とつくに死んでいたというたよりがあつてから、一月振りの手紙で、こんどはどんなたよりが書いてあるかと、娘の帰りを待ち切れず、メ団治なら読めるだろうと、その足で、

「メさん、メさん、留守か。居るのんか。居れへんのんか」
隣のメ団治に声をかけた。

すると、羅宇しかえ屋の家の中から、声だけ来て、

「メさんは寄席だっせ」

「さよか。——ところで、おばはん、けつたいな事訊くけど、おまはん字イはどないだ？」

「良え薬でもくれるのんか。なんし、わての痔イは物言うても痛む奴ちやさかい」

字と痔をききちがえて、羅字しかえ屋のお内儀が言うと、

「あれくらい大けな声出したら、なるほど痛みもするわいな」と、理髪店朝日軒で客がききつけて、大笑いだった。

理髪店朝日軒では、先年葬礼の道供養に友恵堂の最中を二百袋も配つて、随分近所の評判になった。

袋には朝日軒と書かれてあり、普通何の某家と書くところを、わざとそうしたのは無論宣伝のためであつたろう。

死んだのはその当主で、あと総領の敬吉が家業を継ぐわけだが、未だ若かった、先代は理髪養成学校の創立委員で、囑託されて教師にもなり、だから死なれて見ると、二代目の敬吉の若さは随分目立つ。おまけに高慢たれで、腕はともかく客あしらいはわるいと、母親のおたかにも心細くわかり、道供養に金を掛ける気持も出たのだろうが、ひとつには、娘の義枝のこともあつたのではなからうか。

どういうわけか、縁遠いのだ。二十六でまだ片づかぬのはおかしいと、近所の評判がきびしくて、父親も息を引きとる時まで、これを気にしていたくらいだ。

なお、義枝の下に定枝がいて、二十三といえ、義枝の歳に直ぐだった。しかも、そういう縁遠い小姑が二人もいては、敬吉に嫁の来手もあるまいと二十九歳の敬吉の独身までが目立ち、商売とちがつて、ここでは彼の若さも通らなかつたわけだ。おまけに、十七の久枝、十三の敬二郎、十の持子もあとに控えている。

父親の生きている時分はともかく、後家になつたいまは、何か肩身のせまい想いに身が縮まつて、おたかがそんな道供養を張り込んだ気持も、うなずけるのだった。

それかあらぬか、葬式が済んで当分の間、おたかは毎日かやく飯や五目寿司を近所へ配った。長屋の者など喜んだのはむろんである。わりにおたかの肩身が広くなつたようで、それで娘の歳なども瞬間隠れた。

義枝はそんな母の心を知つてか知らずにか、忙しく立ち働いて炊事を手伝った。

小柄で、袖なしなどを色気なく着て、こそこそ背中をまるめ、びつくりしたような眼をしていた。器量もたいして良くなかつた。筑前琵琶をならい、年中「石童丸」を弾いて、それで散髪に来る客の心を惹いているように誤解されていることは、さきに述べた通りである。

父親の四十九日が済んで間もなく、紋附きを着た男が不意に来て、義枝の縁談であつた。

氣配で何かそれらしく、おたかは随分狼狽した。咄嗟の心構えがつかず、むしろ氣恥かしく応待した。取り乱しては嗤われるかねがねの負目で、嬉しい顔も迂濶に出来なかつた。

客は小憎いほど落ち着いて、世間話のまくらをだらだらとふつた。

それで焦らされて、おたかはわざと濃い表情も自然に装えて、顔をしかめた。すると、縁談をきく心用意もどうやら出来たが、そうして落着いたところは、意外にも断る肚であつた。

相手の身分も訊かぬうちに、そんな風に決めて、われながら意

固地な母だったが、いまに始ったわけではない。

……父親の生きていた頃、三度義枝に縁談があつたことはあつた。

相手は呉服屋の番頭、公設市場の書記、瓦斯会社の集金人と、だんだん格が落ちた。

父親はいつのときも、賛成も反対もせず、つまりは煮え切らず、ぼそぼそ口の中で呟いているだけだったが、おたかはまるで差し出でて、仲人に向い、

「格式の違うことあれしまへんか」

と、いつもこの調子で、仲人を怒らしてしまい、その都度簡単に話は立ち消えたのだ。

当座の小気味良さも、しかし、あとでむなしい淋しさと変った。
だから、義枝には、

「あんな仕様むない男に貰われたら、お前の一生の損やさかいに
……」

と言ひ聴かせ、それをまた自分へのいいわけにもした。

よその娘なら知らず、義枝の父親は理髪業者の寄合へ洋服で出席した最初の人で、なお町会の幹事もしているのだ……。

ところが、そんなことがあって、こんどの相手は畳屋の年期奉公上りの職人で、と聴いてみると、やはりおたかはあらかじめ断る肚をきめて置いてよかつたと思つた。

散髪屋も畳屋も同じ手職稼業でたいした違いはないようなもの

の、おたかにしてみれば、口惜しいほど格式が落ちたと思われ、だから断るにもサバサバした気持だった。

仲人はあきれて帰って行った。

おたかは暫時ぺたりと坐りこんだまま、肩で息をし、息をし、畳の一つところを凝視していた。腹立たしいというより、むしろさすがに取り逃した気持でわれにあらず心に穴があいた。

「なんぜ断る気になったんやろか」

と、考えてみても判らず、所詮いまさらの後悔だったが、いつてみれば父親は下手に町会の幹事などしたわけだ。

ひとつには、義枝の年が若ければ、かえって畳屋の職人でもあつさりと応じられたのかもしれず、つまりはひがみだったろうか。

やがてそわそわと立ち上り、勝手元へ出てみると、義枝はしきりに竈の下を覗いていた。新聞紙を突っ込み、薪をくべ、音高く燃えて、色黒い義枝の横顔に明るく映えていた。ふと振り向いたその眼が赤く、しばたたき、煙のせいばかりでないとおたかは胸痛く見たが、どういうわけかおたかの声は、

「えらい煙たいやないか」

と、叱りつけるようだった。

大分経って、義枝の下の定枝を貰いに來た。

先方は小学校の教員で、二十九歳だというから、定枝と四つちがいだった。二十五の娘いとはんやつたらしつかりしたはって、願ったりかなったりと、わざわざ定枝の歳をありがたいものにする

いい方を、仲人はして、つまりはおたかの気性をのみこんでいた。そうされてみれば、おたかもさすがに固い表情が崩れ、小学校の教員といえ、よしんば薄給にしろまずまず世間態は良いと、素直に考えることが出来た。鼯鼠目にも定枝の器量は姉の義枝とそんなにちがいはしなかったが、ずんぐりとして浅黒い義枝とくらべて、定枝はややましにすんなりと蒼白く、そういう談があつてみれば、いまそれは透き通るように白いと、改めて見直されるぐらいだった。なお、先方は尺八の趣味があるといい、それも何となく奥床しいではないかと、これで纏らねば嘘だった。

仲人は無料の散髪をして帰った。

ところが、纏まると見えて、いざ見合いという段になると、い

きなりおたかは断ってしまった。

仲人は驚いたが、怒った顔も見せず、なるほど、姉さんをさし置いて妹御をかたづけける法もなかったと筋を通して、御縁は切れただけでもない、と、苦労人だった。

けれども、その言葉は思いがけずおたかには痛く、妙なところで効果があつた。

実はもつて、おたかには断るほどの理由もはつきりとはなく、強いて娘の見合いの晴れがましさに馴れず臆したのだと言つてみたところで、それでは余りに阿呆らしく小娘めく。仲人ももう一押し押せば、十に一つは動く振りもおたかには充分あつたところだが、もはやそんな痛いところを突かれては、おたかの気持はい

つものところへ落ち着いて、

「格式が違ふことあれしめへんか」

意固地な声であつた。さすがの仲人もむっとした。

怒つた顔二つ暫時にらみ合つて、やがて仲人の歸つたあと、勝手元で騒々しい物音や叫声がして、おどろいておたかが出て見ると、義枝と定枝が掴み合い掴み合っているのだ。

おたかは何か思い当つて、はっと胸をつかれ、蒼ざめた途端に、いきなり逆上して、二人を突き離すと、漆喰の上へ転がり落ちたのは、義枝の方だつた。そのつもりではなかつたが、倒れて見れば、やはり義枝らしかつた。

物音で近所のひとびとがわざとのように駈けつけて来ると、ぴ

たりと三人は静まりかえった。

定枝はぷいと出て行つた。義枝はおろおろと身体を縮めて忍び泣いていたがやがて座敷へはいると、琵琶をかきならした。それが店の間にもきこえ、客は頭を刈られながら、ふんふんときいた。翌日、おたかは近所へ海老のはいったおからを配つた。

半年経つて、十九の久枝に縁談があつたとき、矢張り義枝をさし置いてということが邪魔した。

久枝は北浜の銀行へ勤めに出て、太鼓の帯に帯めをきりりとしめ、赤い着物に赤い鼻緒の下駄で、姉たちとはかけはなれて派手な娘であつた。なお、眼鏡を掛けていた。

相手は同じ銀行に働く男で、銀行員といえ、もう飛びつきた

い話にはちがいがなかった。しかし、同じところで働いていたとすれば、浮いた話ではなかったかと近所の評判も気にされた。

もともと久枝を勤めに出すことは、何かと気がひけていたのである。娘を働かさねばやって行けぬ世帯かと見られることが、随分辛いのだ。だから、同じ銀行で働く男と結婚したとすれば、一層とやかくの噂は避けがたい。

それがおたかにはいやだった。といって、断るには惜しい談だと、いろいろ迷ったあげく、結局義枝の縁組みもせぬうちに久枝をかたづけけるわけには行かぬと、これがおたかの肚をきめたのである。

次の縁談があるまで半年待った。

こんどの談は敬吉に来て、先方は表具屋の娘だったから、これも敬吉の意見をきかぬうちに有耶無耶になった。仲人はしかし根気よく三度足を運んだのだった。

が、三度目にはもう、

「こんな年増の小姑のいる家に、誰が嫁に来まつかいな」

と、捨科白して、ばたばたと帰ってしまった。

いわれてみると、おたかはちくちく胸が痛み、改めて敬吉の歳を数えてみると、三十だった。

三十の声をきいてから、敬吉の頬にはめきめき肉がついて、ふつくらし、おまけに商売柄いつも剃り立ての髭あとがなまなまと青かった。

そんな顔を敬吉は店の間からはいつて来てぬつと見せると、

「いまのお客さん何しイに來はったんやねん？」

わりに若い声で訊いた。

「何もしイに來やはれへんぜ」

おたかとはとぼけて見せ、

「——店放つといてええのんか」

叱りつけるように言うと、敬吉はこそこそ店へ引きかえした。

そして、見習小僧に代つて、客の顔を剃りながら、かねがね理^わ

由^けもなしに母親に頭の上らぬ自分の顔を、しよんぼり鏡に覗いて
いると、何となく気が滅入ったが、ふと、

「良え薬でもくれるのんか。なんし、わての痔イは物言うても痛

む奴ちやさかい」

という羅字しかえ屋のお内儀の声がきこえ、

「あれくらい大けな声出したら、なるほど痛みもするわいな」

と、客が笑ったのにつられて、敬吉も黒いセルロイドのマスクのかげで笑い、

「ほんまにイな」

剃刀をとめて、客の笑いのとまるのを待っているところへ、他吉がひよつくりはいって来た。

「敬さん。また無心や」

「なに貸してほしいねん？」

「さいな。今日は剃刀とちがう。あんたの学を貸してほしいねん」

「安い御用やが……」

敬吉は講義録など読み、枢密院の話などを客にして、かねがね学があると煙たがられていた。

「これをひとつ読んでほしいねん」

マニラからの手紙を渡すと、敬吉は剃刀を片手に眼を通した。

「どうせ婿の新太郎から来た手紙や思いまっけど、なんぞ言うとりまっか。マニラは暑うてどんならん言うとりまっか」

敬吉はしかしそれに答えず、

「他あやん、えらい鈍^{どん}なこつちやけど、こらわいには読めんわ」と、びっくりした顔だった。

「えらいまた敬さんに似合わんこつちやな、どれ、どれ、わいに

かして見イ、わいが読んだる」

客は散髪台の上に仰向けになつたまま、他吉の手からその手紙を受けとつたが、すぐ、あつと声をのんで、

「わいにも読めんわ。えらい鈍なこと……」

と言いながら、減法高い高下駄をはいた見習小僧にそれを渡した。

「——お前読んでみたりイ」

「へえ」

そして、読みだした小僧の声は、筑前琵琶の音にところどころ消されたが、他吉の胸に熱く落ちて来た。

マニラへ行っていた婿の新太郎が、風土病の赤痢に罹つて死ん

だ旨、新太郎に部屋を貸している人からの報らせの手紙だった。

「なんやて？ さつきのところもういつペン読んで見てんか。一昨日の……？」

「一昨日の午前二時、到頭看護及ばず逝去されました」

「セイキョてなんやねん」

「死ぬこつちや」

小僧は十六歳だった。

瓦斯燈がはいって、あたりはにわかには青い光に沈んだ。

理髪店の大鏡に情けない顔をちらと蒼弱くうつして、しょんぼり表へ出ると、夜がするする落ちて来た。

他吉は腑抜けて、ひよこひよこ歩いた。

3

それから半時間も経つたろうか、他吉はどこで拾ったのか、もう客を乗せて夜の町を走っていた。

通天閣のライオンハミガキの広告燈が青く、青く、黄色く点滅するのが、ぼうつとかすんで見えた。

客は他吉の異様な気配をあやしんで、

「おやっさん、どないしてん？ 泣いてるのんと違うか」

「泣いてまんねん」

「えっ？」

客はその返辞の仕方のほうに驚いてしまった。

「——こらまたえらい罪な俥に乗つてしもたもんや。これから落語ききに行こちゆうのに、無茶苦茶やがな。一体どないした言うねん？」

「へえ。娘の婿めが、あんた、マニラでころつと逝きよりましてな」

「マニラ……？ マニラでねっから聴いたことのない土地やが、何県やねん」

「阿呆なこと言いなはん」

ポロポロ涙を落しながら、マニラは比律賓の首府だと説明すると、

「さよか、しかし、なんとまた遠いところ行ったもんやなあ」

「マラソンの選手でしたが……」

「ほんまかいな、しかし、可哀相に……。それで、なにかいな。

その娘はんちゅうのは子たちが……?」

あるのかと訊かれて、またぼろりと出た。

「まあ、おまつしやろ」

「まあ、おまつしやろや、あれへんぜ。男の子才か」

「それがあんた、未だ生れてみんなことにや……」

新世界の寄席の前で客を降ろすと、他吉はそのまま引きかえさず、隣の寄席で働いている娘の初枝を呼びだした。

「お父つあんなんぞ用か」

出て来た初枝は妊娠していると、一眼で判るからだつきだった。他吉はあわてて眼をそらし、

「うん。ちよつと……」

と、言いかけたが、あと口ごもって、

「——ちよつとゞさんの落語でもきかせてもらおか思てな……」
寄ったんだと、咄嗟に心にもないことを言うのと、

「めずらしいこつちやな。あんな下手糞な落語ようきく気になつたな。そんなら、俤誰ぞに見てもろてるさかい、はよ、聴いてきなはれ」

「いや、もう、やめとくわ。それより、ちよつとお前に話があるねん」

そして、寄席を出て、空の俵をひきながら歩きだすと、初枝は、「話やったら、ここで言うたら、ええやないか。けつたいやなあ」と言いながら、前掛けをくるりと腹の上へ捲きつけて、随いて来た。

活動小屋の絵看板がごちやごちやと並んだ明るい新世界の通りを抜けると、道は急にずり落ちたような暗さで、天王寺公園だった。

樹の香が暗がりにも光って、瓦斯燈の蒼白いあかりが芝生を濡らしていた。

美術館の建物が小高くくろぐろと聳え、それが異国の風景めいて、他吉は婿の新太郎を想った。

白いランニングシャツを着た男が、グラウンドのほの暗い電燈の光を浴びて、自転車の稽古をしている。それが木の葉の隙間から影絵のように蠢いて見えた。

動物園から猛獣の吼声がかきこえて来た。ラジウム温泉の二階で素人浄瑠璃大会でも催されているらしく、太の三味線の音がかすかにきこえた。

丁稚らしい男がハーモニカを吹いている。

「流れ流れてエ、落ち行く先はア、北はシベリヤ、南はジャバよ……」

というその曲が、もう五十近い他吉の耳にもそこはかとなく物悲しかった。

ベンチに並んで、腰掛けた。

「お父つあん、なんぜこんなとこイ連れて来んならんねん。けつ
たいなお父つあんやなあ。話があるねんやつたら、はよ言いんか
いな」

初枝がいくらか不安そうに言うのと、他吉は横向いて、

「明いところで涙出して見イ。人さんに嗤われて、みつともないや
ないか」

初枝はどきんとした。

「ほな、なんぞ泣かんらんようなことがあるのんか」

「……………」

他吉は黙って、マニラからの手紙を渡した。

初枝は立ち上って、瓦斯燈のあかりに照らして読んだ。

途端に初枝は気が遠くなり、ふと気がついた時は、もう他吉の俤の上で、にわかに下腹がさしこんで来た。

産気づいたのだと、他吉にもわかり、路地へ戻って、羅宇しかえ屋のお内儀の手を借りて、初枝を寝かすなり、直ぐ飛んで行って産婆を自身乗せて来たので、月足らずだったが、子供は助かり、その代り初枝はとられた。

「えらい因果なこっちゃな。死亡届けが二つと出産届けが一つ重なったやないか」

朝日軒の敬吉は法律知識を高慢たれて、ひとり喧しかったが、しかし、他の者は皆ひっそりとして、羅宇しかえ屋の女房でさえ、

これを見ては、声をつつしんだ。

長屋の寄り合いにはなくてかなわぬ、団治も、

「おまはん、今日はただの晩やあらへんさかい、あんまり滑稽ちよかなこと言いなはんなや」

と、ダメを押されて、渋い顔をしていたが、けれど、さすがに黙っているのは辛いと見えて、腑抜けた恰好で壁に向って、ぶつぶつひとりごとを言っている他吉の傍へ寄って、

「他あやん、ほんまにえらいこつちやな、まるでお前、盆と正月が一緒に……」

うっかり言いかけると、

「メさん、阿呆なこと言いな！」

敬吉の声が来た。

それで、さすがにメ団治もシユンとしてしまったが、暫らくすると、また口をひらいて、

「しかし、他あやん、人間はお前、諦めが肝腎やぜ。おまはんもよくよく運かたのわるい男やけど、負けてしもたらあかんぜ。そんな夢の中で豆腐踏んでるみたいな顔をせんと、もつとはんなりしなはれ。おまはんまで寝こんでしまうようになったら、どんならんさかいな」

そんな口を敲くと、他吉は、

「何ぬかす、あんぽんたん奴。わいが寝こんでしもて、孫がどないなるんや。ベンゲットの他あやんは敲き殺しても死なへんぞ」

と、そこらじゅうにらみ倒すような眼をしたが、けれど、直ぐしんみりした声になると、

「——しかし、言や言うものの、メさんよ、新太郎の奴と初枝はわいが殺したようなもんやなあ」

と、言った。

十日ばかり経った夜、界隈の金満家の笹原から、ちよつと話があるからと、他吉を呼びに来た。

黒の兵古帯を二本つなぎ合わせ、それで孫の君枝を背負って行くと、笹原は酒屋ゆえ、はいるなりぷんと良い匂いがし、他吉は精進あげの日飲んだのを最後に、生駒に願掛けて絶っている酒の味を想って、身体がしびれるようだった。

「夜さり呼びつけて、えらい済まなんだけど、話言うのはな、実はおまはんのその孫のことやがな……」

型通りのおくやみを述べたあと、笹原はそう切りだした。

「――藪から棒にこんなこと言うのは、なんやけつたいやけど、その子どこぞイ遣るあてがもうあるのんか」

「いえ、そんなもんおまへん」

「そか、そんなら話がしやすい。早速やが、他あやん、その子うちへ呉れへんか」

「ほんまだつかいな」

「嘘言うもんか。おまはんも知つてる通り、うちは子供が一人も出けへんし、それにまた、わしもそうやが、うちの家内おぼはんと来た

ら、よその子供が抱きとて、うちに風呂があるのに、わざわざ風呂屋へ行きよるくらい子供が好きやし、まえまえから、養子を貰う肚をきめてたんや。ほかにも心当りないわけやないけど、それよりもやな、氣心のように判ったおまはんの孫を貰たらと、こない思てな。それになんや、その子はふたおや両親ともないさかい、かえつて貰ても罪が無うて良えしな」

「……………」

背負った孫可愛さの重みに他吉は首を垂れて、慌しく心の底を覗いていた。

祖父ひとり孫ひとりのわびしい路地裏住いよりも、こんな大家にひきとられて、乳母傘で暮せば、なんぼこの子の倅せかと、願

うてもない孫の倖せを想わぬこともなかったが、しかし、この子の中には新太郎と初枝の生命がはいっていると想えば、到底手離す気にはなれず、おろおろ迷っていると、

「言うちやなんやけど、礼はぎようさんさして貰うぜ。おまはんの好きな酒も飲み次第や」

と、笹原が言った。途端に他吉の肚はきまつた。

「旦那さん、えらい変骨言うようでつけど、わたいは孫を酒にかえる氣イはおまへん。眼に入れても痛いことのない孫でつけど、酒に代えて口の中へ入れたら舌が火傷してしまいま」

「そない言うてしもたら、話でけへんがな。——そらまあ、おまはんが私は要らん言うのやったらそいでええとせえ。しかし、他

あやん、おまはんはそいでええとしても、ひとつその子のことを考えてみたりいな。河童路地で育つ方が倅せか、それとも……」
痛いところを突かれたが、他吉はいきなり、

「そら判つてます。よう判つてま」

と、顔をあげて、

「——しかし、旦那さん、たとえ貧乏でも、狸や河童の巣みたいな路地で育つても、やつぱり血をわけたわいに育ててもらた方が、この子の倅せだす。いやきつとわたいが倅せにしてやりま」

そこまで言つて、他吉は男泣いた。

やがて、涙をふきふき、

「——まあ、聴いてやつとくれやす。この子のお父つあんも、わ

いが無理矢理横ごりがん車振ってマニライ行かしたばかりに、ころつと逝ってしまいよりました。この子のお母んもそれを苦にして、到頭……。言うたら皆わたいの責任だす。もうわたしは自分の命をこの孫にくれてやりまんねん」

言っているうちに、本当にその覚悟が膝にぶるぶる来て、光った眼をきつとあげると、傍にいた笹原の御寮人が、

「あんたのそう言うのんはそら無理もないけど、ほんまに男手ひとつで育てられまつか。あんた、お乳が出るのんか」

「出まへん、なんぼわたいの胸を吸うても、そら無理だす。胃袋で子供うめ言うのと同じだす」

「それ見なはれ」

「しかし、御寮はん、ミルクいうもんが……」

言うと、笹原が、

「ミルクで育った子は弱い」

だしぬけに言った、

「そうだと……」

笹原の御寮人は残酷めいた口元を見せて、

「——他あやん、うちはその子貰たらお乳母をつけよ思てまんねんぜ。それに他あやん、あんたその子背^{せた}負^たろうて俵^たひく氣^きいだっか」

「ほな、こいで失礼さしてもらいま。えらいおやかまつさんでした」

他吉が頭を下げると、背中の君枝の頭もぶらんと宙に浮いて、下った。

4

間もなく他吉は南河内狭山の百姓家へ君枝を里子に出し、その足で一日三十里梶棒握って走った。

里子の養育料は足もとを見られた月に二十円の大金だ。なお、婿の新太郎が大阪に残して行つた借金もまだ済んでいない。

他吉の俵はどこの誰よりも速く、客がおどろいて、

「あ、おっさん、そないに走ってくれたら、眼工がまう。もうち

よつと、そろそろ行^やつて貰えんやろか」

と、頼んでも、

「わたしはひとの二倍、三倍稼がんらん身体だつきかい、ゆつくり走つてられまへんねん」

辛抱してくれと、言つて振り向いた眼の凄みに物を言わせて、他吉はきかなんだ。

その頃、大阪の主な川筋に巡航船が通つた。

俵など及びもつかぬ速さで、おまけに料金もやすく、切符に景品をつける時もある、自然俵夫連中は打撃をうけ、俵に赤い旗を立てて、巡航船の乗場に頑張り、巡航船に乗ろうとする客を、喧嘩腰で引つ張ろうとしてかなわぬ時は巡航船へ石を投げるとい

う乱暴もはたらいたが、他吉はそんな仲間にはいらず「ベンゲツトの他吉」を売り出そうとせなんだ。

もつとも、朋輩との客の奪い合いには、浅ましいくらい厚かましく出て、さすがに「ベンゲツトの他あやん」の凄みを見せ、その癖酒は生駒に願掛けたといつて一滴ものまず、なお朋輩に二十銭、三十銭の小銭を貸すと、必ず利子を取った。

次郎ぼんに貰った夕刊を一銭で客に売りつけることもあり、五厘のことで吠えた。

ある夏、角力の巡業があつた。

横綱はじめ力士一同人力車で挨拶まわりをすることになったが、横綱ひとり大き過ぎて合乗用の俥にも乗れず、といって俥なしの

挨拶まわりも淋しいと考えた挙句、横綱の腰に太い紐をまわし、その紐を人力車二台にひかせて、横綱自身よいしよよいしよと練り歩いて、恰好をつけ、大阪じゅうを驚かせた。

新聞に写真入りで犬も吠えたが、この俵をひいたのが、他吉とその相棒の増造で、さすが横綱だけあつて祝儀の張り込み方がちがう、どや、これでたこ梅か正弁丹しょうべんたんご吾で一杯やろかと増造が誘つたのを、他吉は行かず、

「それより此こないだ間貸した錢返してくれ。利子は十八錢や、——なにッ！ 十八錢が高い？ もういつペン言うてみイ」

そんな時他吉の眼はいつになくぎろりと光り、マニラ帰りらしい薄汚れた麻の上着も、脱がぬだけに一そう凄みがあつた。

ところが、それから半月ばかり経ったある夜のことで。

御霊の文学座へ太夫を送つて帰り途、平野町の夜店で孫の玩具を買うて、横堀伝いに、たぶん筋違橋^{すじかいばし}か、横堀川の上に斜めにかかった橋のたもとまで来ると、

「他吉！」

と、いきなり呼ばれ、五六人の俥夫に取り囲まれた。

「なんぞ用か？」

咄嗟に「ベンゲツトの他あやん」にかえつて身構えたところを、
「ようもひとの縄張りを荒しやがったな」

と、拳骨が来て、眼の前が血色に燃えた。

「何をッ！」

と、まずぱつと上着とシャツを落して、背中を見せ、

「さあ、来やがれ！」

と、振りあげた手に、握っていた玩具が自分の眼にはいらなかったら、他吉はその時足が折れるまで暴れまわったところだが、

——今ここで怪我をしては孫が……

他吉は氣を失っただけで済んだ。

やがて、どれだけ経ったろうか、ベンゲットの丸竹の寝台の上に寝ている夢で眼をさますと、そこはもとの橋の上で、泡盛でも飲み過ぎたのかと、揺り起されていた。

そうして五年が経った。

間もなく小学校ゆえ君枝を自身俵に乗せて河童路地へ連れて戻

ると君枝は瘦せて顔色がわるく、青洩で筒っぽうの袖をこちこちにして、陰気な娘だった。

両親の不在ことがもう子供心にもこたえるらしく、それ故の精のなさかと、見れば不憫で、鮭を焼いて食べさせたところ、

「これ、何ちゆうお菜なら？」

と、里訛で訊くのだった。

「鮭ととという魚や」

「魚て何なら？」

「あッ、それでは……」

里では魚も食べさせて貰えなかったのかと、他吉はほろりとして、

「取るもんだだけは、きちきち取りくさつて、この子をそんな目に会わしてけつかつたのか」

と、そこらあたり睨みまわす眼にもふだんの光が無かった。

君枝は茶碗の中へ顔を突つ込み、突つ込み、がつがつと食べ、ほろりとした他吉が、

「ほんまにお前にも苦勞さすなあ。堪^{かに}忍^にしてや。しかし、なんやぜ、よそへ貰われるより、こないしてお祖父^{じい}やんと一緒に飯食^まべる方が、なんぼ良えか判れへんぜ。な、そやろ？ そない思うやろ？」

と、言つても、腑に落ちたのかどうかしきりに膝の上の飯粒を拾いぐいしていた。

入学式の日、他吉は付き添うて行つた。

校長先生の挨拶に他吉はいたく感心し、傍にゐる提灯屋の親爺をつかまえて、

「やっぱし校長先生や。良えこと言いよんなあ。人間は何ちゅうても学やなあ」

と、しきりに囁いていたが、やがて新入生の姓名点呼がはじまると、他吉は襟をかき合わせ、緊張した。

「青木道子」

「ハイ」

「伊那部寅吉」

「ハイ」

「宇田川マツ」

「ハイ」

「江知トラ」

「ハイ」

アイウエオの順に名前を読みあげられたが、子供たちは皆んなしっかりと返辞した。

サの所へ来た。

「笹原雪雄」

「ハイ」

笹原雪雄とは笹原が君枝の代りに貰った養子である。来賓席の笹原はちよつと赧くなつたが、子供がうまく答えたので、万更で

もないらしくしきりにうなずいていた。

「佐渡島君枝」

「……………」

君枝は他所見していた。

「佐渡島君枝サン」

他吉は君枝の首をつつき、

「返辞せんかいな」

囁いたが、君枝はぼそんとして爪を噛んでいた。

「佐渡島君枝サンハ居ラレマセンカ？ 佐渡島君枝サン！」

他吉はたまりかねて、

「居りまつせエ、へえ。居りまつせ」

と、両手をあげてどなった。

頓狂な声だったので、どつと笑い声があがり、途端におどろいて泣きだす子供もあった。

さすがに他吉は顔から火が出て、よその子は皆しつかりしているのに、この子はこの儘育つてどうなるかと、がっくり肩の力が抜けた。

5

入学式の日には祖父が附添い故、誰にも虐められずに済んだが、翌日からもう君枝は、親なし子だと言われて、泣いて帰った。

けれど、他吉は俵をひいて出ていて居ず、留守中ひとりで食べられるようにと、朝出しなに他吉が据えて置いた膳のふきんを取って、がらんとした家の中で、こそこそ一人しよんぼり食べ、共同水道場へ水をのみに行って、水道の口に舌をあてながら、ひよいと見ると、路地の表通りで、

「中の中の小坊さん

なぜエ背が低い

親の速夜たいやに魚食ととうて

それでエ背が低い」

そして、ぐるぐる廻ってひよいとかがみ、

「うしろーに居るのは、だアレ？」

女の子が遊んでいた。

君枝はちよこちよこ駈け寄って行き、

「わて他あやんとこの君ちゃんや。寄せてんか（仲間に入れてんかの意）」

と、頼んで仲間に入れて貰ったが、子供たちの名に馴染がなく、うしろに居るのは誰とはよう当てず、

「あんた、辛気くさいお子才やなア」
もう遊んでくれなかった。

「通らんせエ

通らんせエ

横丁の酒屋へ酢買いに

行きは良い良い

歸りは怖い

ここは地獄の三丁目」

子供たちの歌を背中でききながら、すごすご路地へ戻って来ると、×団治は不憫だと落語を聴かせてやるのだった。

しかし、君枝は笑わなかった。

「わいの落語おもしろいのんか」

×団治はがっかりして、

「——ええか。この落語はな、『無筆の片棒』いうてな、わいや他あやんみたいな学のないもんが、広告のチラシ貰て、誰も読めんもんやさかい、往生して次へ次へ、お前読んでみたりイ言うて

廻すおもしろい話やぜ。さあ、続きをやるぜ笑いや」

そして、皺がれた声を絞りだした。――

「さあ、お前読んだりイ」

「あのう、えらい鈍なことですけど、わたしは親爺の遺言で、チラシを断つてまんので……」

「えらいまた、けつたいなもん断つてんねんなあ。仕様しやない。次へ廻したりイ」

「へえ」

「さあお前の順番や、チラシぐらい読めんことないやろ。読んだりイ」

「大体このチラシがわいの手にはいるという事は、去年の秋から

思っていた。死んだ婆^ばさんが去年の秋のわずらいに、いよいよという際になって、わいを枕元に呼び寄せて、——倅お前は来年は厄年やぞ。この大厄を逃れようと思たらよう精進するんやぞと意見してくれたのを守らなかつたばかりに、いま計らずもこの災難！」

「おい、あいつ泣いて断りしとる。お前代つたりイ」

「よっしゃ。——読んだら良えのんやろ？」

「そや、どない書いたアるか、読んだら良えのや」

「書きよつたなあ。うーむ。なるほど、よう書いたアる」

「書いたアるのは、よう判つてゐるわいな。どない書いたアるちゆうて、訊いてんねんぜ」

「どない書いたアるちゆうようなことは、もう手おくれや。そういうことを言うてる場席でなし、大体このチラシというもんは……」

「おい。あいつも怪しいぜ、もうえ、もうえ、次へ廻したりイ」
×団治は黒い顔じゆう汗を流して、演^やつたが、君枝はシユンとして、笑わなかった。

「難儀な子やなあ。笑いんかいな」

「わてのお父ちゃんやお母ちゃんどこに居たはんねん？」

「こらもう、わいも人情噺の方へ廻さして貰うわ」

×団治はげっそりした声をだした。

日が暮れて、×団治が寄席へ行ってしまうと、君枝はとぼとぼ

源聖寺坂を降りて、他吉の客待ち場へしよんぼり現われた。

「どないしてん？ 家で遊んどりんかいな」

「……………」

「誰も遊んでくれへんのんか」

それにも返辞せず、腋の下へ手を入れたまま、他吉をにらみつけて、鉛のように黙っていた。

「そんなとこへ手工入れるもんやあれへん」

すると、手を出して爪を噛むのだ。

^{ばばち}
「汚いことしたらいかん。阿呆！」

呶鳴りつけると、下駄を脱いで、それを地面へぶっつけ、そして、泪ひとつこぼさず、白眼をむいてじっと他吉の顔をにらみつ

けているのだ。

他吉はがっかりして子供のお前に言っても判るまいかと、はじめて小言をいい、

「お前はよ様の^{さん}子供衆^しと違^{ちが}て、両^{ふた}親^{おや}が無いのやさかい、余計

……」

……行儀よくし、きき分けの良い子にならねばならぬ、家で待つてゐるのは淋しいだろうが、そうお祖父^じやんの傍にばかり食つてゐては万一お祖父やんが死んだ時は一体どうする、ひとり居ても淋しがらぬ強い子供にならねばいけない、あとひとり客を乗せたら、すぐ帰る故、「先に帰つて待つて……」いようとは、しかし、君枝はどうなだめても、せなんだ。

他吉は半分泣いて、

「そんなら、お祖父やんのうしろへ随いて来るか。辛度しんどても構かめへんか。俵のうしろから走るのんが辛い言うて泣けへんか」

そして、客を拾って、他吉が走りだすと君枝はよちよち随いて来た。

他吉は振りかえり、しばしば提灯の火を見るのだと立ち停つて、君枝の足を待つてやるのだつた。

客が同情して、この隅へ乗せてやれと言うのを、他吉は断り、いえ、こうして随いて来さす方が、あの子の身のためだ、子供の時苦勞させて置けば、あとで役に立つことであろうという理窟が――、けれど他吉は巧く言えなんだ。

よしんば、言えたにしても、——半分は不憫さからこうしているのだ、ひとりで置いといて寂しがらせるのが可哀想だから連れて走っているのだ、いや、マニラで死んだこの子の父親がいまこの子と一しょに走っているのだという気持が、客に通じたかどうか、——客を乗せたあとの俵へ君枝を乗せて帰る途、他吉はこんな意味のことを、くどくど君枝に語つて聴かせたが、ふと振り向くと、君枝は俵の上で躰を立てていた。

「船に積んだアラ

どこまで行きやアる

木津や難波の橋の下ア……………」

他吉は子守歌をうたい、そして狭い路地をすれすれにひいては

いると、水道場に鈍い裸電燈がともっていて、水滴がポトリポトリ、それがにわかに夜更めいて、間もなく夜店だしがいつものように背中をまるめて黙々と帰って来る時分だろうか、ひとり者の
×団治がこそそ夜食をたべているのが、障子にうつっていた。

学校での君枝は出来がわるく、教場で他所見ばかりしていた。

「佐渡島サン！ ソンナニ外が見タカツタラ、教場ノ外へ出テイナサイ」

窓の外へ立たされて、殊勝らしくじつとうつぶんでいた顔をひよいとあげると、先生は背中を向けて黒板に字を書いていた。

書き終った先生が、可哀想だから、教場の中へ入れてやろうと、窓の外を見た時には、もう君枝の姿は見えなかった。

驚いた先生が教場を飛びだし、あちこち探すと、講堂の隅の柱にしよんぼり凭れて、君枝は居睡っていた。

壁にはいつの間に描いたのか、丸まげに結った女と、シルクハット姿の男の顔が茶色の色鉛筆で描いてあり、それぞれ、

「君チャンノオカアチャン」

「君チャンノオトウチャン」

と、右肩下りの字で説明がついていた。

間もなく、進級式があつた。

賞品をかかえて、校門から出て来る君枝の姿を、空の俤をひいて通り掛つた他吉が見つけた。

「褒美もろたんか、えらかつたな、休まん褒美か、勉強の褒美か

？」

毎朝学校へ行くのをいやがり、長願寺の門前で年中甘酒の屋台を出している甘酒屋の婆さんに時々背負って行ってもらうくらい故、休まん褒美を貰える筈がない、してみると、勉強のよく出来た褒美だろうか、と、相好くずして寄って行くと、

「違うねん」

君枝はぼそんと言ひ、実は病気で休んでいる近所の古着屋の娘の賞品を、ことづかつて来たのだった。

古着屋の娘は一学期出たきりで、ずっと学校を休んで薄暗い奥の部屋でねているのだが、父親が町内の有力者で、学務委員もしていた。

その夜、他吉はきびしく君枝を叱りつけた。

「ほんまに情けない奴ぢやな。どない言うてええやろ。げんくその悪い。自分が優等にもならんと、よその子の褒美うれしそうに預つて来る阿呆が、どこの世界にある？　阿呆んだら！　ちつとは恥かしいいうことを知らんかい。来年からきつと優等になるんやぜ。えッ？　優等になるなあ。なれへんか。どつちや。返辞せんか」

「わて優等みたいなもんようならん。それよか空気草履買うてんか。よそのお子皆空気草履はいたアる」

「阿呆んだら。何ちゆう情けない子や、お前は。こつちイ来い。灸《やいと》すえたるさかい」

掴まえて無理矢理裸かにし、線香に火をつけていると、君枝はわつと泣きだした。

「堪忍や。堪忍や」

その声に、メ団治がのそつとはいって来て、

「他あやん、お前なに泣かしてるねん？」

「灸すえたろと思たら、お前、泣きだしよったんや」

「当り前や。どの世界にお前、灸すえられて、泣かん子があるかい。大人のわいでも涙出るがな、だいいちまた、すえるにことかいて灸すえる奴があるかい」

「ほな、なにをすえたら良えねん？」

「さいな」

「團治はちよつと考えて、

「——阿呆！ 黴りな。だいたいおまはんは、人の背中ちゆうも
んを粗末にするくせがあつていかん。男のおまはんなら、背中に
なにがついてても良えとせえ。しかし、女の子の背中に灸の跡つ
けてみい、年頃になつて、どない恨まれるか判れへんぜ。難儀な
男やなあ」

「そない言うたかて、お前、まあ、聴いてくれ、笹原の小倅も古
着屋の子も、みな優等になつてんのに、この子はなんにも褒美も
ろて来よれへんねん。こんな不甲斐性者^{がしんたれ}あるやろか」

「そない皆褒美もろたら、だいいち学校の会計くるうがな。だい
たいお祖父やんのお前が読み書きのひとつもよう出来んといて、

孫が勉強あかんいうて、怒る奴があるかい。なあ、君ちゃん他あやんちよつとも字おせイ教おせてくれへんやろ？」

×団治に言われると、君枝は一そう真赤な声で泣きだした。

「泣きな、泣きな。君ちゃん、今晚はおっさんとこで一しよに寝よ。こんな鬼爺のところで寝たら、どえらい目に会わされるぜ。さあ、行こ、行こ」

他吉は×団治がそう言つて君枝を連れて行くのを、とめようとする元氣もなかった。

やつぱり里子にやつたり、自分の手ひとつで育てて来たのが間ちがいだったかと、げっそりして坐っていると、ふと火をつけたままの線香を握っているのに気がついた。

他吉はそれを手製の仏壇のところへ持つて行つた。

そこには、新太郎の位牌があつた。

燈明をあげて、じつとそれを見つめてみると、このまま君枝をどこぞへ遣つて、マニラへ行き、新太郎の墓へ詣つてみたいという氣持がしみじみ來た。

隣りから、法華のメ団治が、

「南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經！」

と、寒行の口調で唱っているのがきこえて來た。

「ドンツク、ドンツク、南無妙法蓮華經、ドンツク、ドンツク」

太鼓の口真似をしているのは、君枝だ。

あ、もう機嫌がなおつたのかと、他吉は思わず壁を見たが、や

がて、こそこそ蒲団のなかへもぐり込もうとした途端、ふと、孫が傍にいないことが寂しく来て、ベンゲットの夜はいつもこんなうらぶれた気持で寝たのだという想いが、ひっそりと、胸に落ちた。

ところが、どれだけ寝たか、ふと眼をさますと、メ団治のところで寝ていた筈の君枝がこそこそ傍へもぐり込んで来た。

他吉はほつと心に灯を点して、

「君枝、帰って来たんか。そうか。やっぱりお祖父やんとこの方がええやろ？　メさんは厭かくさかい、うつとうしいやろ、さあ、はいり、はいり、もつと中へはいり」

君枝の頭へ蒲団をかぶせてやり、

「——お前はどこがいちばん好きや。メさんとか、お祖父やん
とか」

「わて狭山のお婆んのところが好きや」

「あッ」

よしんば里子でも、やはり子供は女の傍で寝るのが良いのかと、
他吉は暫らく口も利けなかったが、やがて、

「——それでも、お祖父やんとかで、好きやろ？」

「灸すえへんか」

「すえへん、すえへん」

「ほんなら好きや」

「そか、好きか」

可愛さに気の遠くなる想いで、頭髮の熱っぽい匂いをかきながらじっと君枝を抱いていると、メ団治が、

「他あやん、えらいこっちゃ。君やんが夜中に居らんようになった」

家出したのちがうやろかと、寝巻きのままで、血相かえてやつて来た。

「メさん、何寝とぼけてるねん」

君枝をわざと蒲団の中へ押しかくしながら、言うど、メ団治も気がついて、

「なんや、ここに居てたんかいな。ああ、びつくりした。ひとの悪い子やぜ、ほんまに」

「おまはんは慇懃かくさかい、いやや言うとるぜ。お祖父やんところの方がええなあ、君枝」

「そんな殺生な——」

言いながら、表へ出ると、日の丸湯で湯槽の湯を抜いて床を洗っている音がザアザアと聴えて来て、河童路地もすっかり更けていた。

甘酒屋の婆さんが飼っている雞はきちがいだろうか、夜も明けぬのにだしぬけに頓狂な鳴声を立てた。

その声をききながら、×団治がもとの蒲団へもぐり込もうとすると、足がひやりとした。

見ると、寝小便の跡があつた。

なるほど、それで逃げてかえったのかと、
×団治はふと他吉の
喜んでいた顔を想った。

6

ある夜おそく、折箱の職人の家に間借りしている活動写真館の
弁士がにやにや笑いながらはいつて来て、どす濁った声で言うの
には、

「他あやん、あんたこの間新世界で三味線をもった五十くらい
の婆さんに乗せなかったかね」

「なんや、刑事みたいなものの言い様するねんなあ、気色のわる

い。玉堂はん、眼鏡かけてる思て威張りなや」

「ははは……」

左手で太いセルロイドの眼鏡を突きあげながら、橘玉堂はさむらいめいた笑い声を立てて、

「——なにが僕が刑事なもんか。僕は今日は仲人ですよ」

「仲人……？ そら、お門ちがいや、うちの孫はまだ十やさかいな、おまはん仲人したかったら、散髪屋のおばはんどこイ行きなはれ」

「聴こえるがな、聴こえたら、また朝日軒のおばはん頭痛を起しまっせ」

広島生れの玉堂は下手な大阪訛りで言つて、ちよつと赧くなつ

た。

最近、朝日軒のおたかは頭痛を起して三日寝こんでいた。

日の丸湯の向いのミヤケ薬局はもう息子の儀助の代になっていたが、儀助の妻が三人の子供を残して死ぬと、途端におたかは駈けつけて、葬式万端の手つだいをし、はた目もおかしいほどであった。

おくやみを述べるのにも、なにかいそいそとしていた。

その後、彼女はなにかと病気の口実を設けて、薬の調合をして貰いに行った。

儀助は口髭を生やし、敬吉と同じように町内会の幹事をしていた。なお、敬吉と同じ歳の四十二歳で、義枝と三つちがい、その

点でも釣合っていると、おたかはい、義枝がいきなり三人の子供の母親になれば、どうなるかと、義枝のちいさい身体をひそかに観察したりした。

かねがねおたかは、将棋好きの敬吉が商売を留守にしてはいけぬと思い、店の前に縁台をだすことを禁じていたが、やがて夏が来ると、自分から縁台を持ち出した。儀助が将棋好きだったのである。敬吉は田舎初段であつたが、おたかに言いふくめられて、三度に一度儀助に負けてやつた。

もはや、ひとびとは義枝が儀助の後妻になるものと疑わなかつたが、秋になると、儀助のところへ、江州から嫁が来た。平べつたい器量のわるい顔のくせに、白粉をべたべたとぬり、けれども

実科女学校を出ているということであつた。

花嫁の自動車が来る時分になると、義枝は定枝や久枝と一しよにぞろぞろと見に行つた。自動車が薬局の前に停ると、義枝の眼は駭いたように見ひらいて、一そう澄んだ青さをたたえた。浅黒いわりに肌の細かい皮膚は、昂奮のあまりぽうつと紅潮して、清潔な感じがした。

歸つて来ると、おたかは、

「しようむないもん見に行かんでもええ。阿呆やなあ」

と、にわかには熱が高まつたようで、蒲団の中へもぐり込んだ。

ところが、ものの一時間も経たぬうちに、おたかは立ち上つて、薬局へ祝いの酒肴など持って行き、夜おそくまで薬局の台所でこ

まごまと婚礼の手伝いをした。

そして、翌日から頭痛がすると言つて、三日寝こんだのである。心配した義枝が買つて来た薬の袋にミヤケ薬局とあるのを見て、おたかは理由もなく、泣いて義枝を叱つたということであつた……。

玉堂はそのことを言つたのだが、しかし彼が赧くなつたのは、ちかごろ彼は用事もないのに朝日軒の奥座敷へちよくちよく出かけているからであつた。

玉堂が行くと、義枝はおどおどして、お茶をもつて来た。玉堂はまだ三十二歳、朝日軒の末娘は二十歳で、玉堂の顔を見ると、ぷいと顎をあげて、出て行き、彼はちよつと寂しかった……。

それを想い玉堂は赧くなつたが、すぐもとのにやにやした顔になると、

「いったい乗せたのか、乗せなかつたのか、どっちなんだね？」と、言つた。

「それ訊いて、どないするちゆうネや」

さからつていると、もう炬燵のなかに、はいつていた君枝が、むつくり起き上つて、

「三味線もつたはるおばちゃんやったら、乗らはつた、乗らはつた」

と、言つた。

「そやつたかな。よう覚えてるなあ」

他吉が言うと、君枝は、

「そら覚えてる。うしろから随いて走つてゐるわてが可哀想や言うて、どんぐり（飴）くれはったさかい」

いつにないはきはきした声だった。

「それじゃ、やっぱり、そうだったのか」

玉堂は大袈裟にうなずいて、

「——実は他あやん、その婆さんというのが、僕のいる館こやの伴奏三味線を弾いている女だね」

「それがどないしてん？ なんぞ、俵のなかに忘れもんでもしたんか？ そんなもん見つかれへんかったぜ」

「まあ、聴きイな」

彼女は御蔵跡の下駄の鼻緒屋の二階に亭主も子供も身寄りもなく、ひとりひっそり住んでいる女だが……

「めったに俵なんか乗ったことのないくせに、この間、偶然あんなの俵に乗ったというのが、なにかの縁だろうな……」

他吉の俵のあとからよちよち随いて来る君枝の姿を見て、彼女はむかし松島の大火事で死なしたひとり娘の歳もやはりこれくらいであったと、新派劇めいた感涙を催し、盗んで逃げたい想いにかられるくらい、君枝がいとおしかった。夜どおし想いつづけ、翌日小屋に来て誰彼を掴えて、その奇妙な俵ひきの祖父と孫娘のことを語っているのを、玉堂がきいて、あ、それなら知っている僕の路地にいる男だと言うと、彼女は根掘り他吉のことをきき、

祖父ひとり孫ひとりのさびしい暮しだとわかると、ぽうつと、赧くなつて、わてもひとり身や。そして言うのには、あの人に後添いを貰う気持があるか訊いてくれ、わてにはすこしだが、貯えもある、もと通り小屋に出てもよし、近所の娘に三味線を教えてもよし、けつしてあの人の世帯を食い込むようなことはしない、玉堂はん頼みます云々……

「……年甲斐もなく、仲人を頼まれたわけだが、他あやんどないやね。君ちゃんの境遇を憐れんで、あんたと苦勞してみたいと言ふところが良いじゃないか。もつとも、あんたはどっか苦味走つたところがあるからね、奴さん相当眼が高いよ」

玉堂が言うと、他吉はぷつとふくれた。

「年甲斐もないちゅうのは、こつちのことや。阿呆なことを言いだして、年寄りを魘りなはんな。わいはお前、もう五十四やぜ」
「ところが、先方だつて五十一、そう恥かしがることはないと思うがな」

玉堂はそう言つて、明日また来るから、それまで考えて置いてくれと、歸つて行つた。婆さんの名はオトラと言つた。

他吉はぽかんとしてしまった。腹が立つというより、照れくさかつた。からかわれた想いもあり、どんな顔の婆さんかと、想いだしてみる氣もしなかつた。

「此間こないだのおばちゃん、うちへ来やはるのん？」

炬燵の火を見てやるために、蒲団のうしろから顔をつつこんで

いると、君枝がぼそんと言った。

「早熟^{ませ}たこと言わんと、はよ寝工」

君枝のちいさな足を、炬燵の上へのせてやっている、他吉はふと、ほんとうにあの婆さんが君枝いとしきに来てくれるのであれば、なんぼうこの子が倅せか、と思った。

すると、妙にそわついて来た。

他吉はその婆さんが来た時の状態を想像してみた。

朝、婆さんは暗い内に起きて、炊事をする。竈の煙が部屋いっぱいにもりだすと、他吉は炬燵のなかから這いだして来る。仏壇に灯明をあげて、君枝を起し、一しよに共同水道場で顔をあらって、家へはいると、もう朝飯の支度ができている。食事が済む

と、君枝に今日の勉強の予習をさせる。（婆さんはすこしぐらいなら字が読めるかも知れない）それが済むと、君枝は婆さんに連れられて、学校へ行く。（これまでは甘酒屋の婆さんが連れて行ってくれたのだが、甘酒屋の婆さんはもう腰も曲り、どうかすると、面倒くさがった）その間に他吉は俵の手入れをする。路地ではとんどが始まる。暫らくそれにあたって、他吉は俵をひいて出て行く。小学校の前を通りかかると、子供たちの唱歌がきこえて来る。その中に、君枝の声をききつけようと、ちよつと立ちどまり、耳を傾ける。そして、客待ち場へ行く。他吉の留守中、婆さんはそこら片づけものをしたり、洗濯をしたり、君枝の着物のほころびを縫うたりする。君枝が学校からひけて来ると、婆さんは

君枝と遊んでやる。銭湯へも連れて行く。おさらいも監督する。夜、添寝してやる。君枝が寝入っても、婆さんは寝てしまわない。他吉の帰りを待っているのだ。他吉が帰って来ると君枝の寝顔をしながら一しよに夜食をたべる。時には、隣のメ団治も呼んで、御馳走してやる。夜食が終ると、寝るまえの灯明を仏壇へあげる……。

他吉の想像はろくろ首のようにぐんぐん伸びたが、仏壇のことに突き当たると、どきんと胸さわいだ。

「わいひとりの了見で決められることとちがう。こら、位牌に相談せなどんならん」

他吉は仏壇の前に坐った。

お鶴、初枝、新太郎の三つの位牌のうち、どういうわけか、新太郎の位牌が強く目に來て、さびしくマニラで死んで行つた新太郎の氣持を想つて胸が痛んだ。

源聖寺坂の上の寺の中で、新太郎の顔を殴つたことも、思い出された。

「——ほな、おやっさんがそない行けというねやつたら、マニラへ行くわ」

おとなしく、言うことをきいた新太郎の言葉が、にわかに耳の奥できこえた。

親子の想いがぐつと皮膚に來た。

すると、もう他吉は、この家に誰ひとりとして他人を入れたく

ないと思つた。お鶴も初枝もそれをねがつてゐるだろうと、思われた。

この三人は君枝のなかに生きているのだ——そんな想いが、改めて来た。

「君枝とふたり水いらずで暮してこそ、新太郎をマニラで死なしたことが、生きて来るのや」

他吉は呟いた。

翌日、玉堂が来た時、他吉は、

「わいもベンゲットの他あやんと言われた男や。孫ひとりよう満足に育てることが出来んさかい、ややこしい婆さんを後妻に入れたと思われては、げんくそがわるい」

と、言つて、断つてしまつた。

ところが、翌朝、他吉が竈の前にしゃがんで、飯をたいていると、

「佐渡島はんのお宅はこちらでつか」

という声といつしよにその婆さんがはいつて来た。

そして、あつけにとられている他吉を押しつけて、

「わてが炊きま」

竈の前にしゃがんで、懷ろから紐をだして来て、たすき掛けになり、

「あんたはあがつて、懷手しとくなはれ」

五十一ときいたが、竈の火が顔に映つて、随分若く見えた。

「おまはん、朝っぱらひとの家へはいって来て、どないしよう言うねん？」

やっとそれだけ他吉が言うと、

「手伝いに来ましてん」

と、とぼけた。

相手が女では「ベンゲツトの他あやん」を見せるわけにもいかず、

「うちは手伝いさん頼んだ覚えおまへんぜ」

「ああ、わてかて頼まれた覚えおまへんけど、なにも銭もらお言うネやなし、そないぽんぽん言いはんな」

オトラ婆さんは半分喧嘩腰だった。

そんな押問答の最中に、君枝は眼をさました。
小さなあくびが突然とまつた。

「ああ、おばちゃん」

君枝は飴でおぼえていた。

「君ちゃん、起きたんか」

婆さんはいつの間にか君枝の名を知っていて、

「——いま、おばちゃん、御飯たいたげるさかいな、待っててや」
「おばちゃん、今日からうちへ来やはるの？」

君枝は起きだして来た。

「さあ?——」

婆さんは他吉の顔を見あげた。

他吉はわざと汚ったらしく手漬をかねで、横を向いた。

「君枝、まだ早い。寝てエ」

他吉は君枝を叱ったが、しかし、君枝が婆さんの袂にあらかじめはいつていた飴玉を貰う時には、もう叱らなかつた。

飯が炊けると、オトラはお櫃にうつそうとした。

部屋の中を掃除していた他吉は、飛んで来て、しゃもじを奪い御飯を仏壇の飯盛りにうつした。

そして、

「おばはん、もう帰り。——帰らんかッ！」

と、言つた。

相当きつい見幕だったので、オトラは驚いて帰って行つた。

が、彼女は他吉が俵をひいて出て行ってから、こつそりやつて来たらしい。

羅宇しかえ屋の婆さんが、夜女湯で一銭天婦羅屋の種吉の女房に語っているのを、他吉が男湯ではつきりきいたところによると、オトラは君枝が学校からひけて帰って来るのを、路地の入口で待ちうけて、一緒になかへはいり、飯を食べさせたり、千日前へ連れて行ったりして、他吉の帰る間際まで、君枝の相手になっていたということだった。

「今日お前千日前へ行つたんか」

他吉は君枝のおなかを洗ってやりながら、きくと、

「行つた」

「千日前のどこイ行つてん？」

「樂天地いうとこイ行つた」

「おもしろかつたか」

「うん、おもしろかつたぜ。おばちゃん泣いたはつた」

「なんぜや」

「芝居がかわいそうや言うて、泣いたはつた。——ほんまに、おもしろかつたぜ」

顎の下をシャボンをつけて、洗われながら、君枝は言つた。

他吉は手拭にぐつと力を入れて、

「なんぜいままで黙つてたんや？」

「そない言うたかテ……」

「おばちゃんが黙ってエ言うたんやろ？」

君枝はうなずいた。

「仕様のない婆やな」

「痛い、そないこすったら痛い！」

君枝が声をあげたので、他吉は手をゆるめて、オトラのことは成行きに任すより仕方がないと思った。

そして、君枝が折角オトラになつて、オトラを慕っているものを、むげに引きはなしてしまうのも可哀想だと、翌る朝またオトラが飯をたきに来た時はもう他吉はきつい言葉を吐かなかつた。オトラも要領がよく、飯をたいてお櫃にうつす前に、仏壇にそなえることも忘れなかつた。君枝を学校へも送って行つた。

他吉は出て行く時、

「おぼはん、君枝をたのんどきまつせ」

と、言つた。

「よろしおま、よろしおま」

オトラは眼をかがやかし、今日も活動小屋を休む肚をきめた。

「しかし、夜さはわいの戻つて来るまえに、帰つてもらうぜ。

近所の手前もあるさかいな」

他吉は相手の顔を見ずに言つた。したがってオトラがどんな顔をしたか、判らなかつた。

そんなことが五日続いた。

朝日軒のおたかはかねがね近所の誰が嫁を貰つても、また、嫁

いでも、それを見ききした日は必らず頭痛を起すという厄介な習慣をもっていたが、安の定オトラのことで頭痛を起して、二日ねこんだ。

玉堂は可哀想に仲人口をきいたというので、おたかの心性をわるくし、朝日軒の奥座敷へ行っても、あまり良い顔をされなかった。

7

オトラがいよいよ明日あたり御蔵跡から自分の荷物をはこんで来るという日のことである。

さすがに他吉は心がそわついて、いつもより早く俵をひきあげて、夕方まえに路地へ戻って来ると、三味線の音がきこえていた。

「高い山から

谷底見れば

瓜や茄子の

……………」

三味線に合わせて歌っているのが君枝だとわかると、他吉はいきなり家の中へ飛びこんで、オトラをなぐりつけた。

「この子を芸者にするつもりか。何ちゆうことをさらしやがんねん」

オトラは色をかえた。

「ああ痛ア。無茶しなはんな。三味線教^{おせ}るのがなにがいきまへんねん？」

眼を三角にして食つて掛り、

「——芸は身を助けるいうこと、あんた知らんのんか。斯^こやつて、ちやんと三味を教^{おせ}とけば、この子が大きくなって、いざと言うときに……」

「……芸者かヤトナになれる言うのか。阿呆！ あんぽんたん」
他吉はまるで火を吹いた。

「——そんなへなちよこな考えでいさらしたんか。ええか、この子はな、痩せても枯れても、ベンゲツトの他あやんの孫やぞ。そんなことせいでも、立派にやつて行けるように、わいが育ててや

る。もう、お前みたいな情けない奴に、この子のことは任せて置けん。出て行つてくれ。出て行け！ 暗うなつてからやと夜逃げと間違えられるぜ。明るいうちに荷物もつて出て行ってもらおか」

「ああ、出て行くとも」

オトラは荷物をまとめて本当に出て行つた。

「おばちゃん、どこイ行くねん」

と、君枝が随いて行こうとするのを、他吉はいつにない怖い声で、

「阿呆！ 随いて行つたら、いかん。どえらい目に会わずぜ」

それきりオトラは顔を見せず、他吉はサバサバした。

朝日軒のおたかはなにか昂奮して、おからを煮いて、もつて来

た。

ところが、他吉が芸者やヤトナの悪口を言つたといふので、同じ路地の種吉との間にいざこざが持ち上つた

種吉は河童路地の入口で、牛蒡、蓮根、芋、三ツ葉、蒟蒻、紅生姜、するめ鰯など一銭天婦羅を揚げ、味で売つてなかなか評判よかつたが、そのため損をしているようであつた。

蓮根でも蒟蒻でも随分厚身で、女房のお辰の目にひき合わぬと見えたが、種吉は算盤おいてみて、

「七厘の元を一銭に商つて損するわけではない」

しかし、彼の算盤には炭代や醬油代がはいつていなかったのだ。自然、天婦羅だけでは立ち行かず、近所に葬式があるたび、駕

籠かき人足に雇われた。氏神の生国魂神社いくだまの夏祭には、水干を着てお宮の大提燈を担いで練ると、日当九十銭になった、鎧を着ると、三十銭あがりだった。種吉の留守には、お辰が天婦羅を揚げたが、お辰は存分に材料を節約しまつしたから、祭の日通り掛りに見て、種吉は肩身の狭い想いをし、鎧の下を汗が走った。

そんな気性ゆえ、種吉は年中貧乏し、毎日高利貸が出はいりした。百円借りて、三十日借りの利息天引きで、六十円しかはいらず、日が暮れると、自転車であつて、その日の売り上げをさらって行つた。俗にいう鴉金だ。

種吉は高利貸の姿を見ると、下を向いてにわかに饅飩粉をこねる真似したが近所の子供たちも、

「おっさん、はよ牛蒡揚げてんか」

と、待て暫しがなく、

「よっしゃ、今揚げたるぜ」

と言うものの、摺鉢の底をごしごしやるだけで、水漬の落ちたのも気附かなかった。

種吉では話にならぬから、路地の奥へ行きお辰に掛け合うと、彼女は種吉とは大分ちがって、高利貸の動作に注意の眼をくばった。催促の身振りがあまって、板の間をすこしでも敲いたりすると、お辰はすかさず、

「人の家の板の間たたいて、あんたそれで宜しおまんのんか」
血相かえるのだった。

「——そこは家の神様が宿つたはるところだつせ」

芝居のつもりだが、矢張り昂奮して、声に泪がまじるくらい故、相手は些かおどろいて、

「無茶言いなはんな。なにもわては敲かしまへんぜ」

むしろ開き直り、二三度押問答の挙句、お辰は言い負けて、素手では帰せぬ羽目になり、五十銭か一円だけ身を切られる想いで渡さねばならなかつた。

それでも、一度だけだが、板の間のことをその場で指摘されるとなるとも、申し訳けのない困り方でいきなり平身低頭して詫びを入れ、ほうほうの態で逃げ帰つた借金取りがあつた——と、きまつてあとでお辰の愚痴の相手は娘の蝶子であつた。

蝶子はそんな母親をみつともないとも哀れとも思った。それで、尋常科を卒^でて、すぐ日本橋筋の古着屋へ女中奉公させられた時は、すこしの不平も言わなかった。どころか、半年余り、よく辛抱が続いたと思うくらい、自分から進んでせつせと働いた。お辰は時々来て、十錢、二十錢の小錢を無心した。

ところが、冬の朝、黒門市場への買い出しの帰り廻り道して古着屋の前を通り掛った種吉は、店先を掃除している蝶子の手が赤ぎれて血がにじんでいるのを痛々しく見て、そのままはいつて掛け合い、連れ戻した。

「よう辛抱したな。もうあんな辛い奉公はさせへんぜ」

種吉は蝶子に言い言いしたが、間もなく所望されるままに女中

奉公させた先は、ところもあらうに北新地のお茶屋で、蝶子は長屋の子に似ず、顔立ちがこじんまり整い、色も白く、口入屋はさすがに爛眼だった。何年かおちよぼをして、お披露目した。三年前のことである。

が、種吉ははじめから蝶子をそうさせる積りはさらになく、じつは蝶子が自分から進んで成りたいといった時、おどろいて反対したくらい故、他吉がオトラに言った言葉は、一そう種吉の耳に痛かったのだ。

種吉は他吉の家の戸をあけるなり、もう大声で、

「他あやん、さつきから黙ってきいてたら、お前えらい良え気なことを言うてたな」

「藪から棒に何言うてんねん？　羅宇しかえ屋のおばはんみたいな声だして……」

「お前うちのことあてこすつてたやろが……」

「どない言うねん？　いつたい……訳わかれへんがな。——まあ、あがりイな」

「ここで良え！」

突っ立ったまま、

「——胸に手工あてて、とつくり考えてみイ」

精一杯の見幕をだしたつもりだったが、もともと種吉は気の弱い男で、おろおろと声がふるえて、半泣きの顔をしていた。

「さあ、なんぞ言うたかな」

「芸者がどないか、こないか言うたやろ。他あやん、お前わいに
なんぞ恨みあんのんか。えッ？ お前に腐った天婦羅売ったか」

「ああ、そのことかいな。そう言うた」

他吉は思い当って、

「——それがどないしてん？」

「芸者がなにが悪いねん？——そら、他あやんとわいとは派アが
ちがう。しかし、なにもわいが娘を芸者にしたからというて、あ
ない当てこすらいでもええやないか。だいいち、お前あの時どな
い言うた……？」

……蝶子がお披露目する時、他吉はすこしでも費用が安くつく
ようにと、自身買って出て無料の俵をひいてやったが、その時他

吉は……、

「……わいも今までぎようさん沢山の芸子衆を乗せたが、あんな綺麗な子を乗せたことがない、種はん、ほんまに綺麗やったぜエ——と、言うたやないか」

「そやったな」

三年前のことを想いだして微笑していると、

「それを今更あんなきついこと言うて、どだい殺生やぜ」

種吉はもう普通の声であつた。ひとに怒ったり出来ぬ男なのだ。

「きついことテ、そら種はん邪推や。わいはなにもそんな氣イで言うたんとちがう。当てこすつたんとちがう。悪う思いなや。お前が因業な親爺や思たら、わいかテあの時ただの俵ひくもんかい

な。だいいち、お前はなにもあの娘を無理に芸子にだしたんちがうやないか」

「そら、そう言えば、そやけど……」

「そやろ？ お前がいやがる娘を無理にそうしたんやったら、そらわいの言うた言葉にこと気がさわらんならんやろ。しかし、お前はかえつてあの娘が芸子になる言うたのを反対打ったぐらいやないか。お前かテもと言うたら、わいと派アが一緒や。本当は大事な娘を水商売に入れるのんはいややねんやろ？」

「そや。ええこと言うてくれた。他あやん、ほんまにそやねん。わいはなにも娘を売つて左団扇でくらす気はないねん。げんに、わいはあの子が出る時、あの子に借金負わすまい思て、随分そら

工面したくらいやぜ、そらお前も知っててくれるやろ」

「知ってるとも。——まあ、掛けえな。そない立つてんと」

上り口のほこりを払って、座蒲団を出してやると、種吉は、

「ああ、構^{かめ}へん、構へん。座蒲団みたいなもんいらん。油で汚したらどんなんさかい」

手を振ったが、結局腰をおろして、

「——ほんまに他あやんええこと言うてくれたぜ。ここでの話やけど、わいもあの子のいいなりにあの子を芸子にして、じつはえらいことした思てるねん……」

蝶子は器量よしの上に声自慢とはつさい（お転婆）で売ったが、

梅田新道^{しんみち}の化粧品問屋の若旦那とねんごろになった。維康柳^{これやす}

吉といい、げてもの料理ことに夜店の二銭のドテ焼きが好きで、ドテ焼きさんと綽名がついていたが、

「わてのお父つあんも年中一銭天婦羅で苦勞したはる」

と言いながら「志る市」や「壽司捨」「正弁丹吾」「出雲屋」

「湯豆腐屋」「たこ梅」「自由軒」などのげてもの料理屋へ随いて廻っているうちに深くなつたのは良いとして、柳吉はひとり身ではなかつた。

知れて、柳吉は中風で寝ているが頑固者の父親をしくじり、勘当になり、蝶子にかかる身体となつたが、蝶子も柳吉と暮したさに自ら借金つくつて引き、黒門市場のなかの裏長屋に二階借りし

て、ふたり住んだ。

が、ぼんぼん育ちの柳吉には働きがなく、結局蝶子が稼ぐ順序で、閑にあかせて金づかいの荒い柳吉を養いながら、借金をかえしていいこうと思えば、二度の勤めかそれともヤトナかの二つ、勿論あとの方を選んだ。

三味線をいれた小型のトランクを提げて、倶楽部から指定された場所へひよこひよこ出掛けて行き、五十人の宴会を膳部の運びから爛の世話、浪花節の合三味線まで、三人でひきうけるとなると、ヤトナもろくな商売ではなかった。

おまけに、帰りは夜更けて、赤電車で、日本橋一丁目で降りて、野良犬やバタ屋が芥箱ごみばこをあさっているほかに人通りもなく、し

ーんと静まりかえった中にただ魚のはらわたの生臭い臭氣が漂うている黒門市場をとぼとぼうなだれて行くのだが、雪の日などさすがに辛かった。路地まで来て、ほっと心に灯をともし、足も速くなるが、「只今！」と二階へあがって、柳吉の姿が見えぬことがしばしばである。

儲けただけは全部柳吉が使うので、いつ借金がかえせるか見込みがつかず、おまけに柳吉の心が実家と蝶子の間を……

「……あっちへ行ったり、こっちへ行ったりで、ぶらぶらして頼りないんや。しかし、他あやん、これも無理はない。なんし、先方にはれつきとした奥さんもあるこっちやさかいな。蝶子の奴も、えらい罪つくりやし、おまけにそやって苦勞しとっても、いつな

んどき相手と別れんならんか判れへんし、苦勞の仕甲斐がないわ。ここでの話やけど、その柳吉つあんというのは吃音でな、吃音にわるい人間は居らんというだけあつて、人間は良え人間やけど、なんし、ぼんぼんやぜな、蝶子も余計苦勞や」

種吉はしみじみと言い、もうはいつて來た時の見幕などどこにも見当らず、

「——これというのも、みな芸者になつたばつかしや。ほんまに、他あやん、娘をもつても水商売にだけは入れるもんやあれへんぜ。言や言うものの、やつぱりお前の言う通りや」

喧嘩しに來たことを忘れて、種吉はすすご帰つて行つた。

8

オトラが居なくなると、君枝はふたたびしょんぼりした娘になつてしまった。

他吉の俵のあとに随いて走りながら、陰気な唇を噛み続け、笑い顔ひとつ見せなかった。

ところが、半年ほど経つたある日のことである。

×団治は君枝と次郎を千日前へ遊びに連れて行つた。

そして竹林寺の門前で鉄冷^{むねすかし}鋤泉をのみ、焼餅を立ちぐいしていると、向い側の剃刀屋から、

「し、し、し、×さんとち、ち、ちがうか」

と、言いながら出て来た男がある。

「なんや、維康さんかいな。えらいところで会ったな」

いつか柳吉は蝶子といっしよに河童路地へ来たことがあり、その時の顔馴染みであった。

「——この頃どないしたはりまんねん？」

×団治が言うと、柳吉は照れくさそうに、

「い、い、いま、この向いの、か、か、剃刀屋に働いてまんねん」

「さよか、そら宜しおまんな。蝶子はんも喜びはりまっしやろ、あんたが働く気になって……。どないだ？ 餅ひとつ」

「い、い、いや、もう、毎日向いでな、な、ながめてたら、食う

気起りまへんさかい。た、た、た、種はんによろしゅう言うとか
なはれ」

「よろしおま。ちとまたどうぞ路地へも遊びに来とくなはれ。蝶
子はんによろしゅう」

柳吉と別れて、電気写真館の前まで来ると、×団治は自分の宣
伝写真でも出てないやろかと、ふと陳列窓を覗いてみて、急に大
声だした。

「君ちゃん。見てみイ、お前のお父つあんとお母^かんの写真が出て
るぜ」

新太郎が町内のマラソン競争で優勝した時の十八年前の記念写
真が、変装写真や俳優の写真にまじって、三枚四十銭の見本の札

をつけて、陳列してあったのだ。

出張撮影らしく、決勝点になっている長願寺の境内で、優勝旗をもつてランニングシャツ姿で立っているのを、ひきまわした幕のうしろから、君枝の母親の初枝が背のびしてふと覗いている顔が、半分だけ偶然レンズのなかにはいつている。

たしか、まだ結婚前だったらしく、そんなことから二人の仲がねんごろになったのだろうか、×団治はなつかしかった。

初枝は桃割れに結って、口から下は写っていないかった。

「お父ちゃん、いたはる、しやけど、髭生やしたはれへんな」

「当り前や。二十六やそこらで髭生やすのは東西屋だけや」

「あ、お父ちゃん、お父ちゃん」

君枝はおどりあがっていたが、急に、

「——お母ちゃん居たはれへんわ」

しよげた。すると、次郎が、

「居てる、居てる、これや、ここをよう見てみイ、ほら、この幕のうしろからちよびつと顔だしてるやろ？ わい、君ちゃんところのお母んよう知ってるぜ。これや、これや、なあ、メさん」

「そや、そや」

君枝はじつとみつめていたが、

「ああ、居たはる、居たはる、お母ちゃん髪結うたはる。お父ちゃんもお母ちゃんも居たはる」

そして、きんきんした声で、

「——わて、もう親なし子やあれへんなア。もう、誰も親なし子や言うて虐めたら、あけへんし」

その日から、君枝はだんだん明るい子になり、間もなく行われた運動会の尋二徒歩競争では、眼をむき、顎をあげて、ぱつと駆けだし、わてのお父ちゃんはマラソンの選手やった、曲り角の弾みでみるみる抜いて一着になった。

他吉は父兄席で見えて、顔じゆう皺だらけの上機嫌だった。けれど、ふと、

「あの娘はいつも人力車のうしろに随いて走ってるさかい、一等になるのん当りまえのこつちや」

という囁きが耳にはいると、他吉は、

「それもそや。どや、わいの仕込み方はちがうやろ」

と胸を張る前に、なにか遠い想いに胸があつく、鉛筆の賞品を貰つてにこにこしている君枝を、くしやくしやに揉んで骨の音がするくらい抱きしめてやりたいくらいの、愛しさにしびれた。

ところが、その他吉がその夜君枝に向つていうには、

「お前ももう走りごくで一等をとるぐらいの元氣があんネやさかい、明日から学校をひけて来たら、日の丸湯の下足番しなはれ。^{あした}

わいが日の丸湯の大将によろ頼んどいて来たったさかい」

びつくりするような、きびしいいつけで、聴きつけたメ団治が、

「他あやん、お前なんちゆうむごたらしいこと言うネや。眼に入

れても痛いことないいうこの子を……お前、気でも狂たんとちがうか。何もこの子に下足番ささんでも、食べて行けるやろ」

と、言うのと、他吉は、

「お前は黙つとりイ。お前は寄席で喋つてたらええのや。一文の金にもならんことを、そうぺらぺら喋んな、だいたいお前は昔からわいの言うこというたら、いちいち逆らうけど、ほんまに難儀な男やぜ。えらい奴の隣りに住んでしもたもんや」

と、言った。さすがにメ団治はむつとして、

「そら、こつちの言うこつちや、わいも永年お前の隣りに住んでるけど、お前がこんな訳のわからん男とは知らなんだ。ああ、黙つてたるとも。お前らのまえでこれから物言うかい、お前のまえ

で屁もこけへんぞ」

と、出て行つたが、すぐ戻つて来ると、

「——他あやん、まあ考えてみイ。この子まだ十やぜ。こんな歳でお前、下足番が出来るかいな。わいが頼むさかい、堪忍したりイ」

「メさん、言うとかけどな、わいはこの子が憎うて、下足番させるのんと違うぜ。この子が可愛いさかい、させるねんぜ。君枝、お前もようきいときや。人間はお前、らくしよ思たらあかんねんぜ。子供の時からせえだい働いてこそ、大きなったら、それが皆自分のためになるねや。孔子さんかテそない言うたはる」

「ほんまかいな、他あやん、孔子さんがそんなこと言うたはるて、

こら初耳や。おまはんえらい学者やねんな」

「言うたはれいでか。樂は苦の種、苦は樂の種いうて、言うたはる」

「阿呆かいな」

と、×団治はあきれたが、×団治も×団治で、

「——そら、お前、大石内蔵之助の言葉や」

「まあどっちでもええ、とにかく、人間はらくしたらあかん。らくさせる氣イやったら、わいはとづくにこの子を笹原へ遣ったア。しかし、×さん、笹原の小倅みてみイ、やっぱり金持の家でえいように育った子才はあかな。十やそこらで、お前、日に二十錢も小遣い使いよる言うやないか、こないだ千日前へひとりで

活動見に行つて、冷やし飴五銭のみよつて、種さんとこの天婦羅十三も食べよつて、到頭下痢はらくになつて、注射うつやら、竹の皮の黒焼きのますやら、えらい大騒動やつたが、あんな子になつてみイ、どないもこないも仕様ない。親も親や、ようそんだけ金持たしよるな」

それに比べると、うちの子はちがう、学校がひけてから三助が湯殿を洗う時分まで、下足をとつて晩飯つきの月に八十銭だと、他吉の肚はもう動かず、翌日から君枝は日の丸湯へ通いで雇われた。

学校をひけて帰ると、ひとけのない家のなかでしょんぼり宿題をすませる。それから日の丸湯へ行き、腹の突きでた三助の女房

に代つて、下足の出し入れをするのだ。

履物を受け取つて下足札を渡し、下足札を受け取つて履物を渡す——これだけの芸は間諜つきもせずてきぱきとやれ、小柄ゆえ動作も敏捷に見えたが、しかし、できるだけ大きな声でといいつけられた——。

「おいでやす」

「毎度おおきに」

この二つはさすがにはじめのうちは、主人から苦情が出た。

夜、立て込む時間はまるで客の顔が見えず、血走つた眼玉で、下足札の番号をにらみつけ、しきりに泡食つていた。

ことに雨降りの晩は傘の出し入れもしなければならず、濡れた

傘のじつとりした手ざわりがたまらなかった。

冬がいちばん辛かった。手足の先がチリチリ痛むのだった。客がはいって来るたびに、さつと吹きこんで来る冷たい風だ。客は戸をしめるのを忘れた。いちいちそれを閉めに立った。その都度、鼻の先がチカチカ痛みをもった。

矢張り悲しかった。

けれど、他吉は夜おそく身をこごめて日の丸湯の暖簾をくぐる時、自身で草履をしまい、ろくろく君枝の顔をよう見なんだ。

君枝が渡す下足札を押しただいて受けとり、その手は血の色もなく静脈が盛り上って、かさかさと土のようで、子供心に君枝は胸が痛み、ひとびとが言うほど自分が祖父から辛く扱われてい

るとは、思えなんだ。

むしろ、このように働くのを自分の運命だと、君枝はなにか諦めていたようだったが、けれどただひとつ、昼間客のすくない時の退屈さは、なんとも覚えのない悲しさで、ガラス戸越しに表通りを見るともなく見て、無気力な欠伸をはきだしていると、泣きたくなつた。

そうして、いつかしくしく泣きながら居眠つてしまうのだが、そんな時いつも起してくれるのは、ガラス戸の隙間にシュツと投げ込まれる夕刊の音だった。

「あ、次郎ぼん！」

外は寒かったが、表へ出て見ると、風が走り、次郎の姿はもう

町角から消えていて、犬の鳴声が夕闇のなかにきこえた。

しかし、次郎はもう犬をこわがる歳でもなく、間もなく夕刊配達をよして、東京へ奉公に行つた。

9

十姉妹が流行して、猫も杓子も十姉妹を飼うた。榎路地の齒ブラシの軸の職人は、逃げた十姉妹を追うて、けつまずいて、足を折り、一生跛になった。メ団治は二羽飼うて、すぐ死なし、二円五十銭の損であつた。が、儲けた人も随分多く、谷町九丁目のメタル細工屋の丁稚は、純白の十姉妹を捕えて、一財産つくり、大

島の対を着て、丹波へ歸つて行つたと、大變な評判であつた。

ある日、他吉が口繩坂の上を空の俵をひいて、通りかかると、坂の下から、

「十姉妹や」

「十姉妹や」

声をかさねて、ひとびとがまるでかさなりあいながら、駈けのぼつて来た。

「——阿呆な奴らや。なにを大騒ぎさらしてけつかる」

他吉は綿を千切つて捨てるように、呟いたが、途端に、他吉のふところへ、追われた十姉妹が飛び込んで来た。

真つ白だ。

咄嗟に手を伸ばしたが、十姉妹はすつと飛び去った。

「しもた！」

他吉は叫んで、俵をおっぽり出して、推寺町から大江神社の境内まで追うたが、ふところに君枝に買うてやった空気草履がはいっているのに氣をとられて思うように走れず、到頭逃がしてしまつた。

そして、もとの場所へ戻つて来ると、俵が見えない。他吉は蒼くなつた。

その夜、他吉は日の丸湯へ来なかつた。朝出しなに、

「今日は空気草履買うて来たるぜ。日の丸湯へもつて行つたるさかい、待ってや」

と、言った祖父の言葉をあてにして、君枝はいま来るか、いま来るかと日の丸湯の下足場でちいさな首をながくしていたが、来ず、空しく十二時をきいた。

「お祖父やんのけちんぼ」

君枝は給料のほか盆正月の祝儀など、収入^みりの金は一銭も手をつけず、そっくりそのまま他吉に渡していたが、他吉は黙って受けとり、腹巻きに入れてしまうと、そのうちの一銭、二銭を、玉焼きでも買いいなと出してくれた例しもなく他のことは知らず、金のことになるとまるで人が変わったようになる日頃の他吉の気性を子供心に知っていたから、日の丸湯の暖簾を入れて飛んで帰ると、思わずそんな言葉が出た。

「——嘘ついたら、エンマはんに舌抜かれるし」

そして、上ると、他吉はもう蒲団をかぶつて寝ていて、枕元にコンニャクの形の空気草履が並べて置いてあった。

それでは、お祖父やんはびっくりさせようと思って、わざと日の丸湯へ来ず、枕元に置いて、自分は寝た振りしているのだらうと、君枝は思つて、こつそり空気草履を足にひっかけ、部屋の中をあるきながら、

「ああ、良え音するわ、ペタ、ペタ、ペタ、ペタ、この音寝てる人に聴えへんのやろか」

遠まわしに他吉を起すと他吉は、

「聴えることは聴えるけどな……」

精の抜けた寝がえりを打って、しょんぼりした顔をふわーっと、蒲団からだした。そして、言うことには、

「——君枝お前は感心な奴ちやな。文句もいわんと毎日よう動^{いの}いてくれる。それやのに、わいはなんちゅうど阿呆やろ。ほんまに子供のお前に恥かしいわ」

「お祖父やん、どないかしたんか。草履買うて釣もらうのん忘れたんか」

「それどころの騒ぎやあるかい」

他吉は大人に物言うような口調になり、

「——阿呆の細工に、十姉妹追いかけてる隙に、俵盗られてしもてん。えらいことになってしもた。明日から商売でけん」

だから、日の丸湯へ顔出しする元氣もなく、こうやって蒲団かぶつて寝ていたのだと、ぶつぶつ言うのと、君枝はぺたりと尻餅ついて、ああ、えらいことになってしもたと、子供心にこたえたようだった。

俵がなくては商売が出来ず、まる二日は魂が抜けたようになって、あちこち探しまわったり、

「ああ、もう焼糞や。焼の勘八、日焼けの茄子や」

と言いながら、畳の上に仰向けになってごろんごろんしていた。が、三日目の黄昏前、君枝がさすがに浮かぬ顔をして下足の番をしていると、

「えーうどんの玉ア

あつあつのお玉ちゃん

白い着物ベベきて朝から晩まで湯にはいり

つるつるの肌した

別嬪ちゃんのお玉ちゃん

十才あつて五銭」

と触れ歩いている声がきこえ、よく聴くと他吉の声だった。
もう腰の曲る歳で、荷が重いらしく、声もしわがれていた。

「まいどおおけに」

下足を渡して、客の出たあとより飛んで出ると、他吉はにこにこしながら、

「どや似合うか」

「よう似合にてるわ」

君枝の声に合わせて、種吉も天婦羅あげながら、

「他あやん、おまはんその方がよう似合てるぜ。声もわるないな」

「そやろか」

他吉は嬉しそうに言つて、

「——種さん、人間はお前、どないでもして食べて行けるもんやな。人間はへこたれたらあかんぜ」

これは半分君枝にもきかせ、そして、天びんを左肩へ置きかえ
ると、

「えーうどんの玉ア……」

やがて、声も姿もちいさくなつた。

風に吹かれて佇み、見送っていると、向うから東西屋が来て、河童路地の入口で停った。

そして、口上を述べだすと、種吉は路地の奥へ飛んで行き、直ぐお辰と一緒に出て来た。

柳吉と蝶子が高津神社坂下に間口一間、奥行三間半のちっぽけな店を借りうけてはじめた剃刀店の売り出しの東西屋らしいと、きいて君枝にもおぼろげに判った。

「ひとつうちのお父つあんの天婦羅の店の前で、景気ようやつとくれやす」

蝶子は東西屋に言ったのであろう、東西屋は今朝蝶子たちの店の前でやったのと同じくらい念入りに賑やかに口上を述べた。

朝日軒の敬吉が出て来て、

「種さん、おまはんもこいで一安心やな」

と、言うと、

「さいな。売れてくれると宜しおまつけど、さて開いて見たら、耳かきぐらいしか売れへんのとちがいまつか」

種吉はちよつと照れた。お辰はすかさず、

「敬さん、剃刀でもシャンプーでも用あつたら、注文したつとく
なはれや」

と、言った。

東西屋が天婦羅をふるまって貰つて、行つてしまうと、にわか
に黄昏れて来た。

日の丸湯へ戻り、ふと女湯の障子にはめられた赤、紫、黄、青の色硝子に湯槽の湯がゆらゆらと映つて、霞んでいるのを、いつもとちがうしみじみとした美しさだと見上げていると、

「上り湯ぬるおまつせ」

羅宇しかえ屋のお内儀の声がし、暫らくすると、季節はずれの
大正琴の音がきこえて来た。曲は数え歌の「一つとや」

朝日軒の義枝は去年なくなり、弾いているのは末の娘の持子で、
二十二歳、もちろん姉たちと一緒に独身で、すぐ上の兄の敬助は
郵船会社へ勤めているが毎日牛乳を三合のみ、肺がわるかった。

第三章 昭和

1

十年が経った。

君枝は二十歳、女の器量は子供の時には判らぬものだといわれるくらいの器量よしになっていた。

マニラへ行く前から黒かったという他吉の孫娘とは思えぬほど色も白く、

「あれで手に霜焼けひび赤ぎれさえ無かったら申し分ないのやが

……」

と言われ、なお愛嬌もよく、下足番をして貰うよりは番台に坐つてほしいと日の丸湯の亭主が言いだしたので、他吉はなにか狼狽して、折角だかと暇をとらせた。

そうして、寺田町のナミオ商会という電話機消毒婦の派出会へ雇われてみると、日の丸湯で貰っていた給料がどんなに尠なかつたかがはじめて判った。

あれほど錢勘定のやかましかった他吉が、ついぞこれまでそのことを口にしなかったのは、まるで嘘のようであつたが、君枝もまた余程うかつで、ただ他吉のいいなりに、只同然の給料で十年黙々と下足番をして来たのだった。

つまりは、ベンゲット道路の工事は日給の一ペソ二十五セントだけを考えていては、到底やりとげる事は出来なかったという他吉の口癖が、いつか君枝の皮膚にしみついていたのだろうか。

ベンゲットで砂を噛み、血を吐くくらいの苦しみを苦しんだ、どんな辛さにもへこたれなかった、そして最後まで工事をやり遂げたという想いだけが、他吉の胸にぶら下るただひとつの勲章だと、君枝にもわかつていた。

「文句を言わずに、ただもうせえだい働いたら良えのや。人間は働くために生れて来たのや。らくをしよ思たらあかんぜ」

この日頃の他吉の言葉は、だから、理屈ではなかっただけに、一そう君枝の腑に落ちていたのだった。

無智な他吉は、理屈がうまく言えず、ただもう蝸かたつむり牛の触角のように本能的な智慧を動かして、君枝を育てて来たのだが、それで、それなりに、君枝は一筋の道を歩かされて来たとしてもいべきだろうか。

それにしても、たしかに日の丸湯の給料はやすかった。

ナミ才商会では、見習期間の給料が手弁当の二十五円で、二月経つと三十円であつた。なお、年二回の昇給のほかに賞与もあり、さらに主任の話によれば、

「なんし、広い大阪やさかい、電話をもつてながら、申込んでさえ置けば、ちゃんと消毒婦を派遣してくれるちゅううちのような便利なもののあるのを、知らん家がある。そういう家へはいつて、

契約の勧誘をどしどし取ってくれば、成績によっては、特別手当もだすさかいな、気張って契約とつとくなはれや」

十年前といまでは金の値打ちがちがうとはいえ、しかし、尋常を出ただけにしては、随分良い待遇だと君枝はびっくりしたが、その代り下足番の時とちがって、仕事はらくではなかった。

朝八時にいったん商会へ顔を出して、その日の訪問表と消毒液をうけとる。

それから電話機の掃除に廻るのだが、集金のほかに、電話のありそうな家をにらんではいって、月一円五十銭で三回の掃除と消毒液の補充をすることになっている。なんでもないもののようにだが、電話機ほど不潔になりやすいものはないと呑み込ませて、契

約もとらねばならず、「おいでやす」と「まいどおおけに」だけでこと足りた下足番に比べて、気苦労が大変だった。

年頃ゆえの恥かしさは勿論だが、それに彼女は美貌だった。

消毒を済ませ、しるしの認印をもらって、消毒機をこそこそ風呂敷包みのなかにしまつて出て行く時、

「おやかまつさんでした」

という声の出ないほど、顔から火を吹きだし、腹の立つこともあった。

おまけに、大阪の端から端まで、下駄というものはこんなにちびるものと呆れるくらい、一日じゅうせかせかと歩きまわるので、からだがかたくたに疲れるのだ。

北浜の株屋を後場が引けてから一軒々々まわつて、おびただしい数の電話を消毒したあとなど、手がしびれた。

「ああ、しんど辛度才」

思わず溜息が出て、日傘について、ふと片影の道に佇む、——しかし、そんな時、君枝をはげますのは、

「人間はからだを責めて働かな嘘や」

という例の他吉の言葉、いや、げんに偶然町で出会う他吉の姿であつた。

一時はうどんの玉を売り歩いていたが、朋輩のすぐいちの増造に貸した金の抵当かたにとつてあつた人力車が流れ込んで来たので、他吉は再びそれをひいて出た。が、間もなく円タクの流行だ。圧

されて商売にならず、町医院に雇われたがれいの変な上着を脱ごうとしないのがけしからぬとすぐ暇をだされて、百貨店の雑役夫もしてみた。

ところが、今日この頃は、ガソリンの統制で、人力車を利用する客もふえて来たのを倖い、

「世の中てほんまにうまいことしたアる」

と、喜んで、また俵をひいて出ていたのだった。

「お祖父ちゃんももうええ歳や、ええ加減に隠居しなはれ。だいいち、もう坂路をひいたりするのが辛いやろ？」

と、停めても、

「阿呆いえ、坂路もありやこそ、俵に乗ってくれる人もあんのや

ぜ。ぶらぶら遊んだら、骨が肉ばなれてしまう」

と、きかず、よちよち「ベンゲツトの苦労を想えば、こんなもんすかみたいなもんや」という想いを走らせている他吉の気持は、君枝にはうなずけたが、しかし、その姿を見れば、やはりチクチク胸が痛み、眼があつく、

「――私に^{うち}甲斐性がないさかいお祖父ちゃんも働かんならんのだ」と、この想いの方が強く来て、君枝は思いがけず金銭のことに無関心で居れず欲が出た。

けれど、たとえば、電話機の消毒に廻る水商売の家でいわれる
「あんたの器量なら、何もこんなことをせんでも、ほかにもっと

金のとれる仕事がおまつしやろ」

という誘いには、さすがに君枝は乗る気はせず、やはり消毒液の勧誘の成績をあげて、特別手当をいくらかでも余計に貰うよりほかはないと、白粉つけぬ顔に汗を流して、あと一里の道に日が暮れても、せつせと歩くのだった。

半年ほど勤めたある朝、主任が、

「今日は忘れんように、萩の茶屋の大西いう質屋へ廻ってんか」と、言った。

「あそこは五日ほど前廻ったばかりでつけど……」

用事は電話機の消毒でも、さすがに質屋の暖簾をくぐるのは恥かしいという気持ばかりでもなく、そう言くと、

「そら判つてゐる。五日まえに行つたことは判つてゐる」

主任はなにかにやついて、

「——とにかく行つたつてんか」

変だなと君枝は思ったが、

「卓上（電話）でも引きはつたんでつしやるか」

と、いつけ通り、とにかく行くことにした。

「じゃあ、これ持つて行きなはれ」

主任はめずらしく、市電の回数券を二枚ちぎってくれた。

動物園前で市電を降り、食物屋や雜貨屋がごちやごちやと並んだ繁華な大門通りを抜けて、大門の近くで右へ折れると、南海電車の萩の茶屋の停留所の手前に、

「ヒチ、大西」

と青い暖簾がかかっていた。

入口でちよつとためらい、ちらとそのあたりを見廻してから、

「今日は」

と、はいつて行くと、

「おいでやす」

文楽人形のちやり頭かしらのような顔をして格子のうしろに坐つていた丁稚でっちが、君枝の顔を見るなり、

「電話のお方が来やりましたぜエ」

奥へ向つて、大声をだした。

瞬間奥の部屋でなにかさつと動揺があつた——と、君枝は思つ

た。

「秀どん、なに大きな声だしたはるねん。阿呆やな」

言いながら、いつもは奥の長火鉢の前で、頭痛膏をこめかみにはりつけた蒼い顔で、置物のようにぺたりと坐りこんでいる御寮人が、思いがけずいそいそと出て来て、

「——よう来てくれはりました。さあ、どうぞ。どうぞあがつとくれやす」

手をとらんばかりに愛想が良く、眉間の皺もなかった。

君枝は気味がわるかった。

「ほな、お邪魔します」

ちいさなモスの風呂敷包みをひらいて、消毒器のなかにはいつ

た脱脂綿をとって、器用な手つきで電話機を消毒し、消毒液入れに消毒液を入れてみると、いくつかの眼がじろじろと背中に、顔に、動作に來たようだった。

「あんたもお若いのに、たいてやおまへんな」

御寮人は傍をはなれずに、しきりに話しかけた。

「はあ、いいえ」

曖昧に返辞していると、

「このお仕事の前は、なにしたはりましたんでつか。——ずっとお家に……?」

「近所の風呂屋で下足番してました」

ありていに答えた。

「下足番?……」

御寮人はちよつと唸つたようだが、

「――それで、御家族は?」

と、訊いた。

なぜ、こんなことを訊くのかと、不審というより腹が立ち、

「お祖父さんと二人です」

「まあ、そうでつか。そら寂しおまん。ほいでお祖父さんはいま何したはるんです?」

「俵ひきしてます」

君枝はむつとした表情をかくすのに苦労が要つた。

「そうでつか? それはそれは……。御両親は早くなくなられは

つたんでつか？」

「はあ」

「ずっと以前にね？　そうでつか。それはそれは……。それで、お父さんは……？」

何をしていたのかと、御寮人は執拗かった。

「玉造で桶屋してましたけど、失敗してマニラへ行つて、死にました」

君枝はしみじみした口調だったが、顔はそんなに執拗い御寮人へ怒っていた。

「――御認印を」

そこを出しなに、若い男の真赤な眼が、上眼を使つてこちらを

みつめたように、君枝は思った。

あちこち消毒や勧誘にまわって、寺田町に帰って来ると、

「御苦労やった。どやった、質屋のぐあいは……？」

主任が言った。主任の顔は口髭を落して以来いつみても卵子の
ようにのっぺりしていた。

「……？……」

何故そんなことを言いだすのか、訳がわからなかった。

「息子が居たやろ？」

「……さあ？」

「さあとはえらいまた頼りない返辞やな」

笑って、ぽんと君枝の肩を敲き、

「——いまに君に運が向いて来るかも判れへんぜ。けっ、けっ、けっ……」

主任は抜けた齒の間から、けったいな笑いをこぼした。

君枝はますます訳がわからなかったが、帰り途、朋輩の春井元子の口からきいて、はじめて、主任が自分に大西質店へ行けと言った意味などが腑に落ちた。

「昨日あんたの留守中に、あそこの御寮人が事務所へ来やはったんよ。うち運よく帰ってたさかい傍できいてたらね……」

「……御寮人の言うのには、——藪から棒にこんな話をするのは何だけれど、実はお宅に勤めていらつしやる方で、色の白い、小柄な、愛嬌のある、……ああ、佐渡島君枝さんとおつしやるので

すか、……ところでその君枝さんのことですが、ざつくばらんに申せば、うちの倅が^{せがれ}お恥かしいことに君枝さんに、……なんといつてよいやら、……とにかく、まあ見染めたというのでしょうか……」

「……しとやかで、如何にも娘さんらしゅうて、そのくせ、働いてる動作がきびきびして、とても氣持がええ——贅らなあかへんし、——そこを息子さんが見染めたと言やはるのんよ……」

……もう、あの娘さん以外の女と結婚するのはいやだと、倅はひとり息子で甘やかして育てているだけに、言いだしたらあとへ引かない、実は母親の自分としても、父親はなし、ほかに子供もなし、早く嫁を貰いたいとひそかに物色中である。ついては、何

も倅の言いなりに君枝さんを……というわけでもないが、また、今すぐどうのこうのと思っているわけでもないが、しかし、一応倅の意見も尊重——といったはおかしいが、とにかく倅の思っている娘さんがどんなひとであるか、母親の責任としても知って置きたいという気持、……これは判っていただけだと思うが、それについて、お頼みというのは、実は君枝さんの印象は一二度消毒に來られたから知っているものの、なんといつてもおぼろげであるから、一度明日にでもうちへ寄越して貰えないか、——いえ、なに試験だとか、見合いだとか、そんな改まった大袈裟なものじゃなく、ほんのただ、いつものように働いていられる姿をちよつと見たいだけ、だから、君枝さんにはこのことは今のところ内密

にしていたきたい云々。

「……そこで、あんたが今日わざわざ派遣されたいうわけやねん」
寺田町から天王寺西門前まで並んで歩きながら、元子はひとりで喋った。

「そうオ？」

自分の知らぬ間にそんな話が起っていたのかと、君枝はどきんと胸騒いで、二十歳という年齢が改めてくすぐったく想いだされたが、あまい気持はなかった。

むしろ、なにか欺された気持が強かった。質屋の御寮人から執拗くいろんなことを問い訊されたことも、いやな気持で想い出された。

「それで、行つてみて、どやったの？」

元子は主任と同じようなことを訊いた。

「——どんな息子さんだったの？」

「さあ……？」

母親に似て変に蒼い顔をした若い男が、長火鉢の前で新聞をあつちこつちひつくりかえしながら、そわそわうかがうようにこつちを見ていたことだけ、記憶しているが、それも随分漠然とした印象だったから、

「——どんな人か知らん。うちなんにも考えてへんかったもの」
さすがに赧くなりながら、わりに正直に答えると元子は肱で君枝を突いた。

「あんた頼りないお子やなあ。敵の陣地へ飛び込んで、ぼやぼやしてたら、あかへんし。もつとしっかりしイゼ」

自分だったら、すくなくとも、主任から行けと言われた時にぴんと来て、どんな学校を出た男か、教養があるかないか、ネクタイのこのみがかまで、一眼でちゃんと見届けてやるんだと、二十五歳の元子は、分厚い唇をとがらし、元子は実科女学校へ二年まで行ったのが自慢の、どちらかといえば醜い女であつた。

喫茶店の前まで来ると、

「あんた、ちよつと珈琲のんで行けへん？ 今日奢ってもらわな損や」

元子が言い、さきに立つてはいった。

君枝はちらつと他吉の顔を想い泛べたが、贅沢といつても、月に一度だからと珈琲二杯分三十銭の散財を決心して、随いてはいった。

向い合つて、腰を掛けると、元子は喋り続けた。

「ほんまに奢ってもらうし。——というのはな、今日あんたがあの質屋へ行つてちよつとしてから、主任さんとこい御寮人さんから電話が掛つて来たそうやねん」

「ふーん」

「頼りない返辞やな。聴いてんのんか、あんた。よう聴きぜや。その電話というのがね——今日はわざわざ寄越していただいて、ありがとう、いずれお礼かたがた挨拶に伺うけど、ほんまに思った

以上の良い娘さんで、すっかり感心したちゆうて、掛つて来たんやし」

「嘘ばつかし」

「そない照れんかてええやないの。ああ、あんたはええな。質屋いうたら、あんた、お金が無かつたら、でけん商売やろ？ もうじきあんたはお金持ちの奥さんや。ええなあ。うち、入れに行つたら、沢山貸してや。いまから頼んどくし」

そこで元子は声をひそめ、

「——ここでの話やけどな、うちの恋人新聞記者やけど、月給四十円しか貰てへんねん。情けない話や。うちあんたの知ってるように月一円五十銭の回覧雑誌とつてるやろ。それ貸したげたらね、

うちの恋人なんぼ言うても、平気な顔してかえしてくれへんね。ほかの雑誌ともうじき交換せんならんのに、困ってんのに、かえしてくれへんところ見たら、どうやら、古本屋へ売ってしもたんとちがうやろか思て、うちもう腹が立つやら、情けないやら……そこイ行くと、あんたはほんまにええな。ええところから貰い手があるし、……」

君枝はそんな元子の愚痴がおかしくてならなかった。

かつて君枝は結婚のことなど想ってみたことがなく、げんにそういう話が自分に起っていることも、実感として来ないのだ。

自分ももうそんな年頃かと、ふと心の姿勢がかたくなることはなるのだが、しかし、自分が嫁入ってしまえば、あとに残った祖

父はどうなるかと、この思いが強く、それでなにもかも打ち消されてしまうのだ。

それに、彼女の周囲には、朝日軒の娘たちがいる。

文字通り、彼女には縁遠い話だった。

「ちつともええことあれへんわ」

君枝は味もそついても無さそうに言った。

「なんぜやのん？」

「うち、お嫁入りみたいなもんせえへん」

そういう君枝の気持は元子には判らなかつた。

「へえ？ そらまたなんぞやのん？ 気に入らへんの？ あそこ
の息子さん感じわるいのん？」

ひとりで決めて、

「——そう言えば、そうやなあ。お嫁さんを選ぶのは男の権利やろけど、しかし呼びつけて、こつそり試験したり、観察したりするのん、ちよつと厚かましいな。あんたが好んでそうするのんやったらともかく、何も知らんあんたを、勝手にお嫁さんの候補に見立てて、試験したりするのん、考えてみたら、ちよつといややな。あんたが感じわるい思うのん無理ないなあ」

十五錢ずつ出し合つて、勘定をはらい、喫茶店を出ると、もう暗かった。

元子と別れて、市電に乗ると、もう君枝はそのことを忘れてしまい、他吉にもそんな話のあったことを話さなかったが、翌日君

枝はいやでもそのことを想いださねばならなかった。主任がまた言いだしたからである。

「今日は五時までには帰って来てんか？」

「はあ……？」

「大西さんが親子でいつペンあんたと御飯をたべたい言うのでな。わしも一緒に行くさかいな」

「でも、そんなこと……。お祖父ちゃんが……」

「お祖父さんにはあとでまた話しするから」

きいて、君枝はぐつと怒りがこみ上げて来た。

「——俵夫やと思つて、莫迦にしてる。うちのお祖父ちゃんは、そんなひとに莫迦にされたりする人とかがう。それに、うちは長

女や。嫁に行けるからだとちがう。それを知つて、勝手にそんな話を決めてしまうのは、長屋の娘や思て、あなどつてゐるのやろ。うちはあなどられても構^{かめ}へんけど、お祖父ちゃん可哀想や」
そう思い、君枝は自身の奥歯のきりきり鳴る音をきいた。

君枝はその日、事務所へ帰らなかつた。

翌日、休んで職を探してあるいた。

夜、帰つて来ると、速達が来ていた。

明日出勤されたしと短かく書いてあつた。

朝、行き、やめる旨言い、日割勘定で手当を貰い、その足で職業紹介所へ出掛けた。

2

間もなく、君枝はタクシーの案内嬢に雇われた。

難波駅の駐車場へ出張して、雨の日も傘さして、ここでも一日立ちずくめの仕事で、雇われてみると、やはりベンゲットの他あやんの娘らしい職場だった。

暫らくすると、タクシーの合乗制度が出来た。

誰が考えついたのか、同一方面の客を割前勘定で一ツ車に詰めこめば、ガソリンが節約でき、客も順番を待つ時間がすくなく、賃金も安くつくという、いかにも大阪らしい実用的な思いつきだった。

君枝はその方の案内に、混雑時など、

「△△方面へお越しの方はございませんか」

と、ひっきりなしに叫び、声も疲れた。

馴れぬ客はまごつき、運転手も余り歓迎せぬ制度ゆえ、案内嬢は余程の苦労が要る。親切・丁寧・敏速でなくてはいけぬと、監督は口癖だった。

しかし、君枝は、そんなにまで勤めなくともと監督が言うくらい、熱心で、愛嬌もあり、客の捌きも申し分なく、親切週間に市内版の新聞記者が写真と感想をとりに来て、美貌のせいもあり、たちまち難波駅の人気者になった。

小柄の一徳か、動作も敏捷で、声も必要以上にきんきんと高く、

だから客たちは、ほう綺麗だなど思つても、うっかり冗談を言いかける隙がなかった。

自分でも、難波駅の構内から吐きだされて来る客を、一列に並ばせて、つぎつぎと捌いて行く気持は、なんとも言えず快いと思つた。

けれど、何千という数の客を捌き終つて、交替時間が来て、日が暮れ、扉を閉めた途端にすつとすべりだして行く最後の車の爆音を聴きながら、ほつと息ついて靴下止めを締めなおしていると、ふと、

「お祖父^じやんは人力車アで、孫は自動^{えんたく}車の案内とは、こらまたえらい凝つて考えたもんやなあ」

と口軽に言つた。團治の言葉が思いだされて、機械で走る自動車と違つて、人力車はからだ全体でひかねばならぬ——と、祖父の苦勞を想つてにわかにながら心がつた。

そんな君枝の心は、しかし他吉は与り知らず、七月九日の生いく魂神社たまの夏祭には、天婦羅屋の種吉といつしよに、お渡御わたりの人足に雇われて行くのである。

重い鎧を着ると、三十錢上りの二円五十錢の日当だ。

「お祖父ちゃん、もう今年は良え加減に、鎧みたいなもん着るのん止めときなはれ。うち拝むさかい、あんな暑くるしいもん着んといて……」

君枝は半泣きで止めるのだったが、他吉はきかず、

「阿呆らしい、ひとを年寄り扱いにしくさつて……。去年着られたもんが、今年着られんことがあるかい。暑い言うたかて、大阪の夏はお前マニラの冬や」

「そんなこと言うたかて、歳は歳や。羅宇しかえ屋のおっさんかて、こないだ流してる最中にひっくりかえりはったやないか。お祖父^じやんにもしものことあつたら、どないすんのん？」

「げんのわるいこと言いな。あんな棺桶に半分足突つ込んだおっさんと同じようにせんというて……。生国魂はんのお渡御^{わたり}の中にはいるもんが、斃れたりするかいな、ちゃんと生国魂はんがついてくれたはる——ああ、今年もベンゲットの他あやんが来とるなあ言うて、守ってくれはるわいな」

心配しな、心配しなと、矢張り他吉は鎧の方に廻るのだった。

丁度その日は君枝の公休日だった。

よりによつてそんな日にぶらぶらしていることが、君枝はなにか済まぬ気がして、枕太鼓や獅子舞いの音がきこえても、お渡御わたりを見る気もせず、夜他吉が帰ってから食べられるように、冷やしそうめんをこしらえて、井戸水の中に浸けたあと、生国魂神社へお詣りすると、足は自然下寺町の坂を降りて、千日前の電気写真館の方へ向いた。

もとあつた変装写真や歌舞伎役者の写真がすっかり姿を消して、出征の記念写真が目立って多くなっているなかに、どうした奇蹟であろうか、二十年前のマラソン競争の記念写真が、色あせたま

ま、三枚一円八十銭の見本だと、値だけ高くなつて陳列されてい
るのを見ると、気が遠くなるほどなつかしかった。

——大阪の夏はお前マニラの冬やと祖父が言つたところを見る
と、マニラは余程暑いところであらう。そういうところで死んだ
父親にふさわしく、ランニングシャツ一枚の裸かでニコニコ笑い
ながら、優勝旗を持つて立っている父親の黄色く色あせた顔を、
まるで陳列ガラスを舐めんばかりにして、みつめていると、不意
に、

「お君ちゃん——と違いますか」

声をかけられた。

振り向いて、暫らく顔をみつめてから、

「あ。次郎ぼん！」

九年前、東京へ奉公に行き、それから二年のちにたつたひとりの肉親の父親が蝙蝠傘の骨を修繕している最中に卒中をおこして死んだ報せで、河童路地へ帰つて来た時、会うたきり、もう三十そこそこになっている筈だとすばやく勘定した拍子に、君枝はそんな歳の彼を次郎ぼんという称び方したことに想い当り、はつと赧くなっていると、次郎は、

「やつぱり君ちゃんやった。いや、なに、この写真を見たはるんでね、そうじゃないかと思つたんや」

大阪弁と東京弁をごっちゃに使つて言い、

「——べさんに連れられて、この写真いつしよに見たのは、あれ

はもう十年も前でんなあ。——お君ちゃんはいつもこれ見に来るの？」

「ええ。もう十日にあげず……」

暑さのせいばかりではなく、汗が全身を絞った。次郎は背も高く、肩幅も広く、顔だちもきりりとしていた。濃い眉が日焼けした顔によく似合っていた。

その眉をすこし動かせて、次郎はふつと笑い、

「しかし、それやったら、写真館ここの親爺こさんにそう言つて、譲つて貰えば良いのに……。案外遠慮深いんだなあ、お君ちゃんは……」

と、言つた。

「それでも、なんや厚かましゅうて……」

「そんなら僕がそう言つて、貰つてあげましようか。ちよつと待つて下さい。どこイも行かんと……。行つてしもたら、駄目ですよ」

次郎はそう言つと、二段ずつ階段を上つて行つた。

君枝は暑さを忘れた。

暫らくすると、半ズボンの写真館の男といつしよに、降りて来た。

「これです」

次郎が陳列窓の写真を太短い手で指すと、

「これでつか。こら、あんた、骨董物でっせ」

写真館の男は言ったが、

「——しかし、まあ、そんな事情でしたら、譲りまひよ」

と、陳列ガラスを外して、その写真をとってくれた。

そんな次郎の親切が君枝は思いがけず、嬉しくて、子供の頃親なし子だといって虐められた時、かばって呉れたのは次郎ぼんひとりだったと想いだすと、君枝はその電気写真の筋向いにある喫茶店へはいって、冷たいものでも飲もうとすすめられたのを、もう断り切れなんだ。

珈琲をのみながら、他吉の話が出た。

「いまだに俵ひいてますねん。今日は生国魂さんのお渡御わたりや言うて……」

「……鎧着て出たはるんですか」

次郎はちよつと驚いた顔だったが、

「これもみな、うちに甲斐性が無いさかい……」

と、しよげかかる君枝を押えて、わざと、歳はとってもやつぱり「ベンゲットの他あやん」は元気でんなあと微笑んで見せ、

「それじゃ、何ですか、今でもやつぱり人間はからだを責めて働かな嘘やという主義は、守ってはるんですなあ」

と、君枝をかばう口調になった。

「——そう言えば、僕だって、他あやんのあの口癖はときどき想いでしたよ。いや、げんに今だって……」

自分はからだ一つが資本の潜水業が仕事で、二十二の歳からこ

の道にはいり、この七年間にたいていの日本の海は潜つて来、昨日から鶴富組の仕事で、大阪の安治川へ来ているのだと、次郎は語った。

「……もつとも、こんどのはたいした仕事じゃなく、お話にならんくらいのちいさな船の解体で、たいして乗気じゃなかったんだが、しかし大阪ときくと懐しくてね、ついふらふらと来てしもたわけですよ」

次郎は君枝にどの程度の親しきで語って良いか、迷っているような言葉づかいであつた。

が、君枝はぎつくばらんな言い方に頼もしさを感じ、ふとまじる大阪訛りになつかしさをそそられ、丁寧な口調の出る時は何か

赧くなった。

次郎は珈琲を何杯もおかわりし、ストローを使わずに、がぶがぶと一息にのみほし、氷のかたまりも瞬く間に咽へ入れてしまった。

そんな逞ましい飲み振りを見ると、君枝はふと次郎がかつて日の丸湯の男湯で、ひとりあばれまわって、番台からよく叱られていたことなどを想いだしたので、そのことを言うと、

「そうそう、僕は日の丸湯の中で、べさんが五十読む間、潜つたことがあるよ。いつだったか、べさんがあんまりゆっくり数を読むので、もうちよつとで眼をまわしかけてべさんの足にしがみついたら、べさんがびっくりして飛び上ったもんやから、そいで

僕も頭を出したけど、メさんが飛び上らなんだら、僕もうあの時におだぶつやった」

次郎は存外話し上手で、

「——しかし、考えてみたら、あの時分から僕は潜るのが好きやつたんやなあ」

だから、東京の品川にある写真機店へ奉公に行つて三年、ひとり現像の仕事を覚えた頃には、もうそこを飛びだして、現像を頼みに店へよく来ていた木下という写真道楽の潜水夫の世話で、房州布良の吉田親分のところへ弟子入りして、潜水夫の修業をはじめた。

普通潜水の修業は、唧筒ポンプ押し一年、空気管持ち一年、綱持ち一

年で、相潜^{もぐ}りとなるまでには凡そ四年掛るのだが、それを天分があつたのか、それとも熱心の賜でか、弟子入りして二年目にはもう相潜りになつた。

いったいに潜水夫の仕事は、沈船作業（単に荷物を揚げるような簡単なものから、爆破解体、巨大船の浮上のような大規模なもの）のほかに、築港、橋梁、船渠等の水底土木作業や水産物の採集などであるが、沈船作業は主として春から夏の頃の風ぎの海に限られており、水産物採集には勿論漁期がある。だから陸上工場のように絶えず仕事が一応しているわけではなく、その間生活の安定を得るためには、これらの特技のうち二つ乃至三つの種類に馴れる必要があるが……、

「自慢するようやけど、僕は一人前の潜水夫になってから、三年のうちに、必要な技術をすっかり覚えてしまったわけですよ」

と、次郎は語った。

「しかし、現像の方かてころつと忘れてしもたという訳じゃないですよ。いまだに仲間の撮したのを時々現像してやってるけど——
—そうそう、お君ちゃん、あんたの今の写真、なんやったら僕が味善^{あんじょ}う引伸したげよか、それ大分剥げてるから……」

「おおけに、でも、そんなことして貰たらお気の毒ですわ」

「お気の毒なんて、水臭い。同じ河童路地に住んでた仲やないですか」

君枝は「仲」という言葉になにがなしに赧くなった。

「——とにかくその写真預つときます」

次郎は写真をうけとつて、

「——早い方が良いでしょう。明日までに引伸してあげますよ。
夕方渡してあげます」

きびきびした東京弁で言つた。

「はあ、おおけに」

「どこが良いかな」

「……？……」

「中之島公園が良いだろう。中之島公園で渡してあげます。来られますか」

次郎はちよつと考えて、そう言つた。

君枝は急に珈琲のストローから口をはなして、次郎の逞ましい顔を見上げ、そこに何か異性を感じた。

「はあ、でも……」

十三、七つの子供の頃ならともかく、お互い成長したふたりが、公園などで会うのは大それたことのように思われ、きゅつと心の姿勢が窮屈になった。

君枝は自動車の案内係をしている旨を言い、

「今日は公休でつけど、明日は……」

勤めがあるから出られないと下向くと、次郎は、

「でも、仕事は夕方までで済むんでしょう？」

はきはき言った。圧されて、

「はあ、五時に交替ですねん」

「そんなら、五時半頃来られまっしゃろ？」

次郎の大阪弁が君枝の固い心をいくらかほぐした。

「そら、行かれんことあれしめへんけど……」

「そんなら、待ってます」

次郎は伝票を掴んで、

「――出ましょうか」

立ち上りざまに言った。

「ええ」

と、それにうなずいたのが、丁度、公園で待っているというこ
とへの返辞にもとれて、君枝は狼狽したが、しかし、

「いいえ、行けません。止めときます」

とは咄嗟にどうしても出なんだ。

「浮いた気持で行くのんと違う。お父さんや母ちゃんの写真の引伸しを貰いに行くのや」

君枝はふと泛んだこれを自分へのいいわけにしながら、勘定を払っている次郎を喫茶店の表で待っていると、

「——今日写真を見に来て、次郎ぼんに会うたんも、ひよつとしたら、写真のひきあわせかも判れへんわ」

思わず呟いた自分の言葉に気の遠くなるほど甘くしびれたが、途端にお渡御わたりの太鼓の音が耳に痛くきこえて来た。

西日がきつかった。

鎧を着てよちよち歩いているだろう他吉のほこりまみれの足が
想いだされて君枝はそんな甘い想いに瞬間浸ったことが許せない
ように思い、ちりちり胸が痛んで眉をひそめていると、次郎はい
そいそと出て来て、

「こつち歩きましょう」

片影の方へ寄った。君枝の眉をひそめた表情を、日射のせいだ
と思ったのである。

写真館の隣りに寄席があつた。

寄席の隣りに剃刀屋があつた。

次郎は剃刀屋の細長い店の奥を覗いてみたが、十年前にそこに
いた柳吉の姿はもうそこに見受けられなかった。

が、剃刀屋の向いには、相変らず鉄冷鉾泉《むねすかし》屋があつた。

剃刀屋の隣りに写真屋があつた。

写真屋の隣りに牛肉店があつた。

名も昔通りのいろは牛肉店で、次郎は千日前はすこしも変らぬなど思いながら通り過ぎようとすると、君枝はなに思つたのか、

「ちよつと……」

と、言つて立ち停り、そして、いろはの横町へはいつて行つた。そこは変にうらぶれた薄汚ないごたごたした横町で、左手のマッサージと看板の掛つた家の二階では、五六人の按摩がお互い揉み合いしていた。その小屋根には朝顔の植木鉢がちよぼんと置か

れていて、屋根続きに齒科医院のみすばらしい看板があつた。看板が掛つていなければ、誰もそこを齒医者とは思えぬような、古びたちっぽけなしもたや風の家で、頭のつかえるような天井の低い二階に治療機械が窮屈にかすんで置かれてあつた。

右手は薄汚れた赤煉瓦の壁で、門をくぐると、まるで地がずり落ちたような白昼の暗さの中に、大提燈の燈や、蠟燭の火が揺れて、線香がけむり、自安寺であつた。なにか芝居の書割りめいた風情があつた。

こんなところに寺の裏門があつたのかと、次郎がおどろいていると、君枝は、

「ちよつと……」

待っていてくれと言つて、境内の隅の地蔵の前にしゃがんで、頭を下げ、そして、備え付けの杓子で水を掛けて、地蔵の足をたわしでしきりに洗い出した。

地蔵には浄行大菩薩という名がついているのを、ぼんやり眼に入れながら、

「お君ちゃん、えらい信心家やねんなあ。なんに効く地蔵さんやねん？」

傍で突つ立っている所在なきにきくと、君枝は、

「何にでも効くお地蔵さんや」

と、手と声に力を入れて、

「——かりに眼工が悪いとしたら、このお地蔵さんの眼工に水掛

けて、洗^{あろ}たら良うなるし、胸の悪い人やったら、胸の処^{とこ}たわしで撫でたらよろしおますねん」

しきりに洗いながら、言つた。

なるほどそう言えば、その地藏は水垢で全身赤錆びて、眼鼻立ちなどそれと判別しかねるくらい擦り切れていて、胸のあたりの袈裟の模様も見えなくなつてしまつてゐる。随分繁昌してゐる地藏らしかつた。

次郎はそんな迷信が阿呆らしく、それを信じてゐるらしい君枝がかえつて哀れにすら思われて、

「ほんまに効くのかなあ。僕はあやしいと思うよ」

ずけずけと言つたが、ふと君枝の洗つてゐる部分が地藏の足だ

と気がつく、何か思い当り、

「他あやん、この頃足でもわるいのんとちがうの？」

と、訊いた。

「いいえ、わるいことはあれしまへんけど、お祖父ちゃんは足つかう商売やさかい、疲れが出んように思て……」

こうして願を掛けているのだと、君枝は一所懸命な手の動きでそれを示した。

次郎はいきなり胸うたれて、もう君枝の迷信を咎める気持を捨てた。

「お待^{まつ}遠^{とう}さん」

立ち上った君枝の、いくらか上気して晴れぱれとした顔を見る

と、何故ともなしに次郎の心に急に大阪の郷愁がぐつと来て、その拍子に、河童路地での日々がなつかしく想い出された。

路地から見えるカンテキ横丁のしもた屋の二階で、夏の宵、

「現われ出でたる武智光秀……」と一つ文句の浄瑠璃をくりかえしくりかえし稽古しているのを、父親が蝙蝠傘の骨を修繕しながら口真似していた——そんなことまで想い出されて、自安寺の表門を出ると、

「お君ちゃん、文楽でも見えへんか？」

と言った。

「そうでんなあ」

迷っていると、

「文楽見たことある？　僕も見たことないけど、久し振りに大阪へ来た序でにいつぺん大阪らしい味を味わうと思て」

次郎は言つた。

「ええもんや言うことは聴いてまっけど……」

しかし、本当に次郎と一緒にそんなところへ行つてもよいものかと、君枝は躊躇した。

「どうせ、今日はお祭やろ？」

重ねて次郎に誘われると、君枝は水掛け地蔵へお詣りしたこと
で気が軽くなつていたせいもあり、うなずいた。

千日前の電車通りを御堂筋の方へ折れて、新橋の方へ並んで歩
く途々、君枝は、

「文楽いうたらね、蝶子はん、この頃浄瑠璃習たはるんでっせ」
蝶子の噂をした。

「蝶子はんて、あの種さんとこの？」

「そうだす」

「維康さんどないしたはりまんねん？ さつき千日前の剃刀屋覗いたら、居たはれへんかったけど……」

次郎が言うと、君枝は、

「あそこ廃めはったんは、そろもう古い話やわ。十年も昔になりまっしやろか」

と、話しだした……。

3

高津神社坂下の小さな店で剃刀屋を始めたが、はやらなかった。東西屋を雇って開店した朝、蝶子は向う鉢巻きでもしたい気持で店の間に坐っていた。午頃、

「さっぱり客が来えへんな」

と、柳吉は心細い声をだしたが、蝶子はそれに答えず、眼を皿のようにして表を通る人を睨んでいた。

午過ぎ、やっと客が来て安全剃刀の替刃一枚六銭の売上げという情けないありさまだった。

「まいどおおけに」

「どうぞごひいきに」

夫婦がかりで、薄気味悪いくらいサーヴィスを良くしたが、人気が悪いのか新店のためか、その日は十五人客が来ただけで、それも殆んど替刃ばかり、売上げは極めて二円にも足らなかった。

そんな風に客足がさっぱりつかず、ジレットの一つも出るのは良い方で、大抵は耳かきか替刃ばかりの浅ましい売上げの日が何日も続いた。

話の種も尽きて、退屈したお互いの顔を情けなく見かわしながら店番していると、いつそ恥かしい気がし、退屈しのぎに昼の間の一時間か二時間浄瑠璃を稽古しに行きたいと言いだす柳吉を、蝶子はとめる気も起らなかった。

柳吉は近くの下寺町で稽古場をひらいている竹本組昇に月謝五円で弟子入りし、二ツ井戸の天牛書店で稽古本の古いのを漁って、毎日ぶらりと出掛けた。柳吉は商売に身を入れるといつても、客が来なければ仕様がなといった顔で店番をするときも稽古本をひらいて、ぼそぼそうなつた。その声がいかにも情けなく、蝶子は上達したと褒めるのもなんとなく気が引けた。

毎月食い込んで行つたので、蝶子は再びヤトナに出た。苦労とはこのことかとさすがにしんみりしたが、宴会の席ではやはり稼ようばい業

大事とつとめて、一人で座敷を浚って行かねばすまぬ、そんな気性はめつたに失われなかつた。ひとつには、柳吉の本妻は先年死に、蝶子も苦労の仕甲斐があつた。

ところが、柳吉はそんな蝶子の氣持を知ってか知らずにか、夕方蝶子が三味線を入れた小型の手提げ鞆をもつて出掛けて行くと、そわそわと早仕舞いして、二ツ井戸の市場の中にある屋台店で、かやく飯とおこぜの赤出しを食べ、鳥貝の酢味噌で酒をのみ、六十五銭の勘定を払って、安いもんやなあと、「一番」でビールやフルーツをとり、肩入れしている女にふんだんにチップをやると、十日間の売上げが飛んでしもうた。

ヤトナは儲けでどうにか食いつないでいるものの、そんな風に柳吉の使い方がはげしいので、だんだん問屋の借りも嵩んで来て、一年辛抱した挙句、店の権利の買手がついたのを倅い、思い切つて店を閉めることにした。

店仕舞いの大投売りの売上げ百円余りと、権利を売った金百二十円と、合わせて二百二十円余りの金で問屋の払いやあちこちの支払いを済ませると、しかし十円も残らなかった……。

「……蝶子はんもお気の毒な人やわ。折角維康さんを一人前にして、維康さんのお父さんに、水商売をした女に似合わん感心な女や言うて認めて貰おう思たはるのに、維康さんがぼんぼんで、勘当されてても親御さんの財産が頭にあるさかい、折角剃刀店しはっても、一年経つか経たぬうちに、到頭そんな風に店を閉めはって、飛田の近所に二階借りしやはったそうでんねん……」

君枝がそう語ると、

「へえ？　そうですか。それから、どないしやはったんです？」

蝶子と柳吉の消息を知りたいという気持よりも、君枝の話を並んで歩きながらききたいという気持から、次郎は言った。君枝は声が綺麗だった。おまけに、次郎には久し振りの大阪弁だ。

「それから、なんでも三年ほど蝶子はんが食うやのまずの苦勞して貯めはった金と、維康さんが妹さんから無心して来やはった金で、また商売はじめはったんです」

「どんな商売……？」

「関東煮屋……」
だきや

をやるうということになり、適当な売り店がないかと探すと、近くの飛田大門通りに小さな関東煮の店が売りに出ていた。

現在年寄夫婦が商売しているのだが、土地柄客種が柄悪く荒つ

ほいので、おとなしい女中はつづかず、といって気性の強い女はこちらがなめられるといった按配で、ほとほと人手に困って売りに出したのだというから、掛け合うと、存外安く造作から道具一切付き三百五十円で譲ってくれた。

階下は全部漆喰で商売に使うから、寝泊りするところは二階の四畳半一間ある切り、おまけに頭がつかえるほど天井が低く陰気臭かったが、廓の行き戻りで人通りも多く、それに角店で店の段取りから出入口の取り方など大変良かったので、値を聞くなり飛びついて手を打った。

新規開店に先立ち、法善寺境内の正弁丹吾亭や道頓堀のたこ福をはじめ、行き当りばつたりに関東煮屋の暖簾をくぐって、味加

減や銚子の中身の工合、商売のやり口を覚えた。

そして、お互いの名を一字ずつ取って「蝶柳」と屋号をつけ、いよいよ開店することになった。

まだ暑さの去っていない頃とて、思い切って生ビールの樽を仕込んでいた故、早く売り切ってしまったねばビールの気が抜けてしまうと、やきもき心配したほどでもなく、存外よく売れた。

人手を借りず、夫婦だけで店を切り廻したので、夜の十時から十二時頃までの一番たてこむ時間は眼のまわるほど忙しく、便所に立つ暇もなかった。

廓をひかえて夜更けまで客があり、看板を入れる頃はもう東の空が紫色に変わっていた。くたくたになって二階の四畳半で、いっと一

刻^きうとうとしたかと思うと、もう眼覚しがジジ……と鳴った。

寝巻きのままで階下に降りると、顔も洗わぬうちに、「朝食出来
ます、四品附十八銭」の立看板を出した。朝帰りの客を当て込ん
で味噌汁、煮豆、漬物、御飯と都合四品で十八銭、細かい儲けだ
とたかをくくっていたところ、ビールなどを取る客もいて、結構
商売になったから、少々の眠さも我慢出来た。

秋めいて来て、やがて風が肌寒くなると、もう関東煮屋にもつ
て来いの季節で、ビールに代って酒もよく出た。酒屋の払いもき
ちんきちんと現金で渡し、酩酊酒の本舗から看板を寄贈してやろう
というくらいで、蝶子の三味線もこんどばかりは空しく押入れに
しまったままだった。

柳吉もこんどは半分以上自分の金を出したというせいばかりでもなかったろうが、身の入れ方は申し分なかった。

公休日というものも設けず、毎日せつせと精出したから、無駄費いもないままに、勢い残る一方であつた。柳吉は毎日郵便局へ行つた。

身体のえらい商売だから、柳吉は疲れると酒で元気をつけた。酒をのむと気が大きくなり、ふらふらと大金を使つてしまう柳吉の性分を蝶子は知っていたので、ヒヤヒヤしたが、売り物の酒とあつてみれば、柳吉も加減して飲んだ。が、そういう飲み方もしかし、蝶子にはまた一つの心配で、いずれはどちらへ転んでも心配は尽きなかった。大酒を飲めば莫迦に陽気になるが、チビチビ

やる時は元来吃りのせいで無口の上に一層無口になり、客のない時など椅子に腰かけてぽかんと何か考えごとしているらしい容子を見ると、梅田の実家のことを考えてるのところがうやろか、そう思つて、矢張り蝶子は気が気でなかった。

案の定、妹が婿養子を迎える婚礼に出席を撥ねつけられたといつて、柳吉は気を腐らせ、貯金の中から二百円ほど持ち出して出掛けたまま、三日帰つて来なかった。蝶子は柳吉を折檻した。

「あんたはそれで良うても、わてがあんたのお父さんに笑われま。二人で、苦勞してこれだけの人間になりました言うて、お父さんの前へ早よ出られるようにしよ思て、一所懸命になつてゐるわての気持は、あんたには判れしめへんのんか。いつになったら、真面

目な人間になつてくれまんねん」

「も、も、も、もうわかつた。お、お、おばはん、わかつた」

二度と浮気遊びはしないと柳吉は誓つたが、蝶子の折檻は何の薬にもならなかつた。暫らくすると、また遊びだした。二人の世帯を築きあげて行こうという気持には、到底なれないらしかつた。そろそろ肥満して来た蝶子は折檻するたびに息切れした。

柳吉が遊びに使う金はかなりの額だつたから、遊んだあくる日はさすがに彼も蒼くなつて、盞も手にしないで、黙々と鍋の中をかきまわしていた。が、四五日たつと、もう客の酒の爛をするばかりが能やないと言いだし、水を混ぜない方の酒をたつぷり銚子に入れて、銅壺の中へ浸け、チビチビと飲んだ。

明らかに商売に飽いた風で、酔うと気が大きくなり、自然足は遊びの方に向いた。紺屋の白袴どころでなく、これでは柳吉の遊びに油を注ぐために商売をしているようなものだ、蝶子はだんだんに関東煮屋をはじめたことを後悔しだした。するうちに、酒屋への支払いなども滞り勝ちになり、結局やめるに若かずと思つて、その旨柳吉に言う、柳吉は即座に同意した。

「この店譲ります」と貼り出したまま、陰気臭くずっと店を閉めた切りだった。柳吉は浄瑠璃の稽古に通いだした。

貯えの金も次第に薄くなつて行くのに、一向に店の買手がつかなかった。蝶子はそろそろ三度目のヤトナに出ることを考えていた。

ある日、蝶子が二階の窓から表の人通りを眺めていると、それが皆客に見えて、商売をしていないことがいかにも残念であつた。向い側の五六軒先にある果物屋が、赤や黄や緑の色が咲きこぼれて、活気を見せていた。客の出入りも多かつた。果物屋は良え商売やなあとふと思うと、もう居ても立つても居られず、柳吉が稽古から帰つて来ると、早速「果^{あかもん}物屋をやれへんか」と相談したが、柳吉は「さいな」と呟いたきり、てんで乗氣にならなかつた。いよいよ食うに困れば、梅田へ行つて無心すれば良しと考えていたのだ。

ある日、どうやら本当に梅田へ出掛けたらしかつた。帰つて来ての話に、無心したところ、妹婿が出て応待したが、訳のわから

ぬ頑固者の上に、いずれはこの家の財産は養子の自分のものと思つてか随分けちんぼと来ていて、結局鏝一文も出さなかつた——と、柳吉はしきりに興奮した。

そして、「果物屋をやるより仕様がな——顔をにがり切つて見せた。

関東煮の諸道具を売り払つた金で店を改造した。仕入れや何やかやで大分金が足らなかつたので、衣裳や頭のを質に入れ、なおヤトナ倶楽部を経営している昔の朋輩のおきんの所へ金を借りに行った。おきんは一時間ばかり柳吉の悪口を言つたが、結局「蝶子はん、あんたが可哀想やさかい」と百円貸してくれた。

「あんたが維康さんと晴れて夫婦になる日を待つてまつせ」おき

んに言われて蝶子は泣けた。

その足で父親の種吉の所へ行き、果物屋をやるから二三日手を貸してくれと頼んだ。西瓜の切り方など要領を柳吉は知らないから、経験ある種吉に教わる必要があったのだ。種吉は若い頃お辰の国元の大和から車一台分の西瓜を買って、十六の夜店で切り売りしたことがある。その頃蝶子はまだ二つで、お辰が背負うて、つまり親娘三人総出で、一晩に二百個売れたと種吉は昔話をし喜んで手伝うことを言った。

種吉は娘夫婦の商売を手伝うことが嬉しくてたまらぬ風であった。店びらきの日、筋向いにも果物屋があるのを見て、「西瓜屋の向いに西瓜屋が出来て、西瓜同志の差し向い」と淡海節の文句すいた

を言いだした。その果物屋は店の半分が氷店になっているのが強味で、氷かけ西瓜で客を呼んだから、白然蝶子たちは切身の厚さで対抗しなければならなかった。が、言われなくとも種吉の切り方は頗る気前が良かった。一個八十銭の西瓜で十銭の切身何個と胸算用して、柳吉がハラハラすると、種吉は、「切身でまけて丸口で儲けるんや。損して得とれや」と言った。そして、

「ああ西瓜や、西瓜や、うまい西瓜の大安売りや！」

と、派手な呼び声を出した。向い側の呼び声もなかなか負けていなかった。蝶子も黙って居られず、

「安い西瓜だつせエ！」

と、金切り声を出した。それが愛嬌で客が来た。蝶子は鞆のよ

うな大きな財布を首から吊して、売り上げを入れたり、釣銭を出したりした。

柳吉は割合熱心に習ったので、四五日すると西瓜を切る要領などを覚えた。種吉は丁度生国魂の祭で例年通りお渡御わたりの人足に雇われたのを機会に、手を引いた。帰りしな、林檎はよくよくふきんで拭いて艶を出すこと、水蜜桃には手を触れぬこと、いったいに果物は埃を嫌うゆえ始終はたきをかけることなど念押しして行った。

その通りに心掛けたが、しかしどういうものか足が早くて水蜜桃など瞬く間に腐敗した。店へ飾って置けぬから、辛い気持で捨てた。毎日捨てる分が多かった。といって品物を減らすと店が貧

相になるので、仕入れを少なくするわけにも行かず、巧く捌けな
いと焦りが出た。儲けもあるが損も勘定に入れねばならず、果物
屋も容易な商売ではないとだんだん分つて来ると、急に柳吉に元
氣がなくなつた。

蝶子は柳吉がもう果物屋商売に飽きたのかと、心配しだした。
が、その心配より先に柳吉は病気になつた。もうせんから柳吉は
げてもの料理を食べ過ぎたせいか胃腸が悪くて、二ツ井戸の実費^じ
医院^びへ通い通いしていたが、こんどは尿に血がまじつて、小用の
時泣声を立てた。実費医院で診て貰うと、泌尿科の専門医へ行く
が良からうとのことで、島ノ内のK病院が有名だときいて、診せ
ると、膀胱がわるいという。

十月ばかり通ったが、はかばかしくなおらなかった。みるみる痩せて行つた。蝶子も身体は肥えていたが、眼のふちが黝み、柳吉の病気が気ばかりでならなかった。診立て違いということもあるからと、市民病院で診て貰うと、果して違っていた。レントゲンを掛けて腎臓結核だとわかった。その日から、入院した。

附添いのため店を構っていられたので、蝶子は止むなく店を閉めた。果物が腐って行くことが残念だったから、種吉に店の方を頼もうと思つたのだが、運の悪い時はどうにも仕様のないので、母親のお辰が四五日まえから寝ついていたので。子宮癌とのことで、今日明日がむつかしかった。

柳吉が腎臓を片一方切るといふ大手術を受けた翌朝、お辰は死

んだ。蝶子は柳吉の傍に付き切りで、母親の死に目に会えなかった。柳吉の命が助かったことだけがせめてもの慰めだったが、しかし、親不孝者だという気持は矢張りチクチク胸を刺して来た。お辰は蝶子が駈けつけて来ぬことをすこしも恨まず、それどころか、「維康さんも蝶子のために、苦勞して来やはった。維康さんの手術が味善あんじよういつてくれたら、わては蝶子の顔見んと死んでも満足や」と、蝶子を俥で迎えに言つてやろうといいだした他吉へ言つた——ときいて、さすがに蝶子は身もだえした。

葬式にだけは出て、そして病院へ飛んで歸つて来ると、十二三の女の子を連れた若い女が見舞いに来た。顔かたちを見るなり、柳吉の妹だと分つた。はつと緊張し、

「よう来て呉れはりました」

初対面の挨拶代りにそう言つて、愛想笑いを泛べた。母親の葬式の日に笑顔を見せるのは辛かったが渋い顔は気性からいつて出来なんだ。連れて来た女の子は柳吉の娘だった。ことし四月から女学校に上つていて、セーラー服を着ていた。頭を撫でると、顔をしかめた。

主に病氣の話をして、半時間ののち柳吉の妹は帰つて行つた。送つて廊下へ出ると柳吉の妹は、

「おうちの苦労はお父さんもこの頃よう知つたはりますせ。よう尽してくれはる、こない言うてはります」

と言ひ、そつと金を握らせた。蝶子はこの言葉を本当と思ひた

かった。死んだ母親にきかせたかった。二年前、柳吉の家から人が来て、別れ話が出されたことなども、ちらと想い出された。

柳吉はやがて退院して、湯崎温泉へ出養生した。費用は蝶子がヤトナで稼いで仕送りした。二階借りするのも不経済だったから、蝶子は種吉の所で、寝泊りした。他吉は種吉に、

「種さん、おまはんはええ子をもった。わいは昔蝶子はんのことあんな風に言つたけど、悪う思いなや。いや、實際感心な娘やなあ」

と、言つた。

ところが、柳吉は湯崎で毎日散財していたのだ。見舞いがたら湯崎へ出向いた蝶子は、柳吉が妹からもこつそり送金させていた

と知って、気が狂ったようになった。

「兄妹やから、なにもお金を送らせて、わるい法はないけど、しかし、それではわての苦勞がなんにもならん。散財さえしてくれなんだら、わてだけの力であんたを養生させられた筈や」

柳吉と一緒に湯崎から大阪へ帰ると、蝶子は松坂屋の裏に二階借りした。相変らずヤトナに出た。こんど二階借りをやめて一戸構え、ちゃんとした商売をするようになれば、柳吉の父親もえらい女だと褒めてくれ、天下晴れて夫婦めおとになれるだろうとはげみを出した。その父親はもう十年以上も中風で寝ていて、普通ならとつくに死んでいるところを持ちこたえているだけに、いつ死なぬとも限らず、生きているうちにと蝶子は焦った。が、柳吉はまだ

病後の身体で、滋養剤を飲んだり、注射を打ったりして、それがきびしい物入りだったから、半年経つても三十円と纏った金はたまらなかつた。

4

「……そないして苦労して来やはったところが、渡る世間に鬼はないとはよう言うてまんなあ——蝶子はんの昔のお友達でえらい出世したはる金八さんという方が十年振りで、ぱったり蝶子はんに会いはって、いまどないしたはる言うところからこないやこないやと蝶子はんが言やはると、そらお気の毒や言うてお金貸した

げはつて、それを資本に、蝶子は下寺町にサロン「蝶柳」いう喫茶酒場をひらきはつて、今でも盛大にやつたはる……」

君枝はそう語った。

「ほう……？ それはよかった。種さんも喜んだはるやろ？ そいで、維康さんのお父さんは……？」

次郎がきくと、君枝は、

「さあ、それですがな……」

と、力を入れて、

「——お父さんの生きてるうちに天下晴れてと思てはつたのに、
到頭一昨年おとしの暮に死んでしまいはつて……。蝶子は葬式にだけは出られるつもりで、喪服をこしらえたりしたはつたのに、葬

式に出る資格ない言われて、そんなむごい仕方があるかい。うて蝶子はんは泣きはって、えらい騒動だした。そらまあ無理もおまへんわ。なんせ蝶子はんは一生日蔭者で終りとうない思て、一所懸命苦勞して来やはったのに、いざその苦勞が報いられるいう矢先きになつて、維康さんのお家の方からそんな扱いされはったんで、つさかい……。しかし今ではもうそんな騒動もなし、それに維康さんの御両親とも死んでしまひはったし、誰も二人のことに反対する権利のある人はないし、なんでもつい此こないだ間籍を入れはって、仲良うやったはる言うことです。この春にも、二ツ井戸の天牛の二階で維康さんが浄瑠璃語りはって、うち招待券もろて見に行たら、蝶子はんがその三味線を弾かはって、仲の良えところおました

わ」

君枝はちよつと赧くなった。

「しかし、維康さんにはお子さんがあるやろ？　その子ひきとつたはんの？」

「さあ、それは……」

君枝はもうそれ以上蝶子のことに触れたくないという顔をした。実は、柳吉の子供はもう女学校を卒業する年頃だが、死んだ母親から、父親は悪い女に奪われたと言いきかせられていた言葉が耳に残って、蝶子を良くは思わず、どうしても柳吉の妹の傍をはなれようとしなかった。ひとつには蝶子や柳吉の商売をきらっているせいもあった。

それが柳吉の頭痛の種だった。養子に取られてしまった財産に
はもう未練がないとしても、さすがに娘のことは忘れかねて、浄
瑠璃の稽古もそんな心のふさぎを忘れるためであるかも知れな
かった。してみれば、蝶子も今は何ひとつ遠慮気兼ねや生活の心配
はないというものの、心はからりと晴れ切っているわけでもな
いだろうと、君枝は蝶子が日頃陽気な明るい気性であるだけに、
一層蝶子の淋しさが同情されるのだった。

文楽座の前まで来たのでもう蝶子の話を打ち切った。

ところが、文楽座は人形芝居はかかっていず、古い映画を上映
しているらしく、映画のステイールが陳列されていた。人形芝居
は夏場の巡業で東京へ行っているとのことだった。

「なんのこっちゃ。折角大阪へ来て文楽でも見ようという気になったのに、これやったら、わざわざ大阪で見なくても、東京に居れば結構見られた勘定やな」

次郎はちよつとがっかりした。

「――活動でも見る」

「今日は紋日で満員でしょう？」

君枝は見る気がないらしかった。

なんだかこのまま別れて帰ってしまいたいように思っているらしく見えて、次郎はますますがっかりしたが、ふと想いだして、眼を輝かした。

「そや、良いものがある。あんたの喜ぶもん見せたげよ」

「どんなもん？　うちの喜ぶもんで……」

「黙って随いといぜ。ついこの近所や。僕昨日見て、ああ、これをお君ちゃんに見せたら喜ぶやろと、ほんまに思ったんや」

「そう才？　いったい、なんやの？」

言いながら、次郎のあとに随いて行くと、次郎は四ツ橋の電気科学館の前まで来て、

「ここや」

と、立ち停った。

そこには日本に二つしかないカアル・ツァイスのプラネタリウム（天象儀）があり、この機械によると、北極から南極まで世界のあらゆる土地のあらゆる時間の空ばかりでなく、過去・現在

・未来の空まで居ながらにして眺めることが出来るのだという次郎の説明をききながら、昇降機に乗って、六階で降り「星の劇場」へはいつていつた。

円形の場内の真中に齒医者機械を大きくしたようなプラネタリウムが据えられ、それを円く囲んで椅子が並んでいる。

腰を掛けると、椅子の背がバネ仕掛けでうしろへそるようになっていた。

「朝日軒の椅子みたいやわ」

君枝が言うのと、

「天井に映るんだから、上を見やすいようにしてあるんだよ」

次郎は言い、

「――朝日軒の人みな達者ですか。義枝さん死んだのは知ってるけど……」

「ええ、皆達者です」

「やつぱり皆まだ嫁かたづいてないんですか」

「難儀な家やて、お祖父ちゃんも言うてはります」

君枝はまた他吉のことを想いだした。今頃どこを練り歩いているだろうか。場内は冷房装置があるのか、涼しかった。

はじめに文化映画があり、それからプラネタリウムの実演があつた。

「――今月のプラネタリウムの話題は、星の旅、世界一周でございます」

こんな意味の女声のアナウンスが終ると、美しい音楽がはじまり、場内はだんだんに黄昏の色に染まって、西の空に一番星、二番星がぼつりと浮かび、やがて降るような星空が天井に映し込まれた。

もうあたりは傍に並んで腰かけている次郎の顔の形も見えぬくらい深い闇に沈み、夜の時間が暗がり流れ、団体見学者の群のなかから軀の音がきこえた。天井を仰いでいるうちに夜とかんちがいたのであろう。バネ仕掛けの椅子は居眠り易く出来ていた。しずかにプラネタリウム機械の動く音がすると、星空が移り、もう大阪の空をはなれて、星の旅がはじまり、やがて南十字星が美しい光芒にきらめいて現われた。

流星が南十字星を横切る。雨のように流れるのだ。幻燈のようであつた。

あえかな美しさにうっとりしていると、解説者は南十字星へ矢印の青い光を向けて、

「——さて、皆さん、ここに南十字星が現われて、わたし達はいよいよ南方の空までやって来ました。時刻はマニラの午前一時、丁度真夜中です。しんと寝しずまったマニラの町を野を山を椰子の葉を、この美しい南十字星がしずかに見おろしているのです」
マニラときいて、君枝は睡気からさめた。

「あ」

君枝は声をあげて、それでは祖父はあの星を見ながらベンゲツ

トで働き、父はあの星を見ながらマニラでひとりさびしく死んだのかと、頬にも涙が流れて流星が眼にかすみ、そんな自分の心を知ってプラネタリウムを見せてくれた次郎の気持が、暗がりの中でしびれるほど熱く来た。

次郎と別れて、河童路地へ戻って来ると、祭の夜らしく、 団治や相場師や羅宇しかえ屋の婆さんなどが、床几を家の前の空地へ持ちだして、洋服の仕立職人が大和の在所から送ってくれたといつて持つて来た西瓜を食べながら、夕涼みしていた。西瓜の顔を見ると、庖丁を取りだしてくる筈の種吉は、他吉といつしよにお渡御に出かけて、まだ帰っていないかった。

「今日びはもうなんや、落語も漫才に圧されてしもて、わたいら

はさつぱり駄目ですわ。なんせ漫才^{むこさん}は二人掛り、こっちは一人やさかいな。一日に一つ小屋をもたしてくれたらええとせんならんけど、それも人気のある連中のことで、わたいらみたいなもんは年中あぶれてますわ。といって、今更漫才の仲間入りも出けんさかいな」

半袖を着たメ団治が西瓜の種を吐きだしながら言う、相変らず落ちぶれている相場師が、

「えらい藪蚊や」

と、団扇でそこらばたばた敲きながら、

「——メさん、おまはん一ぺんぐらい、寄席の切符くれても良えぜ。わいもおまはんとは長いこと附合うてるけど、今まで一ぺんだ

つて切符くれたことがあるか？　ほんまにけちんぼやぜ」

「そない毒性な言い方しイな。いまに遣るわいな」

「遣る、遣るて、おまはんはなんぼ口が商売か知らんけど、日の丸湯の罐といっしよで湯（言う）ばっかしや。——なあ、お婆ん、そやろ？」

「そうだとすとも。大体×さんは宣伝たら言うもんが下手くそや。みんなに切符くばって、寄席へ来てもろて、あんたが出る時、よう×団治いうて、パチパチ手工敲いて貰うようにせなあかん。そういう心掛けやさかい、あんたはいつまでたつても前座してんならんネやぜ、それに、なんだつせ、いつまでも『無筆の片棒』一点張りではあきまへんぜ。今どき無筆やいうようなこと言うて

たら、一生うだつがあがれへんぜ。——なあ、君ちゃん、そやろ？」

羅宇しかえ屋の婆さんはもう歳で、別人のように声が低かった。それに、丁度その時君枝は水道端の漆喰の上にぺたりと跣足になって、しきりに足洗っていたところ故、水の音が邪魔になつて、羅宇しかえ屋の婆さんの声が聴きとれなかった。水道端の裸電球の鈍いあかりが、君枝の足を白く照らしていた。

「なに。おばちゃん。おばちゃん今なんぞ言うたやろ？」

「聴えへんかったんか。難儀な娘こやな。——メさんがな、いつまでも……」

言いかけて、羅宇しかえ屋の婆さんは話をかえて、

「——いつまで、あんた足洗あろてなはんネ、水は只やあらへんぜ。冷えこんだらどないすんねん？」

「そない言うたかて、良え氣持やもん」

と、君枝は両足をすり合わせ、

「——明日はまた一日立ちずくめやさかい、マツサージして置かんと……」

言いながら、ふと空を見ると、星空だった。

君枝はいきなり、きんきんした声をあげて、

「メさん、あんたアンドロメダ星座いうのん知ったはる？」

「なんや？ アンロロ……？ 舌嚙ましイな——根っから聴いたことおまへんな。そんな洋食できたんか？」

「阿呆やな。洋食とちがう、星の名や」

君枝は肩をくねくねさせて笑い、

「——ほな、南十字星は……？」

「学がないおもて、そない虐めなや。しかし、おまはんはえらい
また学者になつたもんやなあ」

「そら、もう……」

と、君枝は足を拭きながら、ペロツと舌を出し、明日の夕方は
中之島公園で次郎ぼんに会うのや。いそいそ下駄をはいていると、
あまい気持がうずくように来て、あ、いけない、これが恋とか愛
とかいうもんやろか。胸を抱くようにして呟いているところへ、
お渡御が済んだらしく、他吉と種吉がとぼとぼ帰つて来た。

君枝はいきなり胸が痛み、埃まみれの他吉の足を洗ってやるのだった。

他吉は余程疲れていたのか、×団治が、

「こうーつと、南十字星てどの方角に出てる星やろか？」

と、しきりに空を仰ぎながら言ったのへ、

「あんぽんたん！ 南十字星が内地で見えてたまるかい。言うちやなんやけど、あの星はな、わいがベンゲットやマニラにいた時、毎晩見てた星やぞ。あの星を見た者は、広い大阪に、このわいのほかには沢山たんとは居れへんネやぞ、見たかったら、南へ行け、南へ！」

と、言ったあと、涼み話の仲間入りをしようともせず、這うよ

うにしてあがつた畳の上へごろりと転がると、君枝がつくつて置いた冷しそうめんも食べずに、そのまま鼾だった。

君枝は今日次郎に会ったことを言いそびれた。

言えば、他吉はびっくりもし、喜びもするだろうと思ったが、他吉の知らぬ間に次郎と会ったことがなにか済まないような気がするのだった。

その癖、次郎のことを口にだしたくて仕方がないのだ。寝転んでいる他吉の上へ蚊帳を釣りながら、よつぽど起して、そうめんを一緒に食べながら、次郎のことを言い、プラネタリウムの話もしようと思つたが、ぐんなりして鼾をかいている他吉の寝顔を見ると、起す気にはなれなんだ。

「明日の朝話そ」

君枝は呟いたが、朝起きざまに、今日は次郎に会うのだという考えが、ぽつと頭に泛ぶと、やはり君枝は次郎のことを言いそびれてしまった。

5

お渡御^{わたり}に出て、すっかり疲れ切っていたが、しかし、他吉は夜が明けて路地の空地で行われる朝のラジオ体操も休まなかった。そして、いつものように夕方から俵をひいて出て、偶然通りかかった難波橋の上から、誰やら若い男と一緒にボートに乗ってい

る君枝の顔を、ボートの提燈のあかりでそれと見つけた。

客を乗せているのでなければ、俵を置き捨ててそのまま川へ飛び込み、ボートに獅噛みついてやりたい気持ちを我慢して、他吉は客を送った足ですぐ河童路地へ戻り、

「ああ、やっぱり親のない娘はあかん。なんぼ、わいが立派に育てたつもりでも、到頭あいつは墮落しくさった」

と、頭をかかえて腑抜けていると、一時間ばかり経って、君枝はそわそわと帰って来た。

顔を見るなり、他吉は近所の体裁を構わぬ声を出した。

「阿呆！ いま何時や思てる。もう直きラジオかて済む時間やぜ、若い女だてらちやらちやら夜遊びしくさって。わいはお前をそん

な不仕鱈な娘に育ててない筈や。朝日軒の娘はんな見てみイ。皆真面目なもんや。女いうもんは少々縁遠ても、あない真面目にならなあかん。今までどこイ行てた？」

「中之島へ行ててん」

「やっぱり、そやな」

他吉はがっかりした眼付きをちらつと光らせて、

「じやらじやらと、若い男と公園でボートに乗ってたやろ？」

睨みつけると、

「お祖父ちゃん見てたの？」

と、君枝はどきんとしたが、知れたら知れたで、かえって次郎のことが言い易くなつたと思い、

「——それやったら、声掛けてくれはったら、良かったのに。次郎さんかて喜びはったのに……」

「次郎さんてどこの馬の骨や？」

「蝙蝠傘の骨を修繕したはった人の息子さんや」

君枝はくすんと笑った。

「次郎ぼん——かいな」

「そや」

「ほんまに次郎ぼんか」

他吉の眼はちよつと細まった。

「なにがうちが嘘いうもんかいな」

君枝は昨日次郎ぼんにあつたいきさつを話して、

「——これ、次郎ぼんが引伸してくれはってん」

マラソン競争の写真を見せると、他吉もその写真のことは知つていて、

「こらまた、えらい大きに伸びたもんやなあ。ほんまに、これ次郎ぼんが引伸したら言うもんしよったんか。ふうん。ほな、次郎ぼん、もう一人前の写真屋になつとるんやなあ。——銭渡したか」

「そんなもん受け取りはるかいな」

「なんぜや？ なんぜ受け取れへんねん？ 商売やないか。うちだけただにして貰たら、済まんやないか。きちんと渡しときんかいな。どうせ、口銭の薄い商売やさかい……」

「何言うてねん？ なにも写真屋が商売とちがう。写真は道楽に

やったはるだけや」

君枝が言うと、他吉は、

「道楽……？」

と、聴き咎めて、

「——ほんなら、何商売して食べとんねん、あいつは……？」

「潜水夫したはんねん」

次郎から聴いたことをすつかり話すと、他吉は唸った。

「えらい奴ちや。人間は身体を賣めて働かな嘘や言うこと忘れらん。あいつはお前、夕刊配達しとった時から、身体を賣めて来よった奴ちやし、わいがよう言い聴かせといたったさかいな」

他吉はなんとも言えぬ上機嫌な顔になったが、しかし、それな

らそれで、次郎ぼんの奴なぜ路地へ挨拶に来ん、君枝だけにこつそり会うのはけしからんとすぐ眼を三角にして、

「——それにしても、君枝、若い男と女がべたべたボートに一緒に乗って良えちゅう訳はないぜ。だいいち、ボートがひっくりかえったらどないすんねん？」

「それは大丈夫や。次郎さんは潜水夫さかい、ひっくり返ったかて……。潜水夫の眼工から見たら、中之島の川みたいなもん、路地の溝みたいなもんや言うてはった。大浜の海水浴は池みtainなもんやて……」

「いちいち年寄りに逆らうもんやあれへん。次郎ぼんであろうが、太郎ぼんであろうが、若い娘が男とちやらちやら会うたりするも

んと違う。だいいち、次郎ぼんの仕事に差しつかえる。ええか。こんどめから会うたらあきまへんぜ」

蚊帳の中へはいつてからも、他吉の小言は続いた。

君枝は首垂れて他吉の方に団扇で風を送っていたが、ふと顔をあげると、耳の附根まで赧くなり、

「あいな、次郎さんな、今日、うちと……」

団扇の動きがとまった。

「——うちと夫婦になりたいと言やはんねん」

「……………」

他吉の顔の筋肉がかすかに動いた。

暫らく沈黙が続いた。蚊の音がはげしかった。

君枝は今日中之島公園で次郎とかわした会話を慌しく膝の上に想い出した。

「——他あやん、いつまで俤ひいたはる気やろな。なんぼえらそうなこと言つても、やつぱり歳は歳やさかい……」

「——隠居してくれ言うても、なかなか隠居してくれしめへんねん。うちに甲斐性が無いさかい……」

「——そんなことは無いやろけど……。他あやんにしてみたら、早よあんたに良えお婿さんを貰て、それから隠居しよ思たはるのんと違うやろか」

「——さあ。いつぞやそんなことも言うてましたけど……。お前の身がかたづいたら、わいはもういつペンマニラへ行こ思てるね

んて……」

「そんなら、余計はよ結婚せないかんね」

「——まあ。意地悪いけずなことよう言やはるなあ」

「——そうかて、そうやないか。好きな人あつたら、はよ結婚して、他あやんを安心したらな、いかんぜ」

「——知らん。うち結婚みたいなもん、せえへん。好きな人みたいなもんちよつともあれへん。それに、うちひとりやつたらともかく、お祖父ちゃんの面倒まで見てくれるいう人今時あれへんわ。うち、お祖父ちゃんの生きてる間、結婚せえへん」

「——そんなこと言うたら、余計他あやんを苦しめるもんや」

「——そやろか。しかし、それよか仕様ない。ほかに仕様があれ

へんわ」

「——ないこともないがな。たとえばやな……。たとえば、僕と結婚したら……」

「——あんだ、平気で冗談言^{てんご}やはんねんなあ」

「——冗談や思てるのん？」

「——ほな……。？」

「——うん」

想いだしていた君枝はまた顔をあげて、

「次郎さんやつたら……」

お祖父ちゃんの面倒もみてくれる、三人で住めば良いのだと、
もじもじ言うとうと、

「阿呆！」

蚊帳の中から他吉の声が来た。

「——もうこれから、どんなことあつても、次郎ぼんと会うたら、あきまへんぜ。次郎ぼんにもそない言うとか。次郎ぼん今どこに住んどおるねん？」

それから五日経った夜、他吉はなに思ったか、いきなりこんなことを言いだした。

「お前ももう年頃や。悪い虫のつかんうちにお祖父じやんのこれと見込んだ男と結婚しなはれ。氣に入るかどないか知らんけど、結婚いうもんは本人同志が決めるものと違ちがう。野合どれあいにならんように、ちゃんと親同志で話をして、順序踏んでするもんや。明日の

朝が見合いうことに話つけて来たさかい、今晚ははよ寝ときなはれ」

「うち、いややわ」

君枝はもう半分泣きだしていた。

「なんぜ、いややねん？ なんぞ不足があるのんか？」

「そらそやわ。そない藪から棒に見合いせえ言うたかて、何したはる人かわからへんし……」

「お前にはわからんでも、お祖父やんには判つてたらそいで良え。まさか、肥くみもしとれへんやろ？」

「写真もまだ見てへんし……」

「写真、写真で、写真がなにが良えのや。次郎ぼんに写真きちが

いを仕込まれやがってエ……」

叱っているが、眼だけは和やかであつた。

「——なんでも良え。とにかく見合いしなはれ」

「……………」

咽の涙を鹹^{しお}からく、君枝はしょんぼり味わつた。

「するか、せんか。どっちや。返辞せんかい！　するか？」

君枝はうなずいた。

6

翌日はまるでわざとのように雨であつた。

「なんの因果でまた、こんな雨の日に見合いせんならんねん」

君枝はしょんぼりして、この五日間祖父のいいつけを守って次郎に会わなかったことが後悔された。いや、中之島公園で会った翌日、勤めが済むと、早速約束して置いた場所へ出掛けたのだが、次郎は来なかったのだ。祖父が次郎のところへ掛け合いに行つたせいだろうと、すごすご帰つた時の悲しみが、降るようにして、いま胸へ落ちて来た。

が、他吉は上機嫌で、

「雨が降つても、見合いの場所は地下鉄のなかやさかい、濡れんでも良え。どや、お祖父さんは抜目がないやろ？」

「……………」

他吉は高下駄をはき、歩きにくそうであつた。

ところが、難波駅の地下へ降りて行くと、さきに来て地下鉄の改札口で待っていたのは、思いがけぬ次郎で、傍には鶴富組の主人が親代りの意味らしく付き添うていた。

君枝はぼうつとして、次郎が今日の見合いの相手だとは、どうしても信じられず、さつと顔色を変えたくらいであつた。

が、次郎の眼に恨みの色などすこしもなく、取り済ましているが、またとない上機嫌の表情がびくびく動いていて、どう見ても今日の見合いの相手であつた。

それとわかると、君枝は今日の見合いに、クリームひとつつけて来なかったことがにわかに後悔され、嬉しさと恥かしさで下向

くと、地下鉄の回数券が一枚よごれて落ちているのが眼にとまり、今この時これを見たことは、生涯忘れ得ないだろうと、思った。

鶴富組の主人を中心に改札口での挨拶が済むと、一しよに階段を降りて行き、次郎と鶴富組の主人は梅田行きの地下鉄に乗った。君枝と他吉はそれを見送り、簡単に見合いが終った。

「そんならそれと、はじめから言うて呉れたら良えのに……」

何も一杯くわさずともと、君枝は階段に登りながらちよつとふくれて、

「——こんな汚い顔して、鶴富組の御主人かて笑たはるこつちやろ」

本当は次郎が笑っているだろうという気持を含めて、そう言っ

たが、しかしあとで大笑いの酒という茶番めいたものもなく、若い次郎はともかく、他吉も鶴富組の主人も存外律儀者めいた渋い表情であつた。

とりわけ、他吉は精一杯にふるまい、もし君枝が鶴富組の主人に気に入らねばどうしようという心配も、はらはら顔に出ていた。君枝の器量は他吉の眼から、人並みすぐれて見えたが、そんなことは次郎はともかく鶴富組の主人にはどうでも良い筈だ。

だから、他吉にしてみれば、君枝を何ひとつ難のない娘に育てたという気持は、ひよつとすれば大それた己惚れであるかも知れず、それに比べて、次郎は三日前鶴富組の主人が他吉に語ったところによると、人間はまず年相応に出来ているし、潜りの腕もち

よつと真似手がなく、おまけに眼もおそろしく利いて、次郎が潜つてこれならばと眼をつけた引揚げ事業で、これまで失敗したことがないということだ。

「——今やつて貰つてゐる仕事は、ほんのけちくさい仕事で、花井君には気の毒なようなもんだが、しかし、これが済むと、大きな奴がある。今ちよつとここで言うわけにはいかぬが、日本のサルベージでなくてはちよつと手が出せぬという……、そう、沈船浮游だ。これに花井君の身体がどうしても要るのだ」

へえと他吉は感心して、さそくに話を纏める肚がきまったのだ。「——それに何ですよ。時局がこういう風になって来ると、花井君などもうわれわれ個人会社にいつまでも居る人じゃない。いつ

なんどき海外へ出て、沈船作業に腕をふるって貰わねばならんようになるかも知れない。だから、余程しつかりした奥さんでなくつちや」

「いや、その心配は要りまへん。わたいもこう見えても、もとは比律賓のベンゲットで働いて来た人間だす。婿をマニラで死なしても居ります。その点は、よう君枝に仕込んでありまっさかい」

よしんば形式だけにしろ見合いという順序を踏んだのは、ひとつには、ともかくうちの孫娘を見てやってくれ、という自信からだった、さすがに他吉は心配だったのだ。

ところが、鶴富組の主人は、一風変った一見識あり、タクシーの案内係の制服のまま見合いに出て来たという点が何よりまず気

に入った。

鶴富組の主人は大きな事業をやり、随分金もありながら、汽車はいつも三等に乗るといふ人であつた。

「一等や二等に乗つたからつて、早く着くわけじゃない」といふのが持論であつた。

そうして次郎と君枝は市岡の新開地で新世帯をはじめたが、新居でおこなわれた婚礼の晩ちよつとしたごたごたがあつた。

おひらきが済んで、他吉がメ団治といつしよに帰ろうとすると、次郎と君枝は引き止めて、

「お祖父やん、今日は家で泊つてくれはれしまへんのんか？」

「当り前やないか」

他吉に代つて、×団治が答えた。

「——若夫婦のところへ、こんな老いぼれの他あやんが居てみイ。陰気臭いやら邪魔ややら」

×団治は口が悪かったが、他吉は今夜は怒らなかつた。ふん、ふんと上機嫌にうなずいている。

「まあ、いやな×さん」

白粉の奥が火を吹いた。次郎もちよつと照れたが、

「ちよつともそんな遠慮要らへん。今夜は泊つてくれはるやろ思て、ちゃんと寝床ねまもとつといたのに……もう、帰りの電車もあれしまへんやろ」

「無かつたら、歩いてかえる」

「ここから河童路地まで何里ある思てんのん？ お祖父ちゃん、
ゞさんにひとり帰ってもらうのん気の毒やつたら、あとさしで
も一緒に寝て貰たらええがな……」

「いや、帰る。何里あろうが、俵ひいて走るよりは楽や。なあ、
ゞさん。退屈したら、お前の下手な落語でもきかせて貰いながら
歩くわな」

「どついたらか、いっぺん」

ゞ団治は他吉の頭の上で、拳をかためて見せた。

次郎は笑って、

「それなら、今夜はまあ、気を利かせて貰うことにして、明日か
らずっとこの家へ来てもらいまっせ。もうそろそろお祖父やんに

も隠居して貰わんならん、なあ、君枝」

すると、他吉はあわてて手を振った。

「阿呆なこと言いな。わいはまだまだ隠居する歳やあれへん。此^こ間^{ないだ}も言うた通り、わいは明日の日にでも発つて、マニラへ行こ

思てるねん。君枝の身体ももうちゃんとかたづいたし、思い残すところはない。ベンゲットの他あやんも到頭本望とげて、マニラで死ねるぞ」

振った手を握りしめると、痛々しく静脈が浮き上った。それをちらと眼に入れて、次郎は、

「何言うたはりまんねん。そらお祖父やんがマニラへ行きたい氣イはわかるけど、その歳でひとりマニラまで行けるもんですか？

なあ、メさん」

「当りきや」

「それに、お祖父やん、昔とちごて、こんな時局になったら、日本人がおいそれとたやすく比律賓へ渡れますかいな。移民法もなかなかむつかしいし……」

「ベンゲツトの他あやんが比律賓へ行けんいう法があるかい」

「あるかい言うたかて、法律がそうなってるんやから、仕方ない。嘘や思たらその筋へ行つてきいて見なはれ」

「そやろか？」

他吉はがっかりした顔だった。

「それに、よしんば行けたとしても、いま、お祖父やんに行かれ

てしもたら、淋しゅうて仕様ない。なあゞさん」

「そやとも、他あやん、お前が行かんでもマニラは治まる。お前が行てしもて見イ、わいはひとりも友達が無いようになるがな」

ゞ団治にも言われると、

「それもそやなあ」

と、他吉は精のない声をだした。

「——お前ら寄つてたかつて巧いこと言いくさつて、到頭マニラへ行けんようにしてしまいやがった。しかし、言うとくけど、これは今だけの話やぜ。行ける時が来たら、誰が何ちゅうてもイの一番に飛んで行くさかい、その積りで居つてや」

これが僅かに他吉の心を慰めた。

「宜しおますとも、その時はその時の話、とにかくようマニラ行き諦めてくれはりましたな」

君枝は次郎と他吉の顔をかわるがわる見ながら、

「——そんなら、今も言うた通り、明日からこの家へ来とくなはれや。荷物はうちが便利屋に頼んで、持って来てもらいまっさい」

そう言うと、他吉は、

「お前までわいに隠居せえ言うのんか。なんの因果でわいが河童路地を夜逃げせんならん」

いつにない強い口調だった。

「そうかて、うちが結婚したら、隠居する、三人で一緒に住むい

う約束やったやないか、お祖父ちゃんにまだ河童路地に居てもら
うくらいやったら……」

結婚するんじゃないかと言ひ掛けて、君枝は次郎の顔を見て
はつとした。

次郎の顔は蒼ざめていた。その顔を横向けたまま、次郎はふる
える声で言つた。

「そら、そやろ。河童路地からこんな汚い家へ来るのは、恥かし
いやろ。夜逃げ同然でなけりや、来られんやろ。そんな氣イやつ
たら、なにも来てもらへんでも宜しい」

次郎はかつとなる性質だつた。

「——どうせ僕は甲斐性なしです。氣に入らんかったら、君枝を

連れて帰ってもらいましよう」

次郎は本当に他吉が好きで、一緒に住みたかったのだが、ひとつには、他吉を引き取るくらい甲斐性者になったことを、皆んなに見てほしかったのである。だから、×団治の前で、それを他吉に断られたのが、心外だったのだ。×団治がその場に居らなかつたら、次郎はこうまで腹が立たなかつたであらう。

「なにッ？ もういつペン言ってみイ」

「ベンゲットの他あやん」の声が久し振りに出た。

「——わいがお前らの厄介にならん言うのを、そんな風にとつてたんか、阿呆！」

雲行きが怪しくなったので、×団治はあわてて、

「まあ、まあ」

と、仲にはいい、自分でも何を言っているか判らなかつたが、とにかく喋りまくつて、その場の空気を柔らげた。

「婚礼の晩にむつかしい顔してにらみ合うてる奴があるかい。さあ、笑い、こんな顔しよ」

×団治が自分でニコニコした顔をつくつて見せると、漸く他吉、次郎の順に固い表情がとれた。

×団治に促されて他吉があとに随いて外へ出ると、月夜だった。秋の冷え冷えした空気がしみじみと肌に触れた。

「他あやん、おまはんいったい幾つやねん？」

×団治が言つた。

「五や」

「六十五にもなつて、若い者相手に喧嘩する奴があるかいな。しかし、また、なぜお前はそう頑固にあの二人の厄介になるのを断るねん。君ちちゃんかて今孝行せなする時がない思て、やきもきしてるにきまつてるぜ」

「孝行してもらうために、育てて来たんとちがう」

他吉はぼそんと言った。

「なるほど、お前が厄介になつて、君ちちゃんに気兼ねさしたら、可哀想や言うわけやな」

「それもあるけど……」

あと他吉は答えなかった。

翌日、雨だった。

雨の町を他吉は俵をひいて、ひよこひよこ走っていた。

7

半年経つと、安治川での仕事が一段落ついたので、鶴富組の主人はかねて計画していた△△沖の沈没船引揚げ事業に取り掛かることになった。

そして、新婚早々大阪を離れるのはいやだろうがと、次郎に現場への出張を頼むと、君枝との結婚の際親代りになって貰った手前もあって、当然よろこんで行くべきところを、次郎は渋った。

「あそこはたしかに五十尋はありましたね。今までなら身寄りの者はなし、喜んで潜らして貰ったんですが、どうも女房を貰っちゃまうと、五十尋の海はちよつと……」

△△沖の沈没船引揚げ作業は、前にもあるサルベージが手をつけて、失敗したことがあったので、次郎はそれを聴き知っていた。

「そりや、なるほど危険なことは危険だが……」

と、鶴富組の主人は言つた。

「——危険は危険だが、それだけにまた、やり甲斐はあらアね。

それに、君、説教するようだけど、もう今日じや、引揚げ事業つてやつは、一鶴富組の金儲けじゃないんだからね。女房も可愛いだろうが、そこをひとつ……」

「そう言われると辛いんです。おっしやられるまでもなく、引揚げて奴は国家的な仕事だつてことは、よう判つています。判つてはいるんですが……」

「やつぱり女房は可愛いかね」

「いや、女房だけじゃ良いんですが、祖父さんのことを考えると、うっかり……。そりや、あの祖父さんのことですから、僕が死んでも立派にやつて行つてくれるでしょうけど、しかし、あの祖父さんもこれまでに一度婿を死なしていますから……」

と、次郎はこれを半分自分への口実にしていた。

実は次郎は近頃潜水夫の仕事が、怖いというより、むしろ嫌になつて来ているのだった。

つい最近、桜橋の交叉点でむかし品川の写真機店で一緒に奉公していた男に出会った。立ち話にきくと、今では堺筋に相当な写真機店を出しているということだった。

「君もあの時辛抱してりや良かったのに」

言われて、それもそうだなと思ったその気持が、相当強く働いて、一生その日稼ぎの潜水夫で終ることが情けなく思われたのである。

人間は身体を責めて働かなあかんという他吉の訓え^{おし}を忘れたわけではなかったが、どれだけ口を酸っぱく薦めても、いまだに隠居しようとせず、よちよち俵をひいて走っている他吉を見ると、それもなにか意固地な病癖みたいに思えて、自分はやはり呑気な

商売をと、次郎は考えだしていたのだった。

他吉は国際情勢が自分のマニラ行きを許さぬと判つてから、大きな声も出せぬくらい腑抜けていた。ひとつには、君枝をかたづけたという安心からであつた。他吉の眼からは、次郎は働き者で、申し分ない婿に見えていたのだつた。

ところが、次郎が鶴富組の主人の依頼を断つたことを聴きつけると、他吉は二十も若がえつた。

他吉は血相かえて次郎の家へ飛んで来て、

「潜水夫が嫌になつたとは、何ちゆう情けない奴ちや。鶴富組の御主人も言つたはつたが、今に日本がアメリカやイギリスと戦つてみい。敵の沈没船を引揚げゐるのに、お前らの身体はなんぼあつ

ても足らへんネやぞ。五十尋たらの海が怖うてどないする？ ベンゲットでわいが毎日どんな危い目工に会うてたか、いつペン良う考えてみイ。お父つあん生きてたら、蝙蝠傘でど頭^{たま}はり飛ばされる^{とこ}やぞ」

と、呶鳴りつけ、

「——わいらのことは心配すんな。お前にもしものことがあつても、君枝はわいが引き受けた。わいが死んだあとは、君枝が立派に後家を守つて行く。そういう風にわいは君枝を育てて来たアる筈や。心配はいらんぜ。お前がそういう心配をしたら、どんならんと思えばこそ、わいはお前らの厄介にならんと、ひとりで行こ思て……」

今なお俵をひいている此の俺を見ると、他吉はくどくど言ったが、次郎は父親似の頑固者だった。

口で言うても分らぬ奴だと、しかし、他吉はさすがに孫娘の婿に手を掛けるようなことはせず、その代りなに思ったか、君枝を河童路地へ連れ戻した。

あつという間のことだったから、次郎は腹を立てたり、まあ待つてくれと言う余裕もなく、あつけに取られてしまった。君枝はそういう他吉の流儀に馴れていた。

君枝の婚礼の時、朝日軒のおたかは例によつて頭痛を起して三日寝こんだ。だから、君枝が河童路地へ戻つて来たのを、それみたことかと人一倍喜ぶのは普通ならおたかをおいてほかになかつ

だが、丁度その時には朝日軒一家はもう河童路地の入口には居なかった。居たたまれないわけがあつたのだ。

ありていに言うと、一番末の娘（といってももう三十歳だが）の持子が、妊娠したのだ。いってみれば、姉たちをさし置いて妊娠したのだ。

弁士の玉堂がきいたら悲観するところだつたろうが、彼は七年前に河童路地を夜逃げしていた。トーカーが出来てから、弁士では食って行けず、暫らく紙芝居などやっていたが、それもすたれて、貧乏たらしくごろごろしていたが、ある日忽然と河童路地から姿を消したのだつた。最近、梅田附近の露店で手品の玩具を売っているのを見た者があるという。

妊娠と同時に縁談があった。勿論、相手の男だったが、仲人をいれず、自身でしやあしやあ出向いて来て、持子さんをいただけないかと言ったのである。

「物には順序というもんがおます」

おたかはんかんになって怒った。今更順序など言いだすのはおかしい。はじめから、順序が狂い過ぎていたのである。

その男はしかし、一寸考えて、やがて友達を仲人に仕立てて、寄越した。

ところが、その友達というのが、その男と同じ鋳物の職工で、礼儀作法なぞ何ひとつ知らぬ、いわば柄の良くない男であった。「うちの持子は女学校を出ていますさかいな」

おたかはそんな風に言つた。その界限で大正時代に娘を女学校へやつた家は数えるほどしかなかったのである。

「――鑄物の手伝いをさせるために、女学校へやつたんとちがいます」

「さやか」

仲人はさつさと歸つてしまつた。

持子は泣いておたかに迫つた。

おたかもはじめて事態を悟り、仲人を追いかえたことを後悔した。

そこで、改めて敬助が先方の男に会つた。

ところが、職人氣質のその男は、折角仲人に頼んだ友達の顔に

泥を塗られたと言つて、かんかんになつて怒つていた。

「なるほど、わたしは鑄物の職人です。しかし、お宅もやはり人の頭を刈る職人でつしやる。五分々々ですがな。それに、わたしはあのひとのお腹にいる子供の父親でつせ」

敬助は歸つて、おたかに、仲人になつた男に謝るようにと頼んだ。

「この歳になつて、人ひと様に頭下げるのは、いやだつせ」

おたかはなかなか承知しなかつた。

「そんなこと言うてる場合と場合がちがうがな。持子のお腹のこ
と考えてみいな」

口酸っぱく言われて、それでは謝つてみましよう、おたかの

腹がやつときまりかけた時に、幸か不幸か、持子の相手の男が盲腸をわずらつて、ころつと死んでしまった。

おたかの髪の毛は真つ白になった。持子のお腹は目立って来る。朝日軒一家は田辺の方へ引き越した。

「こんどのところは、郊外でんねん。家の前に川が流れていて、ほん景の良えとこでっせ。郊外住いもそう悪いことおまへんさかいな」

郊外という言葉がおたかの虚栄をわずかに満足させたのだった。敬吉は田辺へ移つたのを機会に理髪業をよした。家へ人が出入りするのを避けるつもりもあつたかも知れない。

そして、今では理髪店用の化粧品のプローカーをしているとい

うことだった。

「柳吉つあんの口添えだんねん」

と、得意そうに種吉は君枝に語った。柳吉の実家は理髪用化粧品の間屋だったことを君枝は想いだし、わざわざ朝日軒のことを自分に言いだした種吉の気持が、微笑ましく判った。

君枝は次郎と別れて河童路地へ戻つて来ても、存外悲しい顔は見せず、この半年の間に他吉がためていた汚れ物を洗濯したり、羅宇しかえ屋の婆さんに手伝ってもらつて、蒲団を縫いなおしたりした。

ひとり者の×団治の家の掃除もしてやり、そんな時、君枝は、
「——ここは地獄の三丁目、往きは良い良い、帰りは怖い」

などと、鼻歌をうたった。そして、水道端では、

「うち到頭出戻りや」

と、自分から言いだして、けろりとした顔をしていたので、ひとびとは驚いたが、しかし、そうして路地へ連れ戻して置けば、次郎はもうあとの心配もなく、かつ発奮して再び潜りだすだろうという他吉の単純な考えを、君枝もまた持たぬわけではなかったのだ。もちろん、次郎が潜りだせば、他吉の気も折れて、もと通り一緒に暮せるだろうとの呑気な気持で、今のうちに祖父に孝行して置こうとせつせと働いていたのだった。

ところが、ある日、蝶子がひよつくり河童路地へ顔を見せて、君枝を掴えて言うのには、

「あんた、ぼやぼやしてたら、あかんしイ」

「いったい何やの？」

「何やのて、ほんまに、えらいこつちや。あんたとこの人が、昨夜^{んべ}うちの店へ来て、散財しやはってん」

「えッ？」

君枝は驚いた。次郎は酒は潜水病のもとだと言つて、これまで一滴も飲まなかったのに、いつの間に飲むようになったのかと、本当には出来なかった。

「うちかて商売やさかい、お酒を出さんわけにはいかへんし、といて、あんたの旦那はんにあんまり散財させるわけにいかへんし、ほんまに困ったわ。因果な商売してしもたもんや」

謝るように蝶子は言った。

「いいえ、そんなこと。ほんまに心配かけてしもて」

君枝がそう言うのと、蝶子はさてといった顔になって、

「しかし、あんたも氣イつけんとかかんし。うちこの主人も

この頃だいぶ考えが變つて真面目になつて来たさかい、飲ますだけ飲ましてから、あんたとこの旦那はんを二階へあげて、意見するつもりでだんだん訊いてみると、やっぱり酒飲みはるのも無理はないわな」

潜水夫をやめて他の職に就くつもりで、あちこちと職を探して歩いたところが、なかなか見当らず、といつて、意地からでももとの潜水夫に戻るわけにはいかず、おまけに君枝には去られてい

る。当然氣を腐らして、酒を飲むようになったのだという。

「——何よりも他あやんがあんたを連れ戻したことを、だいぶ根に持つてはるらしかった。うちの主人おっさんも言うてたが、やつぱり男は女房に去られるほど、淋しいもんは、ないらしい。ここを、君ちゃん、よう噛み分けて考えなあきまへんぜ」

「そんなら、潜る氣はちよつともおまへんねんな」

君枝はすっかり当てが外れた想いで、蒼い溜息をついた。

「そういう氣は持ったはれへんやろな。わての考えでは、あんたがこつちへ歸つたはる限り、意地からでも潜りはれへんと思うな」
蝶子は苦勞人らしく、しみじみした口調で言つた。

「——まあこのまま放つて置いたら、ますます道樂しやはる一方

や。やつぱり、あんたが帰ってあげんと……」

日が暮れて、蝶子は粉雪をかぶりながら帰って行つた。

君枝は帯の間に手を差し入れて、暫らく考えこんでいたが、やがて路地を出て行くと、足は市電の停留所へ向いた。

電車が太正橋を過ぎる頃、しとしと牡丹雪になった。

境川で乗り換えて、市岡四丁目で降りた。そこから三丁の道はもう薄白かった。傘を持って出なかったので、眉毛まで濡れたが、心は次郎なつかしさに熱く燃えていた。

ところが、鍵が掛つていた。合鍵をもっていたので、あけて中にはいった。手さぐりで燈りをつけ、見渡すと、火の気ひとつなく、寒むぎむぎとしていた。

火をおこし、火鉢の傍で何時間か待ったが、次郎は戻って来なかった。この雪の晩にどこを飲み歩いているのかと、君枝は身動きひとつしなかった。

犬の遠吠えがきこえた。

だんだん夜が更けて来た。

炬燵に炭団を入れてみると、荒あらしく戸を敲く音がした。

玄関へ出て見ると、見知らぬ人が立っていて、お宅の主人がトラツクにはね飛ばされて、大野病院へはいっているという知らせだった。君枝は立ったまま、ぺたりと尻餅ついた。

命は助かったが、退院までには三月は掛るだろうという大怪我だった。

「あんぽんたん奴！ 働きもせんとぶらぶら飲み歩いてるような根性やさかい、ぼやぼやして怪我もするネや」

他吉は知らせをきいて言ったが、しかしさすがに怒った顔も見せられず、毎日病院を見舞った。

君枝はもちろん三等病室で寝泊りし、眠れぬ夜は五日も続いたが、二週間ばかりするといくらか手が離せるようになった。

その代り、病院の払いに追われだした。もともとはいるだけ使ってしまうという潜水夫の習慣で、たいした蓄えもなく、そのわ

ずかの蓄えも遊んでいるうちに、すっかり使っていた。

頼りにする鶴富組の主人は△△沖の方へ出張していたし、おまけに、次郎をひいたトラックの運転手は、よりによつて夫の死後女手ひとつで子供を養っているという四十女で、そうと聴けば見舞金も受けとれなかった。

「貴女おうちが悪いのんとちがいま。うちの人がなんし水の中ばつかりで暮して来やはったんで、陸の上を歩くのが下手糞だしたさかい、おまけに雪降りの道でつしやる？」

無理に笑つて、見舞金を突きかえした。

女運転手は恐縮して、毎日見舞きずついに来た。

「そない毎日来て貰たら、恐縮きずつおます。貴女おうちも、お忙しいでつ

しやろさかい……」

言っているうちに、君枝はふと、自分も看病の合間に運送屋の手伝いをして見ようかと思つた。

河童路地の近くに、便利屋というちつぽけな運送配達屋がある。引越し道具のほか、家具屋、表具屋、仏壇屋などから持ちこまれる品物の配達をしているのだが、小型トラックがなくなつた上に近頃は手不足で折角の依頼を断ることが多いと聴いていたので、君枝は早速掛け合つてみた。

「へえ、あんたみたいな別嬪さんが……？」

便利屋の主人は驚ろいたが、配達の手伝いなら、時間に縛られることが無いので、看病の合間に出来るし、足には自信があると

案外君枝が本氣らしかったので、

「そんなら自転車に乗ってくれまつか」

手当てはもとよりしたいしたことは無く背を焼かれるような病院の払いには焼石に水だったが、けれど全くはいらぬよりはましだと、君枝は早速自転車の稽古をはじめた。ひとつには、そうして人手不足の際に働くということが、入院して働けぬ次郎の代りをつとめることにもなろうという気持もあった。

ところが、ハンドルを握ったとたん、もう君枝は尻餅をついて、便利屋の前はたちまち人だかりがした。

君枝は鼻の上に汗をためて、しきりに下唇を突きだして跨り、跨り、漸くのことで動きだすと、

「退い^どとくれやつしや。衝突しまつせ。危のおまつせ」

と、金切声で叫び、そして転んで、あはははと笑った。

亭主が怪我をして入院しているというのに、この明るさはどこから来ているのかと、便利屋の主人はあきれた。

翌日から君枝は、病院へ便利屋の電話が掛ると、いそいそと出掛け、リヤカーをつけて配達にまわった。

ある日、仏壇を積んで、南河内の萩原天神まで行った。

堺の三国を過ぎると、二里の登り道で、朝九時に大阪を出たのに、昼の一時を過ぎても、まだ中百舌鳥^{なかもず}であつた。

里子にやられていた幼い頃のことを想いだしながら、木蔭で弁当をひらいていると、雨がぱらぱらと来て、急に土砂降りになっ

た。

合羽を仏壇にかぶせ、自身は濡れ鼠になりながらペタルを踏み、やつと目的地について、仏壇を届けて帰る道もお降っていたが、それでもへこたれようとしなかったのは、子供の頃からさまざまな苦勞に堪えて来た故であらうか。

大阪に帰ると、日が暮れた。男なら一服というところを、その足で千日前の自安寺へお詣りした。

水掛け地蔵の身体をたわしで洗っていると、

「お君ちゃん」

声を掛けられた。

もとの朝日軒のおたかが、定枝、久枝、持子の三人の娘を連れ

て来ていたのだった。

持子は赤ん坊を抱いていた。

「あら、赤^{やあさん}子出来はりましたの？」

君枝が言うと、おたかは相好くずして、

「見たつとくなはれ」

いかにも嬉しそうだった。

「——この子が出来てから言うもんは、あんた、娘どもが皆この子を奪いあいして、そら賑やかなことですわ」

もう四十を過ぎた定枝や久枝がめずらしそうに毎日赤ん坊の奪り合いをしている容子が、眼に見えるようであつた。

「肝腎の私に一寸も抱かしてくれはれしめへんねん」
^{うち}

持子の声は明るかった。

「そない言うたかて、あんたは乳のます時はいつでも抱けるさかい……。なあ久ちゃん」

定枝は清潔に澄んだ美しい眼をくるくる動かして、言った。

「いつもこの通りでんねん。今日かて、あんた、この子の虫封じのお守り貰いに来るのに、一家総出の大騒ぎでんねん」

おたかのその言葉をきいていると、君枝は思いがけぬ持子の不幸が、かえって一家を明るくしているにちがいないと思った。

「ちよつとうちにも抱かしとくなはれ」

赤ん坊を抱かせてもらった。

「——良う肥えたはりまんな」

「へえ、そろもう、郊外で空気はよろしおまつさかい」

おたかは言つた。

別れて、病院へ戻ると、夜、君枝は次郎の寝台の傍で産衣を縫うた。七カ月さきに生れるとの産婆の言葉だった。

次郎は見て眼が熱くなり、

「ああ、魔がさしてた。潜水夫やめよう思たんは、あれは氣の迷いやつた。怪我した足が泣いとる。元の身体になったら、はよ潜れ言うて、泣いとる」

ひとりごとのように言い、そして、しみじみと、

「——お前にも苦労させるなあ。済まんなあ」

と、手を合わさんばかりにした。

「阿呆らしい。水臭いこと言いなはんな」

君枝はいつもの口調で言い、そしてこくりこくり居眠りをした。他吉はそんな風に君枝が働きだしたのを見て、貧乏人の子はやっぱり違うと喜び、

「せえだい働きや」

と、言い言いして、さもありなんという顔でうなずいていたが、それから半月ばかり経ったある日、ふと君枝がおしめを縫うているのを見て、ああ知らなんだと、にわかに涙を落した。

そして、腹巻きの中から郵便局の通帳を出して来て、言うのは、

「今までこれを何べん出そ、出そ思たか判らへんかったけど、い

や待て、今出してしもて、二人の氣がゆるむようなことがあったら、どむならん、死金になつてしまふ——こない思て、君枝の苦労を見て見ぬ振りして来たんやけど、思たらほんまにわいは、ど阿呆やった。君枝に子^{ややこ}が出来てるいうこと、さっぱり知らんかったんや。堪忍してや。むごいお祖父やんや思わんといてや。そうと知つたら、君枝を自転車に乗せるんやなかったんや。あんなえらい仕事をしてるのを、黙つて見てるネやなかったんや。よう辛抱してくれたな」

他吉ははや啜りあげたが、やがて、かさかさした掌で涙を拭くと、

「——ここに八百円あるねん。この金ここぞという時の用意に、

いや、君枝の将来を見届けた暁に、死んだ婿の墓へ詣りがてら一ぺんマニラへ行つて来たる思て、その旅費に残して置いたんやが、もうこうなつたら今が出し時や。この金で病院の払いをして、残つた分を君枝のお産と、次郎ぼんの養生の費用いりようにしてくれ」

「いや、そんなことをして貰たら困る。それはお祖父ちゃんの葬式金に残しといて」

次郎が手を振ると、

「げん糞のわるいことを言うな。葬式金を残すようなベンゲットの他あやんや思てるのか」

他吉は眼をむいた。

「そんなら、マニラ行きの旅費に……」

「知らん土地やなし、旅費はのうても、いざという時になったら、泳いででも行くわいな」

齒の抜けた顔で笑ったが、他吉はすぐしんみりして、

「——それにこの金の中には、君枝が下足番をして貰た金もはいってるんや。遠慮する金やあれへんぜ」

他吉はついで見せたことのない涙を、ぽたりぽたり落した。

9

次郎はやがて退院した。そして、君枝のお産が済む頃には、すっかり元の身体になっていた。生れた子は男の子で、勉吉と名を

つけると、

「ベンゲットのベン吉やな」

と、他吉は悦に入った。

鶴富組の沈没船引揚げ作業はまだ了っていないかった。

次郎が電報をうつと、スグコイマツテイルとの返事だったので、喜んで行こうとすると、君枝はもじもじしながら、

「うちも一しよに行くわ。潜水船の唧筒ポンプ押しに」
と、言った。

次郎は驚いた。唧筒押しは、浅い底の土木工事などでは、女人
夫三人ぐらいで行われるが、十尋二十尋ではもう女の力に余って、
六人から八人もの男の力を借らねばならない俗に「唧筒押し一升

飯」といわれるほどの労働なのだ。

「女にはとても出来んよ」

そう言うのと、君枝は、

「うち今まで毎日お祖父ちゃんちゃんの俵のタイヤに空気入れてたさかい、唧筒押しするのん上手やし。こない言うて、なんやこう、あんたに離れるのがいやで言うみたいやけど……」

ぽつと赧はにかくなった。

そんな君枝が次郎にはたまらなく可愛かった。

「そんなら一しよに行ってもらほか。唧筒押しでなくても、ホース持ちなら出来るやろ」

ホース持ちは、空氣の過不足の合図を受ける大切な役目で、昔

は潜水夫の妻がこれをしていたのである。

鶴富組の主人は腕利きの潜水夫が無くて弱っていたところだったので、次郎と君枝が現場へ現われると、

「よく気が變つてくれたもんだね」

と、喜んだ。次郎は、

「人間はたまに怪我もして見んならんもんですよ」

と、笑つて、五十尋の深海へ潜つた。

君枝がホースを持っているのだと思えば、次郎はもうどんな危険もいとわぬ気がして、そして、マニラで死んだという君枝の父親の気持が、ふつと波のように潜水服に当つて来るのだつた。

こうして潜っている間にも、祖父さんはよちよち俵を走らせて

いるのだと、静脈の痛々しく盛り上った他吉の手足が泛び、次郎は、自分ももし、君枝の父親と同じように、祖父さんからマニラへ行けといわれたら、もう断り切れぬだろうと思った。

沈船作業が済んで、大阪へ帰って来ると、間もなくその年も慌しく押し詰り、大東亜戦争がはじまった。

そして、皇軍が比律賓のリンガエン湾附近に上陸した——と、新聞は読めなかったが、ラジオのニュースは他吉の耳にもはいった。

「ああ、今まで生きてた甲斐があつたわい。孫も立派にやつてる。曾孫も丈夫に育つてる、もう想い残すことはない。わいの死骸はマニラの婿といっしょの墓にはいるネや」

と、他吉は大声で叫びながら、府庁へ駆けつけ、実は自分は

「ベンゲットの他あやん」という者で、ベンゲット道路の道案内をする者は自分以外にはない。リングエン湾附近に上陸した皇軍は恐らくベンゲット道路を通ってマニラへ向うと思うが、自分はあのジグザグ道のどこに凸凹があり、どこの曲り角が向うの崖から丸見えかを知っているのだ、バギオにはアメリカの兵舎があり、うっかりベンゲットを通ると危い、どうぞ自分を道案内にしてくれと、頼みこんだ。

「早いことせな間に合えしまへん。早いとこ飛行機に乗せとくのはれ」

「爺さん、いったい幾つやねん」

係員は他吉の歳をきいて、もう相手にしなかった。

すると、他吉はいきなり凄んで、

「お前らでは判らん。話の判るのを出せ。知事は居るのんか、居れへんのんか」

と、「ベンゲットの他あやん」の姿勢になつたが、途端にくらくらと目まいがして、ああこないしている間にもベンゲット道路のあの曲り角をタンクが通る、婿の新太郎の墓は、船に積んだらどこまで行きやアる、歯抜きの辰に二円かえしといってくれ、マニラはわいの町や、一つには、光り輝く日本国、マニラ国へとおもむいた——他吉はあつと声も立てずに卒倒した。

医者はまだ助からぬと言つたが、次郎と君枝の輸血が効いたの

か、他吉はじりじりと生き延びた。

そんなねばり強さはどこから来たのだろうか。

執拗に保^もつて二月目のある日、×団治が次郎の家で臥ている他吉を見舞いに來た。

ところが、×団治はついぞ着ぬ洋服を着たのは良いとして、まだまだ寒さが去らぬのに、異様な半ズボンでぶるぶる震えていた。

「×さん、頭のゼンマイ狂たんと違うか」

君枝はさすがに看病疲れもなく、こんな訊き方をすると、×団治は、

「さにあらず。実はやな、わいも○○興業の落語の慰問隊たらい
うもんに加わって、南方へ行くことになってん。南は暑いと聴い

たさかい、今からこの服装や」

と、言い、水漬をすすりながら、

「わいの落語も南なら受けるやろ」

嬉しそうに言った。

「お前みたいな老いぼれのおんぽんたんでも、南方へ行けるのか」

他吉は聴いて口惜しがり、

「——どうせマニラも陥落したこつちやし、マニラへも行くんやろ。うまいことしやがんな」

「一足さきに、えらい済まんなあ」

「何がさきや。わいは飛行機で行くさかい、お前の乗ってる船追

い抜いて、お前より早よ着くわい。マニラへ着いたら、他あやんが出迎えに来てへんか、眼のやにを拭いて、しつかり見んとあかんぜ。——ところで、何日出発や」

あさって
「明後日や」

×団治が答えると、君枝は、

「えらいまた急やなあ。お祖父ちゃんが元気やったら、駅まで俥に乗せて、見送つてもろたげるのに……」

と、言つた。

「いや、おおけに。そうなったら、わいも一生一代の人力で、えらい晴れがましいとこやけど、他あやんなんぜまたこんな時に病氣したんやねん。わいの師匠の初代春団治ちゆう人は朱塗りの人

力で寄席をまわって、えらい豪勢やったけど、わいはこの歳になるまで、エレヴェーターには乗ったけど、人力いうもんには、到頭いっぺんも乗らずじまいやった」

「その代り、お前の落語も日本じゃ一ぺんも受けずじまいやったな」

病気で衰弱していても、他吉は×団治に向うと、相変らず口が悪かった。

「その代り、向うでは受けるわいな。なんし競争相手が無いさかいな。それにわいの黒い顔は丁度南向きや」

「南向きやて、なんやこう、貸家探してるみたいや」

君枝は笑った。が、他吉の痛々しく痩せ衰えた顔を見ると、す

ぐ笑いやんだ。

「向うへ行つたらな、イの一番に南十字星見てこましたる思てるねん」

と、×団治は言つた。

「——もう、南十字星でどの方角に出てる星やねんちゆうような、ぼけたことは言わへんぞ。実はな、向うへ行て、空を見て、どれが南十字星か判らんかったら恥やさかいな、昨日うちの会社の文芸部の男に案内してもらて、四ツ橋の電気科学館へ行て、プラ、プラ、プラチナ……」

「プラネタリウム」

君枝は言つて、赧くなった。次郎とはじめて会つた日のことを

想いだしたのである。次郎は今日も築港で仕事していて留守だった。帰つて来たら、×さんがプラネタリウムへ行つたことを話そうと、君枝はちらと思つた。

「それ、それ、そのプラネタリで、南十字星言うもん見せて貰て来てん」

×団治が言うと、他吉の眼は輝いた。

×団治が帰る頃、他吉はなにを思いだしたか、

「それはそうと、×さん、マニラへ行たらな、齒抜きの辰いう齒医者を探して昔わいが借りた二円かえしといてんか。この齒を抜いてもらた時の借金や」

と言ひ、口をあけて、奥歯を見せたが、息切れして、いかにも

苦しそうであつた。

「よつしや、よつしや。齒抜きの辰つあんやな」

×団治は言つたが、二十何年か前、婿の新太郎がマニラから寄越した手紙で齒抜きの辰はとつくに死んでいると承知している筈なのに、今はこの耄碌の仕方かと、さすがにほろりとした。

×団治が歸つてしまうと、他吉は急に精が抜けたようだった。

10

二日のち、四ツ橋電気科学館の星の劇場でプラネタリウム
「南の空」の実演が済み、場内がぱつと明るくなって、ひとびと

が退場してしまつたあと、未だ隅の席にぐんなりした姿勢で残っている薄汚れた白い上衣の老人があつた。

「あ、また、居眠つたはる」

よくある例で、星空を見ながら夜と勘ちがいして居眠つてしまつたのかと、係の少女が寄つて行つて、

「もし、もし、実演はもう済みました。もし、もし」

揺り動かしたが、重く動かず、顔が真蒼だつた。死んでいたのだ。

四ツ橋で南十字星を見たというメ団治の話を聴いて、君枝がメ団治らの慰問隊を見送りに行つた留守中に寢床を這いだして来ていたのか、それは他吉だつた。

上衣のポケットに新太郎がマニラから寄越した色あせた手紙がはいっていたので、身元はすぐ判った。

他吉の死骸はもとの寢床に戻った。

枕元の壁の額に入れられたマラソン競争の記念写真の中から、半分顔を出して、初枝がそれを覗いていた。

他吉の死骸は和やかであつた。

羅字しかえ屋の婆さんがくやみに来て、他吉の胸の上で御詠歌の鈴を鳴らし、

「他あやん、良えとこイ行きなはれや」

と、言うとき、君枝は寢床の裾につけていた顔をあげて、

「おばちゃんお祖父ちゃんは、言わんでも、もうちゃんと良えと

こい行つたはる。南十字星見ながら死にはつたんやもん。見たい見たい思てはつた南十字星見ながら、行きたい行きたい言うたはつたマニラへ到頭行かはつたんや。お祖父ちゃん魂はゞさんより早よマニラへ着いたはりまつせ」

と、言つた。

鈴^{りん}の音が揺れた。

次郎はふと君枝の横顔を見て、ああ、他あやんに似ていると、どきんとした咄嗟に、今度は自分たちがマニラへ行く順番だという想いが、だしぬけに胸を流れた。

他あやんはついぞこれまで、言葉に出しては、アメリカの沈船を引揚げにマニラへ行けとは言わなただけれど、^メ団治が南方へ

旅立つその日、マニラへの郷愁にかりたてられて、重い病氣をおして星の劇場へ行き、南十字星を見ながら死んだのを見れば、もう理窟なしに、お前もマニラへ来いと命じられたのも同然だ、いや、君枝を娶った時からもうことは決つていたのだ。これが佐渡島他吉一家の家風だという想いが、なにか生理的に来て、昂奮した胸を張ると、壁の額の写真が眼にとまつた。

鈴の音がしきりに揺れた。

「良えとこイ行きなはれや」

羅宇しかえ屋の婆さんは泣きながら、

「——寒い時に死んでも、他あやん、お前は今頃は暑い国でようぬく温もつてゐるこつちやろ」

と、言つた。誰も笑わなかつた。

鈴の音で寝かしてあつた勉吉が眼を覚まし、泣きだした。

君枝は抱き上げて、

「船に積んだアラ

どこまで行きやアる

木津や難波の橋の下ア」

子供の頃、他吉が俵に乗せて、きかせてくれた子守歌を小声でうたっていると、ぽたぽた涙が落ちて来た。

「今晚は……」

女の声がした。遠慮がちに低めていたが、それでもきんきんとよく通る声だった。聴くなり蝶子だと判つた。

「蝶子はんや」

君枝は涙を拭いて、

「——あんた、蝶子はん来てくれはりましたぜ」

と、次郎に言った。

「そうか」

次郎はかつて、「蝶柳」で遊んで蝶子や柳吉に意見された時のことをちよつと思いだした咄嗟に、

「そうだ、マニラへ行こう」

声に出して呟いた。

「——君枝もちろん一しよに行くやろ」

蝶子はおくやみが済むと、居合わせた人へ遠慮しながら、

「ちよつと……」

と、言つて、君枝に眼交した。

君枝は二階へ上つた。蝶子は随いて上つて来て、

「あんた、葬式に着るもん持ったはれへんやろ思て、持つて来たげてん」

と、風呂敷包みを君枝に渡した。

「えらい心配かけて、済んまへん」

君枝は蝶子はその喪服をつくつた時のことを知っていた。柳吉の父親の病気がいよいよいけなくなつた時、葬式に出られるつもりで、蝶子はそれをつくつたのだつた。が、参列をはねつけられて、蝶子はどんなにそれを悲しんだことか。

が、それも今は遠い出来ごとで、蝶子の悩みの種であつた柳吉の娘も、去年の暮に結婚して、その婚礼には蝶子も柳吉と一緒に出席したという。

恐らく、この喪服を貸してくれる今の蝶子の気持にはなにひとつ暗い影は射していないであろうと、君枝は思いながら、受け取つた。

「あんたも、両親には縁が薄いし、他あやんはとられてしまふし、ほんまに運がわるいなあ。しかし、次郎さんがしつかりしたはるさかい、心強いわな」

蝶子はそう言つたあと、

「——主人もこの頃はとんと真面目になつてな、酒は飲まへんし、
うっとこ」

食物の道楽もせんようになったし、まあ、夜店の洋食焼きを毎晩食べたがるくらいなもんや」

柳吉のことを嬉しそうに言った。おくやみに来て、亭主ののろけを言うのがいかにも蝶子らしいと、今日一日笑う力を失つていた君枝ははじめて微笑した。

「まあ洋食焼きみたいなもん……」

「そうだつせ、ほんまに情けない。主人ももうあ^{うとこ}んた、そろそろ五十や言うのに、いまだにあんな子供みたいなもん食べたがりまんねん。みつともないこつちや」

蝶子はそんな風に言つたが、ふと想いだしたように、

「——この辺にどこぞ夜店出まへんか」

「さあ……？ 今日は何の日でしたかな」

「えーと……」

考えていたが、いきなり膝をたたいて、

「——そうそう、今日はお午の日や。お午の夜店や。帰りに洋食焼き買うて帰らんと、また、小言いわれる」

ぶくぶく肥満して、屈託の無さそうな蝶子を見ると、君枝は瞬間慰められて、他吉の死を忘れたが、ふと、遠くの汽笛を聴くと、涙がこみあげて来た。

「勝手なことばかり喋って……」

君枝の涙を見て、蝶子はさすがにいい気なことを言い過ぎたことに気がついた。

「そろそろおいとまさせてもらいまひよ」

立ち上り、階段を降りながら、しかし、蝶子はまた言った。

「——あとで、主人が^{うつつこ}お邪魔するかも判れしまへんさかい、なんぞ帳面づけの用事でもあつたら、さしとくなはれ。字を書くことでしたら、間に合いまっさかい」

蝶子はかねがね柳吉の字が巧いのを、自慢していたのである。

「——へえ、おおけに。しかし、お宅かてお忙しいでっしやろさかい、それに、帳面づけや何やかやは、隣組の人がしてくれはる言うことでっさかい」

玄関に立つと、蝶子は、

「そんなら、ここで失礼して着せてもらいます」

と、黒いビロートのコートを羽織った。蝶子の幸福がそのコートに現われているように君枝は思い、なにか安心した。

「さよなら、精落さんようにしとくれやっしや」

蝶子が玄関の戸をあけた拍子に、君枝の眼に空がうつった。降るような星空だった。

青空文庫情報

底本：「織田作之助 名作選集9」現代社

1956（昭和31）年10月31日初版発行

※本作品中には、身体的・精神的資質、職業、地域、階層、民族などに関する不適切な表現が見られます。しかし、作品の時代背景と価値、加えて、作者の抱えた限界を読者自身が認識することの意義を考慮し、底本のままとしました。（青空文庫）

※底本に混在している「狭」と「狹」、「髪」と「髮」、「寝」と「寢」、「奥」と「澳」、「勞」と「勞」、「来」と「來」、「潜」と「潛」、「プラネタリウム」と「プラネタリウム」は、

それぞれ「狭」、「髪」、「寝」、「奥」、「労」、「来」、
「潜」、「プラネタリウム」に統一しました。また、「倅」と
「倅」は底本のママとしました。

※底本に使われている「勘忍」は「堪忍」の間違えと思われるた
め、すべて「堪忍」に直しました。

入力：生野一路

校正：小林繁雄

2001年9月18日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

わが町

織田作之助

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>